

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久三年十二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり
(紙数七五枚)〕

目録

御宸翰文久三年十二月三日密

小松帯刀家族へ与ル書翰

於京師九藩建言尹宮御身上ニ就テ

美玉三平戦死ノ説道島正亮家記

貞姫君近衛忠房公ニ結婚

英国ト和睦ノ終局ニ就テノ説

〔参考〕小松帯刀日記鈔

汽船焼亡ノ報

道島正亮家記

長州糸屋敷ヨリ御届書

櫻木邸ニ於テ忘年会

生麥殺傷事件遺族扶助料払及ヒ軍艦調文

汽船焼亡ノ和歌

將軍上洛ヲ促サムカ為家人ヲ出府セシム

〔赤塚有村大脇ノ三十意見書〕

姓名不詳ノ要書

老西郷大島流竄中ノ事蹟

〔再度ノ島下リ(一)〕

〔全上(二)〕

五代才助上申書器械取寄セ
等ノ件々

〔江田平蔵外三人供被仰付事〕

六〇八 文久三年十二月三日密

御宸翰

別紙愚腹例之打明申入候、抑昨日御面会之砌余程申度候
得共、又々列座之儀十分ニモ難申出候間、漸半口計耳元
寄申入、可否之儀無御分ト氣掛成ニ及御別候、扱申入候

儀ハ昨日モ鳥渡、前閉白モ發言之一件、兼テ予尹宮へ申入度ト存候事ニ候、先昨日承候処ニテハ、尹宮事何カ奸謀有之候儀之一件、実ハ於此方モ何入耳候事モ候得共、強テ不申出ハ有体実ハ無頓着、即右様之儀モ種々申触シ候ハ、即長州ヲ根本トシテ右長州ニ附屬之輩申出、人氣ヲ迷シ、終ニハ予之腹ヲモクツカヘス手段ト存候、是カ即暴人共八月十八日之一条ヲ俗ニヒクリカヘシ、咎之輩(本)「探町ノ」也、再生之手段、右手廻シ足廻シ候策略ニ候間、左候得ハ於予之響策故一説無頓着、強テ發言迄モ無之打捨候、尤又左程迄巨細之儀モ不承候、北野之張紙ト申事ハ入耳候得(本)「當天位ヲ望ム云々等ヲ記ノ、近衛・島津ヲ騰舞ノ文後日別ニ記シヌスヘシ」、共、未写モ不入手候間何共不分候得共、何分尹宮・肥後守等手ヲ組、何カ於石清水誰ト申僧ヲカタライ、咒詛有(本)「毒ノ字ニ当ルカ」之候由、又尹宮予位ヲ取ウハヒ候由之儀風説ニ承候得共、例之風説即戊午年モ有之儀、其時スラ於予ハ一説不頓着(本)「安政五年大獄前後ノコト」、別テ当説去八月十八日之一条ハ、全予憂患払候ハ、會津周旋トハ午申、頓ト元ハ其宮之御周旋事ニ候、十八日(本)「此周旋ハ甚多端ノ事実後日詳記シヌスヘシ」前ニ毎々彼反候テ、兎角其宮へ何事モ不申様各所置之処、密々午予ヨリ文通候テ粗御分リ之事、始テ被存候事モ有之候事ニ候、其モ段々次第至当節候モ、全其方之御尽力予ト手ヲ組万々申入候テ、於當時ハ六ヶ敷トハ申乍、

十八日前トクラへ候テハ拔群之違、又腹心乍前閉白へモカクシ、尹宮へ申入候儀モ毎々ニ候事ニ存候、左候得ハ前文之次第姦人申触シ候連、其ニ予ナヅムヤウナル訳無之儀ハ、賢明之方ニテ御分チ可有之候、疑ヒ起リ候モ、事起リ候テ総テ差違之基ニ候、右様之儀於予ハ前文之儀ニテ、頓着之有無今更無申迄候得共、若尹宮モケ様之風説有ル上ニハ御採用有カ、ヨモヤ有マイ午申様ニヨリ、十之中一ツ二ツニテモトウシヤウシラントオホシメスカナト於尹宮被存候テハ、却テアチラコチラノ疑ニ相成、左様被存候ト、コレマデドウデモナシニ被聞入候、予申条ニモオカシク、自然被取候ヤウノ物左ヤウ候得ハ、其之貌色ヲ見受候へハ、タトヘ詞ニ不出トモデキニ相分候物故、コレマテ御心安クケンクワモイタシ候処、ヒカヘメニイタス、左候へハ又其宮ニモオカシク被存ト申物、(本)「審ノ誤リ也」左ヤウ成候へハイラザル口出来候、右之次第第二成候へハ、矢張姦人之策成就ト申物ニテ心外無此上候、於尹宮モ予腹ハ十分御見ヌキ、於予モ尹宮之心底ハミヌキ候ツモリ、真実之連枝ト存候ニ、左様之姦策カマニ合候テハ実ニ大變故、決テ疑心無之、不相變附合有之度候事、(本)「最ト畏ルコト」右ケ様ニ申モ、於尹宮之様子左様疑ヒ有様ニモ不被存候

得共、前関白申条并北野之張紙不被為見之所置歎敷候、
乍憚一天之為主為身ハ如何〔外候共、人ハヨカレト存候〕
ニ、過日来二度程前関白詞之中ニ、実ニ予一身ニ迫り心
痛之事モ候、〔人名ヲ斯クセラレタルカ〕ニハ右之次第ニモ及候ヤト存候、何
分其方ニオイテハ、決テ従来之朋友之御疑ヒ毫モ有間敷

存候得ハ、打明申入候辺宜聞取頼入候、実ニケ様之事モ
姦策之所置カ目ロミ之間ニ逢ヤウニ成候ヘハ、切〔人名ヲ斯ク記シ玉ヒシカ〕
也、猶又扶助頼入候事、

一三郎へ過日密々遣シ候返書、昨二日前関白ヨリ到来候、
右過日承候辺モ候、疑心發候ニハ無之候ヘ共、右返書
尤三郎腹心之マ、ニ候ヤ、万々一前関白文言世話有之
候ヤ内々尋申入候、此義ニオイテモ、其宮御一人ニ申
入度義モ候事、

一昨日返シ被下候過日御渡シ申候予拙書、弥御周旋被下
候ヤ内尋候事〔此宸翰宮ヨリ写示サル〕
一正親町息一件昨日鳥渡申候ヘ共、強テモ不申候、右ハ
御一人ニ篤ト申入度候儀モ候間、何卒休日之日午御面
倒臨期御出頼入度先申試候事、

一脱走之七人差扣之輩一条モ同様之事、
一於正親町之儀ハ過日モ申入候通、予外セキニ候得ハ少

々愛憐モ付候半、雖然於息ハ深予存意候、右辺ハ如何
敷申条乍、於撰閑家又華族等ハ申ニク、候、聞取辺モ
如何ト其实之事ニ無之候、於尹宮ハ其辺モ毛頭〔人名ノ感〕
辺
別打明申入度儀モ候間、猶御推聞頼入度候事、
今・明日ハ休日ニ候、其余イツ成共御一人御入来密
談イタシ度申入試候也、

十二月三日

文久三年十二月三日当宮へ御頂戴、五日島津三郎へ御伝

達〔御伝達日島津家ニハ詳ナラス、唯十二月トアリ、三日ナルコト達ヲ知レリ、此宸翰写ヲ存ス、返上云々モ御文中ニ記サレタリ〕

更ニ明治廿一年戊子七月六日西四辻公業ヲ以テ御尋被為

在、御内々写取、

六〇九 小松帯刀家族へ与ル書翰

かへす〜いとひ被成候やうぞんじ参候、こほひし
んたにもよろしくいひ玉とあとより遣し候まゝ、そ
のよしもよろしくたのミ参候、何もいそきゆへ申越
したきをしき筆とめ参候、かへす〜もいたみなき
やうにくれ〜もねんじ参候、何も幾久し
く追々と申遣し参候、早々めてたくかしく、
文にて申入まいらせ候、まつ〜さハリなくさゑ〜

しくくらし入事、いか計く、幾久しくめてたくぞんじ参候、こなたにて 上様御きけん御よく入らせられ、ありかたき事ニ御座候、二に拙者もさむさのいたミもなく大元氣にて相勤居、毎日々々朝から晩迄諸方の御使、又うちニ居候せつは客来にて、いつもなから少しのひまもこれなく候へとも、少しもいたミもいたさす大元氣に候ま、少しもく、あんしなされましく候、こなたも当分ハ無事ニ御座候、

一橋様も先日御着ニ相成参候、又々

公方様御上落被仰出、近々御上落のはつに御座候、しかしいまたいつ方と申事ハ相分らす候へとも、正月ニ相成候ハんとぞんじ参候、此御上洛に相成候へハ、今一しほいそがしく候ハんとぞんじ参候、

貞姫様も来ル十日ニ御着之はつにて、色々此方の御用もこれあり、中々いそがしく御座候、俄に 御内婚之事も仰出され、無こしのしめかちん上下等俄にこしらへ方ニ取うつり参候、此上いつこう

平野へ参詣もいたさす候ま、一昨日日からもよろしく御座候テ、参詣ともいたし参候、此兩日は雪もきへ、

肌持もよろしく相成仕合に御座候、其方いか、御座候哉、何事もこれなく無事のこととも折、承り、仕合にぞんじ参候、よし利はいか、御座候哉、肌持もよろしきはつとぞんじ参候、当年はとしもよし利にて重ねられ候ハんとぞんじ参候、いまた御下りも相分らす、いつれ来二月方ニ相成候ハんとぞんじ参候、少しにても相分候ハ、直に申遣し参候、成たけ早々御供にて下りたくぞんじ参候、此方御やしき中も無事にて、大きにく仕合ニ御座候、昨日奈良原便より一筆申遣し候ま、相と、き候ハんとぞんじ参候、去年越後屋へ注文の品とも出来いたし候ま、拙者のハ此方ニとり、そなたの品は遣し参候ま、うけとりなさるへく候、別紙ニかきつけ歳暮之しるしとして遣し参候ま、よろしくうけとりなされたくぞんじ参候、細々に申遣したくぞんじ候へとも、大きにくとりこ、他国の人の客毎日々々々々ニこれあり、いそきゆへあらく歳暮かたくとりつかね品とも遣し参候、まづは幾久しく万々年とめてたくかしく、

十二月四日

小まつ帯刀

無事平安

お近との
人々

〔島津忠承氏藏本にて校訂〕

六一〇 於京師九藩建言（尹宮御身上ニ就テ）

十二月七日ヲ以テ於京師九侯連署ノ建言左ノ如シ、

慶喜一橋

〔松平〕
慶永老候

〔松平〕
容保会津候

〔伊達〕
宗城宇和島候

〔福井〕
正邦能候

〔黒田長包〕
慶贊福岡世子

〔島津〕
久光国父候

〔細川〕
護久長岡登之助弟

護美長岡良之助弟
熊本侯四弟

此節尹宮御上ニ於テ種々浮説相起候趣ニ承知仕、驚愕之至奉存候、素ヨリ宮

皇国ノ御為御心力ヲ被為竭候御誠義候ハ、一同深ク奉

感服依頼候儀ニ御座候処、右様流言被行候儀ハ、

皇国一層之危殆ヲ添候儀ニテ、何共戦兢恐懼之極地ニ

奉存候、

聖明ニオカセラレ夫等之迂策ニ

御動揺可為在御儀トモ奉存候得共、奸邪凶嶮ノ正義ヲ妨ケ、骨肉ヲ傷害仕候ニ離間之策ヲ用候ハ古今同轍之義ニテ、昭然タル事ニ御座候得共、其策之成敗ニ因テ天下国家之安危存亡ヲ分チ候儀、和漢共ニ其証跡分明之事ニ候得ハ、仮令

聖明ニオカセラレ御嫌疑之叡念不被為在候共、消骨鏢金之姦計朝野ヲ煽惑スルニ至リ候テハ、以之外ナル御大事ニテ、

御間柄ニ於テ

御隔隙一度相啓候テハ

皇国之綱維御挽回之期モ絶果候事ト相成、臣等乍不及身命ヲ擲テ尽力仕候所詮モ無之、誠ニ赤心空敷、讒間之為メニ挫折仕候テハ、実ニ不堪歎泣之至候得ハ、此時ニ当リテ、宮之日月ヲ被為貫候

御高義御忠誠ハ、臣等社稷ニ換ヘ死ヲ誓テ奉奏上候間、仰キ冀ハ、確乎タル

聖徳愈泰山之不動ニ比セラレ、

皇国万安之

御鴻基ヲ被為建候様、臣等叩頭泣血闕下ニ伏テ奉企望懇願候、誠惶頓首敬白、

〔天明天皇紀にて校訂〕

十二月七日

斯く各侯連署建言セラレタル、其因テ起ル所以ハ、長州或ハ浮浪ノ徒宮ヲ惡ムノ甚シキハ、渠等カ私意ヲ恣ニセントスルヲ得ザルニ出タリ、茲ヲ以テ種々附会ノ説ヲ醸シ、訛言紛紜タルニ至ラシメタリ、宮ハ元來忠誠ニ他ナク、日夜心思ヲ勞シ玉フニ依リ、御内ノ輩八幡ノ坊官ニ依リ御安全ノ祈願ヲナサシメタルニ、浮浪ノ徒之ヲ聞キ、天意ヲ望ミ玉フノ意アリテ、恐クモ

主上ヲ調伏セラレシト其坊官ヲ暗殺シタリ、或宮之天位ヲ望マセ玉ヒ、御冠モ

天冠ニ擬シ製セラレタリト様々流言シタリ、如斯ナルカ故宮ハ大ニ憂ヒ玉ヒ、独ヲ慎ムニ若スト參

内ヲ憚リ、閑窓ニ愁吟シ玉ヘリ、是故ニ九侯ハ長藩及ヒ浮浪ノ姦謀ニ出タルヲ明察セラレ、連署建言セラレタル者ナリ〔(本) (再夢紀事及ヒ久光公親話記参照)〕

六二一 美玉三平戦死ノ説(道嶋正亮家記)

亥十二月十六七日方ノ説ニ、〔高橋親輔〕 (宋)〔燒野〕 美玉三平〔武村ノ正中〕 石州辺ニテ鉄砲ニテ被打殺候由、十五六人同列ニテアル村ヘ差越、当秋取納米半方ハ百姓共ヘ可為取ニ付、我々共

ヘ相從ヒ候様種々申達候処、百姓共承知イタシ、別テ相喜ヒ候姿ニテ、左候ハ、何方ヘ相集リ其段可致談合候旨申入、或寺ヘ集会相催、浪人共モ一口ニ相集リテ取籠メ責立候由、十二三人ハ自殺イタシ、美玉ハ逃行候ヲ追駈、跡ヨリ鉄砲ニテ打留、首ノ根ノ辺リヲ打抜候由承候事、

但美玉カ被打候儀ハ虚説ナリトノ趣モ相聞得、又長州ノ台場ノ大将ニ成リ居候トノ風説モ、子正月十八日承候ヘトモ、今ニヲヒテハ何方ヘモ不相見得

候間、石州ニテ殺シ候儀実ナラン、〔(本) (再夢紀事及ヒ久光公親話記参照)〕 一西郷善兵衛去夏冲良部島ヘ遠島被仰付、稠敷座罫ノ内

ヘ被入置候処、此節又々御赦免、子三月初方蒸氣船ヨリ吉井中助〔(本) (再夢紀事及ヒ久光公親話記参照)〕 其外迎舟被遣、三月末方上国イタシ、直ニ京都ヘ罷登候由ニテ、御軍賦役被仰付候ヨシ承居候処、

此節御小納戸頭取ニテ御用取次被仰付、御上京迄ハ御側御用ヲモ兼相勤候様被仰付候由、

但英舟入侵戦争後、草牟田御屋敷ニテ

三郎公被仰ニハ、西郷モサルモノナリ、今ハ呼返シ候テ可然旨御沙汰被為在候処、誰一人御答申上者モ無之候処、小松殿ヨリ善兵衛ハ谷山ニテモ可〔(本) (再夢紀事及ヒ久光公親話記参照)〕

被遣モノニ御座候得共、御仁慈ヲ以遠島ニ被処候
間、御返シニハ及マシク旨被申上候処、夫ヨリ段
々ト悪シク申ナシ候者多ク為有之候由、其内大久
保一人何トモ不申上候由、シカレハ此節ニ至リ格
別御採用被成候事、ケ様ノ訳ハ前条ノ風説モ虚カ
実カ何分不相分候、

六二 貞姫君近衛忠房公ニ結婚

十二月十八日

国父公御養女貞姫君近衛大納言忠房公へ結婚ノ式行ハ
レタリ、貞姫君ハ其実島津兵庫久長第三女、則チ岩松
久寶ノ姉、母ハ喜入攝津高カ妹ナリ、○斯ク結婚ハ
去ル文久元年ノ秋ヨリ中山仲左衛門（采妻）助（當時へ尚之）呼（ト呼ベリ）上京、御
結婚ノ約託ニ及ハレタリ、這ノ御結婚ハ則チ御結婚ナ
リト雖トモ、其際或ハ国父公

尊王ノ御誠心ヲ近衛殿ニ告ケシメ玉ヒシニ、近衛家ハ
有志ノ堂上方ニ密示セラレ、而シテ（文久元年ノ部）
叡聞ニ達セラレタル事情アリ、是ヨリシテ

主上ハ国父公カ照國公ノ尊志紹述セラレ、

皇威挽回ノ道奮然発願セラレントノ御誠意ヲ知シ召サ

レシ者ナリト、如斯キ深遠貴重ノ故アル御結婚ノ御談
話、此日ニ至リテ結了セリ、
（頭註志）「近衛家阿日記及ヒ御婚礼記參看」

六三 英国ト和睦ノ終局ニ就テノ説

亥十二月廿日比ノ説也、

一英国ト御和談相成、此御屋敷初英舟ヨリ扣請（招カ）ニテ日本
前講結成、馳走ニテ寄組打解タル事ニテ、ケ様ノ交リ
無之候テハ、イツ限リナキ争戯ノ事ニテ、士卒モ殊ノ
外イヤカリ、相互ニ仕合成事也ト形々モ可返ニ相成候
由、

右ハ此内櫻田御為談相濟相分、則生麥一条和談相成、
夫ヨリ長崎ノ事ニ成立候半ト存シ候、

六四 参考 小松帯刀日記鈔

一橋様先日御着ニ相成、又々公方様御上洛被仰出、近
々御上洛之筈ニ御座候、

六五 汽船焼亡ノ報

十二月廿四日ノ夜長州田之浦ニ於テ、我カ汽船大坂ヨ
リ長崎へ通航セント同浦ニ乗掛リシ時、長州砲台ヨリ

狼リニ放撃シ、為メニ破壊沈没シ、乗頭及ヒ士官其他
二十一名死亡セリ、此汽船ハ幕府ノ所有ニテ、長崎製
鉄所ノ所轄ナリ、長崎へ至急ノ藩用アリテ、一時借り
受ケ廻航スル者ナリ、○溺没セシ人々ニハ乗頭兼機関
長宿彦右衛門及ヒ兒玉雄之助・鎌田諸右衛門・梅田
市藏、

以上士分十一名、其他ハ運用方或ハ機関師ナリ
シタル始末ハ、元治元年正月三日馬関ニ於テ土持平八(今佐平太)、
及市来正右衛門(四郎旧名)兩名カ彼藩士ニ問答ノ条ニ詳ナリ、
長州砲台
ヨリ彈擊

六一六 汽船田之浦ニ於テ砲撃ノ為メ焼亡ノ説

(道島正亮家記)

亥十二月廿四日夕方、公義御借舟此御方へ御貸ニ被成
御約束相成屋候由ニテ線
綿千六百本位、此外ニ御品モ可有之、大坂出帆ニテ下關
近辺田浦通帆ノ砌、長州ヨリ大砲打掛候由、其時ハ西
ノ上リニ殊ノ外大込リニテ蒸氣ヲ強ク相立候処、銅機
ヲ相破リ綿へ火移リ焼立、宇宿彦右衛門初メ大方死亡、
青願寺ヨリ咄イタシ候処、実正ノ事ニテ候由、正月三
日記ス、

六一七 長州糸屋敷ヨリ御届書(前記ニ対ス)

六一七ノ一

昨廿四日夜戌ノ刻過、蒸氣船軍艦何国ノ船共不相分上
筋ヨリ(誤也)諷来、長門国豊浦郡赤馬關(ヲカ)合通船候処、同所へ
差出置候宰相警衛人数并未家毛利左京亮警衛人数共一
同大炮数發打掛候処、夷国軍艦右ノ炮声ニ恐レ候哉逃
出シ候処、軍艦中ニ有之候火薬ニ火移リ候ト相見へ、
忽右軍艦破烈ニ及、乗組人数一人モ不残海没致、依之
死体并器械員数駈ト相分不申候、此方手負死人一人モ
無御座候、此段不取敢早々御届申上候、以上、

十二月廿五日

六一七ノ二

十二月薩州ノ商船、兵庫ヨリ將ニ長崎ニ至ラント豊前田
ノ浦ニ碇泊ス、長州ノ砲台ト相距ル遠カラス、長人以テ
外国船ト為シ之ヲ砲撃ス、薩藩大ニ之ヲ啣ム(朱)「(市来談
判参照)」

六一八 櫻木邸ニ於テ忘年会

十二月廿六日

国父公ハ二本松邸(二本松邸ニアラス、近衛家
ノ桜木邸ヲ拝借セシナリ)ニ於テ忘年ノ会ヲ
催サレ、国老其他御近習ノ輩ヲ召サレ、書画詩歌様々
各御興ヲ添ヘタリ、其時左ニ詠シ玉ヘリ、

大君のふかき恵をうくる身は

年の暮るゝも知らずそありける

大比叡の雪の光のうつろひて

弥清き加茂川の水

六一九 生麥殺傷事件遺族扶助料払及ヒ軍艦調文

以書翰申入候、我客歳ノ秋東海道生麥村ニ於テ英国商人ヲ殺傷ニ及リ^(ルカ)一条ニ付、此程松平修理大夫家来并ニ島津淡路守家来其方へ及引合候処、談判平穩ニ纏リ罪人探索罰シ候旨、証書ハ修理大夫家来ヨリ相渡、扶助金ハ淡路守家来ヨリ相渡、其許ヨリモ和平ノ証トテ軍艦買入方周旋ノ書面相渡シ、事件落差致シ候趣為立合差遣セシ我政府官吏ヨリ委細領承シヌ、兩國永久ノ親睦ヲ保スル為ニ欣然ノ至、此段申入度、不具謹言、

十二月

御老中連名

六二〇 汽船焼亡ノ和歌

下ノ關ニ於テ我綿船長藩ノ為ニ焚カル、ノ報有リシ時、其尋問ノ為使命ヲ受テ出発セントスルニ際シ、師翁ノ贈ラレシ歌、

正風かこたひの出たち、はや四方に使用するたくひか

は、やかてほのほをわけ、やいはをふむににたり、

さはいへ、

知紀^八

とこゝろの劍かさして行道に

むかふおろちのあらんものかは

君かためまことのみちをふむなれば

みちひく神のなからましやは

六二一 將軍上洛ヲ促サムカ為家人ヲ出府セシム

国父公ハ春來數回ニ及ヒ御上洛ノ

勅促、或ハ中川宮及ヒ近衛家御父子其他正義ノ公卿方ヨリ頻リニ勸促セラレ、戦争後日モ尚淺ク、英夷再侵ノ備防等甚多事ナルモ閣キ玉ヒ、上洛セラレ、將軍家上着ノ上ハ天下ノ大計鎖攘ノ可否ヲ決定シ、

皇威確立ノ策ヲ立ラレント着京ヲ待タセ玉ヒシニ、江戸出発ノ期限モ発セラレス、幕吏中異論紛紜タルノ際大城焼亡、之レカ為上洛延遷ノ説起レルヲ聞シ召シ、若シ然ランニハ、天下ノ大計何レノ日ニ立ツモ知ルベカラス、遂ニ謂フベカラザル事ニ立到ラント頗ル痛困

セラレ、島津〔久壽〕主殿及ヒ吉井仁〔元〕右衛門・得能良助等ヲ関東ニ下サレ速ニ上洛、国是ノ大策定メ玉フベキ旨稟請セラレタリ、此時島津・吉井ノ輩ハ昼夜兼行江戸ニ下リ、在邸岩下〔方〕等ト議シ、総裁職〔當時總裁職川越候ナリ〕及ヒ閣老等ニ向テ、時勢ノ切迫

朝暮機運ノ興廢ヲ痛論シ、迅速上洛アラン事ヲ請ハセ玉ヒシニ〔叙述編年ニ、我ノ火船一艘ヲ關東マテ廻ラシテ御上洛ノ御支度ニシテ供ヘ玉フト記セリ〕、漸クニシテ上洛發途ノ期日發布セラルニ至レリ、十二月廿七日發途、而シテ一橋殿及ヒ総裁職松平大和守〔直〕ハ〔越前春嶽公辭退ノ後川越候任セラレタリ〕〔頭註小〕「再夢紀事參看」依テ新總裁ト通稱ス 先發セラル、旨モ發セラレタリ、

六三二 赤塚有村大脇ノ三士意見書

口上覚

爰許風俗ノ儀余程衰微仕候ニ付、六七ヶ年跡ヨリ土風盛ニ奮發仕候様、精微ニ同意ノ人数ニテ吟味仕、組頭役場へ数度申出候得共、始終其詮モ無御座敷ケ敷奉存候処ヨリ、近比恐多奉存候得共、御方様杯方へ御伺申上、御地頭様方ヨリ風俗沙汰ノ義、屹ト被為在度旨奉願上候、御地頭所へハ御取次衆へ所役々ヨリ取次ヲ以テ可申上筈候得共、文武振起リ候様所役場へモ毎々申

出候得共、只緩ケセニシテ取上等無御座ニ付、役々へ私共ヨリ申出候テモ所詮相叶サル事、依之私共御取次方へ直ニ可申出カ共奉存候得共、是又決シテ明將不申ト奉存候ニ付、無是非処ヨリ恐ナカラモ御附衆へ差越、直ニ御伺申上候テモ、何ノ差支可申事ハ有之間敷哉ト、能々吟味仕候処ヨリ、先達テモ御貴宅へ参上仕候処、只アラマシノ咄申上候処、一書ヲ以テ申出候様被仰聞候ニ付、此節一書ヲ以テ申上候、左様思召可被下候、以上、

一 当六月中日比ニモ五六ヶ条ノ書付ヲ以テ、年寄・組頭・横目両三役ノ宛書ニテ申出置候得共、為何事モ無御座候、然ル処程ナク異国船渡來仕、誠ニ大騒動ノ由、爰元一組ハ櫻島瀬戸村へ張出シニテ、帖佐〔給良郡〕松原ノ浜ヨリ差越申候、瀬戸村へ廿日計滞陣ニテ、先仕合無事ニ帰郷仕中候、就テハ其ヨリ追々武備奮發仕カト奉存候得共、始終所中安閑トシテ御軍役備モ無御座、誠ニ敷ケ敷次第奉存候、又候異船再度入來候モ難計、臨其節ニ後悔スルハ安中ノ事、眼前ニ差見得タル大事ヲ事共セス、始終安閑トシテ罷暮候テハ、甚上様ニ対シ不忠ノ至リ、私共同意ノ人数節々出会仕明暮申合候得共、只

内々ノ事ニテ何ノ役ニモ立不申、然処ヨリ此節ハ是非共御方様杯へ御伺不申上候テハ不叶事ニ付、私共ケ茶書ヲ以テ申上候、以上、

一 於所々第一郷士年寄・組頭ノ間人物正キ物無御座候テハ、其外諸役場末々凡下百姓・町人ニ至ル迄、始終上下貴賤ノ称モ無御座、動モスレハイタツラニ酒会杯相企、勿論蒲生〔松島郡〕ノ風土輕薄ニシテ、全体燒酎吞ノ処ニテ御座候得ハ、役々ヨリ彼是氣ヲ付置、色々酒会等杯不取企、其々分限ニ応シ何力出精可仕様、役々下知不仕候テハ不叶御時節柄ノ事、私共第一御国家ノ為〔虫〕

數年精微ニ吟味仕、組頭杯へモ數度申出置候得共、役々緩セニシテ全ク其詮モ無御座、何ソ私共私欲ノ事ニテハ毛頭無御座、

上様ノ為ニト計仕事ニ御座候得共、役々ノ内ニ不汲請ノ物モ間ニハ有之、私欲ノ様ニ推量セラレ、誠ニ残念至極ニ奉存候得共、彼様ノ儀ハ毛頭無御座、色々書認申上候テハ、誠ニ只輕薄アリサツラ敷様ニ脇ヨリ見得候得共、私共儀ハ実ニ歎ケ敷奉存候間、何卒宜敷御吟味ヲ以テ御改革有御座度事、

一 郷士年寄役之本役四人・助役兩人合六人ニテ御座候処、

本役ノ内一人退役仕候ハ、助役兩人ノ内、古役ヨリ退役ノ跡ニ役進ミ可仕事、当然ノ事ニ御座候得共、年寄助役ヲ差越、組頭ノ内古役ヨリ直二年寄本役〔虫喰〕被上候事、此近年姦物者共ヨリ始リ、是以甚不然事、年寄助役長々苦勞仕ライ候〔力〕ヲ、組頭ヨリ飛越候テハ誠ニ不宜事、此等ノ儀ハ屹ト御改革有之度事、

一 組頭ノ儀当分ハ九人ニテ御座候得共、蒲生ノ義ハ四組有之処ニテ、一組ニ一人ツ、四人ハ当然ナル事ニ御座候、左候得ハ助役一人・重組頭一人總テ此比マテ六人ニテ御座候処、跡年又々三人ノ組頭被仰付、此三人ノ内兩人ハ格、一人ハ重組頭、甚存外ナル事到来仕、諸人一統不納得ニテ、所ノ為ニモ相成不申候、是以年寄ノ内姦物ハ縁引ヲ以テ仕業ノ事ニハ無別条候、是又何卒御改革有之度、御吟味可然様御頼申上候、

一 所役替ノ義ニ付テハ御取次ハ差置、御附衆ヨリ何力引請事嚴重ニ御取計無御座候テハ、逆モ相叶不申訳ト奉存候間、今通リニテハ役替ニ付テハ賄ケ間敷、所頭役姦物ハ勿論、御取次御方へ過分ナル物之由、甚風俗ノ妨ニ相成、全当御時節ニ不相叶、学問・武術ニ志ス折角ノ二才共ノ邪魔ニモ罷成、或ハ外聞ニモ相拘り、彼

是トシテ甚不可然事、此等ノ儀屹ト無御座候様、御取計可被下義ハ相叶申間敷哉、トフソヤ宜敷様御頼申上候、以上、

一於所々往古ヨリ仕来リノ事数多有之内ニ、此節大菱革ノ時節ニ不叶儀モ過分有之、取除度トハ奉存候得共、

士風盛ニ直リ立申上候、ヲノツカラ此等ノ義ハ立退様ニ罷成可申ハ無別条ノ所、内旧例ノ義ニ付テハトフモ難申上儀有之、大御菱革ニ付テハ難申上トハ不被申事候得共、是ハ扱置、当時差掛リノ御軍役備ノ儀第一ノ事ニテ、武盛ニ成立候様御取計可被下候、

一市中ノ者共町門ヨリ外ノ武衛路ニ見セ座^(店カ)ヲカマヘ、大概二十家内計住居申候、全風俗ノ妨ニ罷成、是以本々

ノ町屋敷ヘ立退候様、所役場ヘモ申出置候得共、始終其詮モ無御座候、勿論市中ハ火用心モ無御座候、火差起候テ釐ノ真中ニテ風有之候ハ、御仮屋杯ハ勿論釐中無残焼失ニ相成可申ハ安中ノ事、其上武士ノ屋敷ニテ商売仕ハ、生長スル童子ノ妨ニ相成、又ハ他郷ノ人ヨリ見分ト不宜事、中ニモ釐ノ真中ニテ何所カ片端杯ナラハ、往来ノ人モ氣寄不申候、甚見苦敷次第、此二十家内ノ内ニモ加治木町人モ七八人家内中宿仕居申候、

此中宿ハ甚タ不届千万ナル者共ニテ、動モスレハ所ノ難題ニ相拘事、先年ヨリ数度仕出シ、本ノ加治木^(給良郡)ヘ差送り度ト蒲生中ノ人咄ハ仕候得共、其儀無役ノ身トシテハ迫モ相叶不申、釐ノ真中ニ米屋・焼耐屋又ハ反物屋杯色々見セ店差出シ候テハ、甚風俗ノ妨ニ罷成、悪キ事トハ眼前ニ差見得タル事候得共、色々所頭役方ヘ町人共ヨリ手ヲ入居候ニ付、始終立退候吟味役場ヘ無御座候、此様ナル所内ノ事ハ所役々吟味次第ニハ候得共、些御方様杯力ヲ借不申候テハ、トフモ不叶事御座候間、是又思召ヲ以テ御改革有御座度事、

一是迄ノ悪弊ハ咎テモ詮ナキ事、是ヨリ先々ノ為ニト取計可申事第一ノ事ニ奉存候間、就テハ右ケ条書通彼是手ヲ付置、終ニハ学問所新規ニ立度含ノ事ニ御座候得共、先少々ツ、悪弊ヲノソキ置、漸々トシテ終ニ文武館相建申候処、偏ニ奉希候、其節コソ士氣盛ニ罷成、蒲生中ノ為ハ勿論、近郷迄ノ手本ニモ相成、其上御地頭様ノ御名目ニモ相拘リ、其時節ヲ奉待、学問所ヲ根本トシテ、其二付テ色々千變万化事ヲ尽シ申上候、実^(虫喰)ニ^フ大菱革ニ相叶可申ト奉存候間、乍恐此等ノ義モ何卒別段ノ御吟味ヲ以テ文武館相建候処、偏ニ

御頼申上候、以上、

一御取次御方ハ御地頭様方ヨリ何カ御差図ノ節、所役々方へ取次有之筈、又ハ所ヨリ御地頭所へ可申上儀有之節、御取次有之筈奉存候間、蒲生ノ儀ハ全体ムカシヨリ役目ヲ重ンジ、役替ノ節ハ爰役所ヨリ中々願出シ、所頭役へ相附願出ス者モ有之、又御取次方へ直ニ差越願出ス物モ有之、中々賄ラシク事ニ御座候処、是以御改革有之度、是迄ノ間先キノ御取次ノ時節ハ中々手ヒドク有之、当分ノ御取次ハ何様ノ事モイマタ承リ不申候、何レ御取次ハ正キ人ニテ無御座候デハ、直ニ所ノ風俗ニ相拘リ可申事、役替ノ儀付テハ、所ノ姦物ト御取次双方ヨリ和合仕、新物過分ナル物ニ、終ニ是迄ノ間ハ役義片附申候、是以テ不可然事トハ役々ヲ初メ只内々申事ニテ、歎ケ敷次第奉存候、宜敷様御頼申上候、一御地頭様御方ヨリ時々何カ緩ケセニ無御座候様、所役々へ御差図有御座度、左様御座候ハ、役々混ト恐入、私身ヲ初トシテ所中へ中渡シニ相成申候ハ、余程蒲生中ノ為ニ罷成事ニ御座候、宜敷様御頼申上候、一爰許ノ衆俗不宜処ヨリ、私共申談毎ニ所役場へ風俗立直リ候様申出候得共、夫成ニテ役々引占テ吟味有之廉

モ無御座、実ニ歎ケ敷奉存候処ヨリ同類申合、先年ヨリ毎年十二月十四日ニ義臣傳読仕候、就テハ本書痛候ニ付、十四人ニテ銘々一冊ツ、相請取写方仕、此人數ニテ当分モ迫リ立ニテ毎年読方仕申候、又氣寄ノ人ハ其晚ハ外ヨリ段々參リ申事ニ御座候、是又自然ノ事ニテ、我前ヨリ思ヒ立出席ノ方モ數多有之、全体（其應）ニ事ニ奉存候、シカシ又二三ヶ年間ヲ置候テ、關ヶ原軍記平ガナニテ有之候ヲ、真カタガナニ直シ写方仕、毎年九月十四日ニ読方仕申事ニ御座候、此人數モ矢張義臣傳ノ人數中ヨリモ有之候、如此読方仕事モ、元來蒲生ト申処一統輕薄成ル風土ノ場所ニテ、咸物ノ者共勝ニテ段々惡事ヲ相企、良モスレハカンブツノ事勢立、能キ志ノ者共相少ク誠ニ以テ心痛仕、残念至極ニ考ル所ヨリ、一人ニテモ善道ニ引勧メ申度処ヨリ、始終精微ニ吟味仕、彼是手ヲ付、右ノ通り相企タル事ニ御座候、何卒御方様杯御吟味ヲ以テ御改カハ有之度事、一当分於御飯屋ニ學問・武術ノ式日モ建置、學問式日ヲ月ニ一度相究置、其時節ハ二才兒打込ニテ大概四十人計モ出席有之、私共ヨリ六七人ニテ交ニ關取ニテ読方仕、相澄次第総テノ人數素読仕申事ニ御座候、其節ハ

月番組頭衆ヨリ差引ニ出席有之候様相究居候得共、組頭ハ一度モ出席無御座候、私共ヨリ引請差引仕事ニ御座候、是以甚届サル事ト奉存候ニ付、是非組頭出席有之候様、組頭月番ニ申出候得共、無其儀終ニ出席無之由、且又武術ノ儀ハ梅田家鱧水ノ流・東家並有川家示現流・心影流毎月一度ツ、於御飯屋ニ有之候間、左候テ晩々ノ式夜ハ、月ニ三度ツ、御飯屋稽古所ニヲヒテ書物ノ素読有之候事、其節モ私共出席仕事ニ御座候、三度ノ間ニハ二才共計リ文武ノ修行ニ行事ニ御座候、此等ノ儀ハ先鬼哉角ト行進罷申候、

一御飯屋ノ式日外ニ、私共同意ノ人数ニテ学問式夜建置、交ニ鬮取読方仕申候、此式夜ノ儀ハ六七ヶ年跡ヨリ相企居候処、矢張当分迄モ能行レ罷申候、悪キ方々流入、二才共過分有之候得共、当時善道之方ニ志アル者共段々出来申候、先年ヨリトハ風俗モ格別相違仕申候、左様御承知可被下候、以上、
一爰元御飯屋或ハ脇々ニテ文武修行ノ式日モ有之、年中ノ出席人数ノ星帳屹ト相認置、年末十二月下旬ニ御地頭様方へ出席帳差出候様相究居候テ、余程宜敷事ニテハ有之間敷哉ニ吟味仕申候、何卒々々宜敷様御吟味御

頼申上候、以上、

右之通乍恐一書ヲ以テ中上候間、何分御氣寄ヲ以テ可然様御取計可被下儀奉頼候、何ソ表向可中上儀ニ無御座候間、御手前様迄ノ事ニテ御座候間、左様御承知可被下候、若外聞ニ相拘リ、蒲生へ相聞得申候ハ、私共役々ノ敵ニ罷成甚不可然事、シカシ又事ノ成就可任事ニ付テハ急々ニハ迎モ不行、漸々ト節ヲ相待、自然ト変化スル様ニ不仕候テハ事不行、蒲生ノ風俗ハ大概名ノ通りノ事ニテ御座候間、余ハ是ニ順シ御推察可被下候、以上、

亥十二月

有村甚四郎

赤塚源太郎

大脇正之進

山田小平太様

(朱) 此三名大口郷ノ士ニシテ、山田當時地頭副役ナリ

六三三 姓名不詳ノ要書(藩内不平和ノ筆ナラン)

六三三ノ
當時人氣混雜及紛乱候基ヒ、大概御深察モ可被為在賦ト奉恐察候ヘトモ、大意事情等細々相探候次第、逐一左条ニ奉申上候、

〔卷一(齊興公)〕

一亡高輪様御在世中天下ノ人氣井伊奸計ヲ被施候付、諸侯御有志之御大名方初諸藩臣ニ至迄、奸惡ノ致取扱折

柄、鎌田出雲下国之砌、無抛扱合ニテ暫ク滯京被致候

折節、陽明家杯ヨリ段々不容易被蒙御内命、其上品々

御懇之御意共承知被致、既ニ滯在中所謂諸浪士トヤラ

公武御不服之扱杯ノ評説モ有之、無和理陽明家ヨリ薩

州侯ヲ兎角御力ニ思召外無之、守衛人数差出呉候様御

願出ニ付、無抛御情合之御事故、出雲御受書迄モ被致、

無程被罷下候所、

〔朱〕(齊彬公)

太守様御隠レ後ニテ力ヲ被落、高輪公之上官中江左

様ノ事共難申解、殊更豊州家勤役中ニテ、実ハ

順聖院様御在世中思召有之、後迄モ悉ク御取込相成候

折柄ニテ、是又一統ノ人氣モ紛々ニテ、

陽明家ヨリ御願入之事トモ千万相整候勢無之、壮士之

モノトモ京師ヨリノ御趣意モ相拒、イツレ此上ハ、異

変ノ節ハ突出可致杯ト申合ノ人数モ相応ニ有之、其後

高輪公御没後當御代ニ相成、左衛門再勤ニテ、何事モ

三郎様江時々御相談被遊、御政事ニ付テハ身命ノ限り

ト被尽微力、御役進退等ノ所迄モ一々御打合ニテ、正

邪明白御所置被為在、兎角本ヲ居先御代ノ通御合体ニ

テ御政事向被遊、一統ノ人氣四民ニ至迄拳テ難有ク、
順聖院様御代ノ如ク一体振舞モ有之、イツレ本法ノ御
政事被為調度、第一下情モ能ク相通事来候処、諸浪士
共既ニ京師紛々成立候テ、

朝廷之御危難旦夕ニ御差迫リ候杯ノ風説ニテ、段々探

索方ニ被差出、且此已前亡命イタシ候關山ノ家来蘭牟

田昌平ト申スモノ御国元之様忍込、日州表閑道筋為取

締方、御裁許掛・廻筋横目杯不審ニ考ヒ召捕、則及糺明

候処取行相誤、諸書附等数通相携居、其内ニ御密書ト

相見候物モ為有之由、其俣御当地へ差廻シ候処、表通

及糺方候テハ、第一君側四五輩江相拘訳モ可有之候哉、

尤初發密ニ差出候後相願レ可申ト手ヲ廻シ、表通大監

察方江不被差出内、君側之者御裁許掛方江參リ、此節

被召捕候者前段重キ御用筋ニテ、御側ヨリ被差出置タ

ル者故、諸書附類御渡給候様再三為申由候へトモ不承

知ニテ、我々儀御用命ハ夫々大監察ヨリ承知待ト取行、

右方江不申出内御渡シ申上候儀、決テ御断ト申捨置、

職分不相叶、当然之所ヲ以相答候由、又々參リ

三郎様御内沙汰故相渡呉候様強テ承候由候へトモ、知

評ノ形行ヲ以相答置候由、不及是非其場引取筋ニ監察

方江為差出由、基彼等共極密ニ相謀候後有之故、御内用ノ訳ヲ以監察方江不相響様取計可申賦ト被察申候、段々承得候処、〔伊半由正平〕蘭牟田昌平へ谷山町人は枝柳右衛門名〔眞五〕前ノ者道伴ニテ忍出候由、御当地ニテハ小松家モ森山〔築園〕東園所へ為相忍、尚又京師辺ノ都合向ヲ彼等へ託為相謀候由、旅用金等モ相当入り、蘭牟田並谷山町人同道ニテ五日ヲ不過再ヒ出立為仕、其節蘭牟田昌平申出ニハ、〔縁助〕田中河内之助ト申モノ格別成中山侯ノ謀士ニテ、〔米〕一休〔近衛家及ヒ粟田宮ヲ云〕主上江密路有之、尤御危難ノ次第モ細詳為申出趣ハ、其節致取扱候御裁許掛ヨリ慥ニ届申候、京師ノ方へ是迄密ニ致掛引候モノ共、専田中河内ノ介方へ前陳之蘭牟田並是枝柳右衛門兩人へ託置相謀候儀、別条無御座候、

一昨春御上京前〔道隆〕以柴山愛次郎並橋口壯助〔縁三〕ト申者、江戸亂合方詰之名目ニテ俄ニ差出、〔米〕勿論兩人儀ハ〔獨ケテ逃ケタリ、當時喧ヘタリ〕學問等モ相応ニ有之、諸有志江引合、此節御上京ノ上ハ是非九條・酒井ヲ征伐御退治ノ思召ノ旨ヲ以及内応候由、其証拠ハ御出立前ニハ、市來港辺江段々諸浪士共踏込來、為〔正義〕應接有馬新七其外同類ノ者共湊込迄差越及応答候、既ニ

御上京迄ノ間色々及混雜、伏見ニテ味方打等ノ始末、其上田中河内之介〔マヤ〕時初五六輩ノ人数頭役江相謀ラヒ、京師ノ事情モ探索被致、色々混雜追屯候テ路ヲクラマスノ一策ニテ、終ニ大坂ヨリ乘舟ニテ為相果候、田中初ノ人数最期ニ段々之、〔マヤ〕案外之訳ニテ、何様之罪ヲ以ケ様御取扱被成候哉、是迄薩州ノ為ニハ機密ノ事ヲ謀候儀モ有之、其段ハ当御側へ被相動候方、訳筋ハ飽迄御案内モ可有之抔トノ趣為申由、今以其場ノ次第難忘段、同船乗込居タル者共相咄候、兼テ

王朝カト唱候君側へ相動居候四五輩ノ人数ニテ、今日御政事ノ上ニ付テモ都テ打丸ロメ、〔脅カ〕両公ヲ看シタフラカシ、彼等此奸策ヲ施シ、国家ヲ大切奉存正道相立候諸役人ハ、悉ク私曲ヲ以罪ニ落シ付、且下官ノ御役場へ相転シ、終ニ彼共カ為ニケ様成大變ニ陥リ、愚夫愚婦ニ至迄奴原共ヲ別テ相惡シ、彼カ肉ヲ喰ハントスル勢ニテ、是ヨリ變ヲ生タルハ社稷モ是限りニテ、実ニ薄氷ヲ蹈候心地ニ御座候、

御家御運氣未日月地ニ落ストノ道理ニテ、幸ノ折柄遙御踏込被成下候故、無御抛御問柄ノ御事ニテ、強テ御氣張被成下度儀ト奉懇願候、現在

朝廷御危難ト申程ノ場ニ至リ候テハ、中々一日片時モ、更ニ誰人可止訳ハ、嘗テ一人一己タリトモ突出候儀、理ノ当然ニ御座候得共、何分趣意トハ今日ノ論ニハ合不申、此期ニ相成候テハ、彼等共党中モ紛々ノ様子ニ取聞申候、

一 左衛門ヲ落シ候基ハ、〔卷一 大久保 中山〕第一有志ヲ相拒、彼共力趣意ヲ不報用、剩過分ノ賄賂ヲ貪リ候儀共色々申込、下町人濱崎太平次ト申スモノハ、全体左衛門頼入候銀主ニテ御座候処、彼ヨリ過分ノ金子ヲ掠取ル杯ノ怪敷説ヲ以様々醜立候儀為有之由、下々ノ人氣承繕候ヘハ、格別左衛門器量ト申程ノ事ハ有之間敷候ヘトモ、第一国家ニ一身ヲ抛タレ候儀一同致称美、勿論全ク無私人物丈ケハ無疑候、

順聖院様御代格別御執用ニテ、内外ノ御内向被仰付候付、筋合ハ決テ能ク為心得人物、無人違正道廉直ノ質ニテ、不思議ニ人望ハ御座候〔事夷〕

一 西郷吉兵衛ト申スモノハ、
順聖院様格別御召仕相成タルモノニテ、無拠訳合ニテ井伊奸計ヲ被施候砌ニ大嶋ヘ一往為御潜、昨戌春被召歸、

三郎様御上京前広、下ノ關辺マテ御内用筋ニテ被召出置候処、浪士共日々跋扈イタシ、難忍難題ヲ折留ルタメニ、下ノ關ヘハ君側ノ方ヘ一封ヲ残置、大坂迄走出候処果シテ其通、諸浪人体ノモノハ勿論、同藩ノモノトモハ江府ヨリ詰ノ内ヨリ拔出、散々ノ景氣ニテ及心配候、御内実弥御趣意ト中所探得不申故、一先兵庫辺迄御迎ニ罷出奉伺度所存御座候処、最早其節ハ奸賊共舌頭ニ掛リ、君意モ離レ居候折柄、何事モ水ノ泡ト成行、大坂ヨリ乗船ニテ山川江被差廻、一旦ハ徳之島ヘ被遣置候処、又々二度押シノ場ニテ永良部島ヘ被召潜、座困ニテ昼夜不明様島人共番付ノ由、当時此者被召婦時宜ニ相立候ヘハ、弥人氣モ鎮リ、平和一致イタシ候儀無疑、仰願クハ佞奸共五六輩共涯々御退ケ、吉兵衛被召婦候ハ、如何計御国力可能在哉ト、有志朝暮此事而已歎息苦心仕候〔卷一 當時有志士ノ仰望如斯〕

御国家ヲ傾ケ候巨魁五六輩丈ケハ、屹ト不被処嚴刑候テハ、諸人一同ノ耳目改リ申間敷ト乍憚奉至願候事、〔卷一 斯書何人カ詳ナラサルモ、憂国者連中憤慨ノ余ニ記シタル者ナルヤ〕

六三ノ二
文久三年ノ上半ニ於テ、急激党尤モ勢力ヲ京師ニ得タリシ時ヨリ、隆盛カ不世出ノ雄資ヲ以テ空シク南海ノ孤島ニ呻吟スルヲ嘆息シテ、召喚ヲ朝廷ニ券請スル所アリ、(美カ)即チ左ノ書ハ、当時美玉三平カ京紳島丸光篤・東久世通禧ニ呈出シタリ、

薩州藩士

大島三右衛門

右之者薩州有志魁ニ御座候間、早ク学習所ニ御召出ニ相成候様奉希候、先達テヨリ内々支藩佐土原士富田猛次郎(此者伏見同志ニテ、内々余シノ相候テモ不背、相会シ申候)ノ存寄ニテ、種々相計リ候得共果行不申、又近衛大納言ヨリモ度々御通シ有之条モ承リ申候得共、城下迄テ遠海ヨリ帰リ申候俣ニテ上京不仕、何卒可上京致様ニ御沙汰被下度奉願候(但ノ近衛内々ニテ参政方縁ヨリ別々ニ表立御召、出シカ御召ナレハ早々出京可仕候)、(三右衛門先代時ハ西郷吉良衛門)此ノ書ニ依レハ、公然朝命ヲ以テ上京セシメンヲ計リシ見ルベシ、

六二四 老西郷大島流竄中の事蹟

記者曰く、此一項は西郷翁か冲永良部島ニ幽囚せられたる時の事蹟を、同島の土持政照といへる人か記述したる

ものなり、前回を承けて茲ニ掲ぐ、

冲永良部島幽囚中の事

西郷氏初メ徳之島に流され松原村に在り居る事須臾にして、文久二年更に冲永良部島に移さる、獄中土人土持政照と意気相投じ、親交日に加はる、西郷氏左の一詩を政照に贈る、

平素眼前皆不平

情之相迺異時情

倫安悖義如仇寇

禁敬效忠共死生

我許君々也許我

弟称兄弟却称兄

従来交誼知何事

報国輸身尽至誠

同三年西郷氏獄中ニ於テ嗟嘆の声を發す、土持怪んで其故を問フ、氏曰く、聞ク今英艦鹿兒島を襲撃すと、然るに身ハ囹圄に囚はれて、報国の微衷を尽スこと能はず、慨嘆自ら禁する能はざる所以なりと、土持聞て深く感激し、其家僕ヲ驚きて造船の資に充て、同行以て君公の爲めに尽さんことを約す、土持の母之を知り、有する処の財を出して造船の資を補く、後隆盛土持に贈るに、左の一詩を以てす、

精神不減昔人清

專顧君恩壯氣横

開眼營船真意顯

揮涕驚僕俗縁輕

北堂貞訓能応奉 先祖忠勤当力行

畢生勉乎酬國事 無私純志挺群英

船成つて英艦の襲撃終るに会し、帰国の企空しく止みたり、

西郷氏の徳之島を發し沖永良部島ニ護送せらるゝや、船中の牢に入れられ、其沖永良部島に着するや籠造狭隘たる牢獄に幽囚せられ、足を伸ばせば枕は便所に接し、臭氣堪ふべからず、其供せらるゝハ亦極めて粗にして、魁偉肥滿の身体も日に憔悴し、遂に歩行自由を失ふに至れり、然るに君命重しと為し、敢て牢を出づることなかりしと云ふ、後ち土持在藩の藩吏に請ひ、別に牢を設て之に移し、牢内浴場を設け滋味を供す、之れより身体の健康を復するに至れりと、西郷氏赦に会ひて島を去るに臨み、一詩を賦し土持に与ふ、即ち左の如し、

別離如夢又如雲 欲去還來淚紛紜

獄裡仁恩謝無語 遠凌波浪瘦思君

沖永良部島ハ周圍僅に十四里の小島にして、山岳なく森林なく、雨ふらざる事旬余なれば耕作の害を受くること多く、饑饉数々生ず、西郷氏之を憂へ、政照に諭し社会法ヲ指示実行せしめ、此等の災を救ひ、兼て鰥寡孤独自

活に堪へざるものを救護したり、明治三年遂に官許を得て玄米百石を毎年貢米と同時に徴収し（高頭一名ニ付キ一升五合三勺七四余宛）、五ケ年間利殖し、利息の幾分を儲藏して臨時救助の料に充て、其金穀明治二十八年に至りて金二万九千余・米穀六百石・土地凡十町・家屋六軒に及べり、之れ総隨時救助を為せし余裕なり、身牢中に在りて公益を企画すること如斯、島民今に至り西郷氏の恩沢を蒙る、（完）

六二五 再度ノ島下り（一）

故南州翁カ最初大島本島ニ流謫セラレシ理由及在島中ノ境遇一斑ハ、前号ノ紙上ニ記載セシカ、今再度流謫ニ遭ヒシ理由及ヒ在島中ノ境遇等ヲ略記センニ、翁ハ前号ノ紙上ニモ記載セシ如ク、安政ノ末年彼月照一件ニテ遠島申付ケラレ居タルカ、三年星霜ヲ経テ、文久元年ノ秋急ニ城下 召還サレ、其所存ヲ尋ネラル、ニ、迎モ其俛挽回スル事能ハサル世態ナレハ、正々堂々ノ旗 尊攘ノ大義ヲ唱ヘテ打立チナハ、之ニ応スルノ諸大名モ必ス多カルヘシ、然シテコソ一新ノ基モ立ツヘシト襟懷ヲ開テ述ヘタルニ、君側ノ執權中山ノ論ハ大ニ之ト異リケレハ、

翁ノ説用ヒラレス、只島ヲ出タル迄ニテ登用モセラレス、
 屈マリ居タリト、抑翁ハ故齊彬公ノ直命ヲ受ケ、天下ニ
 先チテ国事ニ尽力シ、一藩有志ノ人心ヲ振興シテ、勤王
 ノ基礎ヲ立テタル人ナルニ、其説ノ用ヒラレサリシハ、
 未ダ時機ノ至ラサリシニ因レル乎、将タ他ニ理由アリシ
 カ、実ニ惜ムヘキ事ニ非スヤ、而シテ翌春久光公御上洛
 ニ先チ、柴山愛次郎・橋口壮助ノ両士ヲ撰拔シ上京ヲ命
 セラレ、途中有志ノ士ヲ訪ヒ、精々説諭ヲ加ヘ、必ス動
 揺セサル様鎮撫スヘキ旨ノ内命ヲ受ケ、鹿兒島ヲ出發シ
 ナカラ其途中却テ勸誘シ、共ニ義挙セン事ヲ盟約シテ通
 行シタル由ニ聞ヘケレハ、翁ハ諸有志ノ人望アル人ナレ
 ハ、其俣国ニモ差置キ難ク、翁及ヒ森山新藏(栗園)・村田新八(登瀛)
 ノ三人ヘ、柴山・橋口ノ両士同様諸国有志鎮撫ノ為メ、
 久光公御發駕ニ先チ、下ノ關迄出張仰付ケラレ、同所ニ
 テ久光公ノ御着ヲ待受クル筈ニテ、下ノ關ニ至レハ、九
 州有志ノ輩多クハ自国ヲ発足シ、既ニ大坂ニ出テタル趣
 ナレハ、三士モ直ニ上方ヘ登リ、在坂有志ノ人々ヘ追々
 面会シ、其赤心ヲ聞キ勘考スルニ、寧口有志過激ノ論ハ
 復古ノ大典ヲ拡張スルノ基(ヲ脱カ)ナント思ヒ定メ、断然義挙ノ
 策此機ヲ失フ可ラスト、各国ヨリ集会スル者ヲ前軍後軍

トシ、魚太(我藩ノ有志家及他ノ浪士等カ常ニ宿泊セシ大坂ノ旅店)ニ宿スル(橋口・柴山等ノ諸士)、第一先鋒
 ニ当ルナト軍略部署ノ論ヲ為スニ至レリ、是レ等ノ事忽
 チ我藩邸ヘ聞ヘ、尚深キ故モアリツラン、直ニ三士トモ
 警護ヲ付シ本国ヘ下サレシ后ニテハ、直チニ伏見騷動起
 リ、有馬新七以下ノ七士ハ殺サレタリ、而シテ三士ハ婦
 国后頓テ又遠島申付ケラレタリト、偕テ森山新藏(梅宿也)ハ山川
 港ニテ大ニ慨嘆シ謂ヘラク、十年ノ力此ニ糜ス、此機ヲ
 失ヒ再ヒ大義ヲ挙クルノ時ナカルヘシ、且ツ伏水ニテハ
 長男(有馬新七以下七人ノ一人ナリ)新五左衛門斬殺サレシ事ヲ聞キ弥々憤激ニ堪ヘス、
 遂ニ屠腹セリトソ、此人ハ積年勤王ノ志深ク、且ツ人才
 ヲ育スルノミナラス、我家モ富ルヲ以テ有志ノ人々ノ費
 ヲ助ケタルハ、幾千金ヲ以テ數フ可カラストソ、斯ノ如
 ク世ニ稀ナル精神家ニシテ、尚勤王ノ巨魁トモ云フヘキ
 人ナレハ、人涙ヲ流テ長歎セサルハナカリシト、

六二六 全 上 (一一)

森山新藏氏カ山川ニテ屠腹セシヨリ、船中ノ警衛一層嚴
 重ニ相成リシ乎、又ハ最初ヨリ嚴重ナリシカ、南洲ト村
 田新八氏カ大島ナル名瀬港ニ到着ノ際ハ、重罪人ト同一

ノ取扱ニテ、船半トカ云ヘル筈ノ如キモノニ押籠メ、中々惨酷ノ取扱ナリシト、夫ヨリ翁ハ徳之島ニ、村田氏ハ喜界島ニ送ラレシモ、翁ハ三四ヶ月ニシテ冲永良部島へ配所替ヘニ相成リシヨリ、一層警衛ヲ厳重ニセラレ、翁ノ居所ハ一ノ茅屋ヲ拵ヘ、二間四方ノ檻中ニ起臥セシメ、其身体ヲ自由ニスル事モ出来サリシト、然ルニ此二一ノ義士アリ、即チ同島ノ在番官福山誠藏氏ニシテ、氏ハ翁カ大志ヲ抱キナカラ空シク孤島ニ幽囚セラレ居ルノミナラス、貴重ノ身体モ其健康ヲ害センコトヲ恐レ、家屋ヲ繕ヒ檻室ヲ清潔ニシ、且食物等ニ余程意ヲ用ヒシト、若シ当時福山氏ノ如キ義士ナクシテ斯ク意ヲ用ヒル事ナク、最初ノ檻室ニ幽囚シアリシナハ、平生強壯ナル翁ノ身体ト雖モ、恐ラク其健康ヲ保ツコト能ハサリシナラント、但シ翁ハ身体ノ自由ハ束縛サレ居リシト雖モ、衣食住ノ点ニ於テハ、以前大島本島ニアリシ時ト同日ノ論ニアラスシテ、近傍ノ農民等ニ唐芋ヲ貰フテ之ヲ食シ、漸ク其露命ヲ繫キシニ比スレハ、却テ氣楽ナリシナラン乎、翁ハ斯ク衣食住ノ事ニモ究セス、悠々トシテ光陰ヲ費スコト出来シカハ、翁カ経綸ノ策ハ大概此時ニ於テ定リシナラント云フ、斯クシテ翁ハ四五年ヲ過ス内時勢モ一変シ、

随テ藩論モ更リシ乎、翁及村田氏ヲ呼戻ス事ニ相成リ、藩庁ヨリハ汽船蛄蝶丸トカ云ヘルヲ迎ヒニ遣ハサレ、両氏ヲ無事ニ塔載シ来リシカハ、翁ハ夫ヨリ益々有志ノ信用厚ク相成リシト、尤モ翁等ヲ呼戻スノ議起リシハ、彼第二ノ長州征伐ノ前ニシテ、我藩主島津公カ其出軍ノ名ナキヲ陳シテ出軍ノ命ニ応セス、却テ密使ヲ長門ニ遣リ好ヲ通セシ際ノ如キハ、翁最モ与ツテ力アリシト云フ、

六二七 五代才助上申書（器械取寄セ等ノ件々）

私事今般重罪ヲ奉犯候上、一旦亡命ニ似候所業ニ及、愚存奉申上候モ重々奉恐入候得共、御国家ノ御為當時天下ノ時変機応御所置、不奉願万死左ニ申上載候、

五州乱レテ如麻、和スレハ則盟約シテ貿易ヲ通シ、不和レハ則兵ヲ交テ互ニ其国ヲ襲奪吞、右ハ是則地球上一般ノ風俗、天教ノ然ラシムル処如何トモスル事不能、開成強大ノ英佛ノ如キモ、鎖国ノ行業難立形勢ニ罷成申候処、御開港以来

勤王攘夷ヲ唱ヘ天下ニ周旋、同志ヲ集メ自国ノ政ヲ掌握スル様ノ大言ヲ吐キ、愚民ヲ欺迷シ、其上口演ニノ

ミ走り、浪士共増長イタシ、攘夷ノ功業不成ヲ不知、
 国政ヲ妨ケ反テ内外ノ大乱ヲ醸シ出シ、自滅ヲ招クノ
 兆、嗚呼可歎、

(ハ脱カ)

皇国御興廢此為ニ可有御座勿論、国体ヲ患攘夷ヲ唱候
 志ハ甚以可賞愛候得共、惜哉當時地球上ノ道理ニ暗ク、
 我ヲ不知、彼不知、不成ヲ不知ハ至愚ニシテ、危急切
 迫ハ自成スル処、如何ニ蒙昧愚鈍トハ言へ、右ハ東印
 度、近クハ清朝ノ覆轍ヲ蹈ナカラ、国体ヲ患テ終ニ国
 体ヲ失フノ基、歎息ノ甚ニ御座候、頗ニ西洋諸国ト雖
 トモ或ハ鎖国或ハ開、終ニ其理ヲ実験研究シテ、富国
 強兵ニシテ大ニ開成シテ天下ヲ横行スルニ至リ申候、
 然処今般於前ノ濱英国ト炮戦ニ被為及、夥御損失モ可
 有御座哉奉存候得共、三州士民ノ蒙昧ヲ瞬時ニスルハ
 天幸ニシテ千金ニ難易、誰力憤発富国強兵ノ功業ヲ積
 復讐ノ慷慨可不仕哉、是ヨリシテ天下一般ニ時勢不对、
 攘夷拒絶ノ不成ヲ理會仕、天下ノ形勢開国ニ歸スルノ
 時期近ニ可有御座、左候へハ諸侯競テ富国ノ手業勉強
 可仕候、先スル時ハ人ヲ制スルノ理、諸侯ノ手術不伸
 内富国御充実不被為成候テハ、容易ニ其功難積御座候
 間、此機会ヲ不被為失、急ニ左ノ枢要ナル件々御取開

有之候様奉存候、

一上海行御取開ノ儀、此以前ヨリ度々申上候趣有之候処、
 今般弥以富国切迫ノ御急務ニ罷成、火急ニ大財ヲ得候
 御趣向外ニ有御座間敷奉存候、御運送ノ品柄ハ依時宜
 一定不仕候、取究難申上候得共、長崎・横濱等ニテ西
 洋人競争イタシ買求候所ニ御差送り相成候得ハ、何時
 モ御余潤相成り、其内当分無相違広大ノ御国益相成候
 モノハ米穀ニテ、是迄貿易鬻キ候ヲ、御禁止ノ品柄異国
 人へ御壳渡相成候へハ、御国不足ノ患有之訳ニ御座候
 得共、北越・奥羽ノ間ニテ、国用ノ余米ヲ以御買求ノ
 上御運送相成候へハ、拾万石哉式拾万石ヲ売払候トテ、
 御用ノ礙ヲ成候義ハ更ニ無御座候、勿論去度鹿兒島戰
 争以來広大ノ御入費被為在、御宝蔵ノ御用心金迄モ御
 取開相成程ニ被為及御時節、実ニ開国ハ御国家ノ御安
 危ニ相響程ノ切迫ニ至リ、速ニ開国ノ功ヲ積ミ、御軍
 務御実充被為成候ハ、大功ハ細瑾ヲ不顧訳ニ御座候
 間、大坂表ニテ琉球国無類ノ凶年ニ付、御取救ノ為米
 穀御運送可相成ト申触、肥前米四千石御買入相成、大
 形ノ蒸氣船ニ積入、船中水夫等へハ専ラ琉球国へ御運
 送可相成段申聞、主寄リイタシ候者而已相心得大坂出

帆、直ニ上海へ乗越シ候様被仰付御商法相成候ハ、
当分ノ相場ニテ左之通御利潤ニ相成申候、

一 肥前米四千石

代八千両

但壹石ニ付金二兩ソ、大坂御買入御千代
斤ニシテ百斤、但一石ニ付二百五十斤ソ、

代洋銀三万五千枚

但當時上海ノ相場百斤ニ付洋銀三枚ソ、

金ニシテ貳万〇四百七拾五兩

内金八千兩 但當時長崎相場洋銀百枚ニ付壹分銀二百

三十四歩

但大坂御買入元代金差引

御利潤壹万貳千四百七拾五兩

右ノ内ヨリ石炭外船中御心付銀并税金等大概金千
三百兩ト見賦候ハ、金壹万千七拾五兩御利潤相
成、我國ニテ如何様御商法相成候トモ、ケ様ノ御
利潤ハ有之間敷奉存候、

右之通大ノ御国益相成儀ニ御座候間、急ニ御取開相
成度、左候テ右蒸氣船帰颯イタシ候節其風聞有之候ハ
、琉球国凶年ニ付於大坂表米穀何程買入、琉球国へ
運送イタシ、洋中逆風ニ逢機械ヲ損シ、唐国海へ漂流

イタシ、上海港へ乗入機関ノ修復取掛候処、不図入湊
イタシ用心金差支ニ付、無頼琉球国可運送米穀売払、
修覆相加罷帰候段申出候間、此段御届申上置トノ趣ヲ
以政府へ御申出相成候ハ、決テ御故障有之間敷奉存
候、左候ハ、唯今ヨリ早々崎陽ニテ御願立相成趣ハ、
五六年前佐賀侯和蘭国へ蒸氣軍艦壹艘・機械尅揃御注
文相成候代払ノ節、御願添ノ上米穀代品々御渡相成候
先例御座候間、左之通御願立相成候様奉存候、

一米五万石

右ハ去亥三月御免許ノ上、和蘭国へ蒸氣船壹艘・蒸氣
機械尅揃注文仕置候処、既ニ近月中出来仕筈ニ御座候、
然ル処国許ノ儀去年戦争以來大ノ入費、追重蔵方不
繰合ニ付右代金則ニ難相弁、年賦ノ示談仕候得共、異
人相對ノ義承知不仕、別テ難渡仕候間、去ル何々歳佐
賀侯軍艦并蒸氣機械御注文御代払ノ儀ヲ以、国産ノ余
米此節限り右ノ通売渡ノ義、御免許被仰付被下候様被
申付越候間、此段奉願候云々、

右ノ趣意ヲ以宜御取成有之、早々御願立相成候ハ、
佐賀侯ノ先例御座候間、御免許可相成奉存候、左候テ
三月ヨリ八九月迄ノ間北海ノ運送自由ニ相開候ニ付、

蒸氣船ヲ以北越・奥羽ノ間ヨリ下直ノ米穀御買入ニテ、
崎場^(場カ)・上海へ御運送相成候ハ、八九月迄ノ内ニ左之

通御利潤罷成可申候、

一米四千石

正利潤金壹万千百七拾五兩ツ、

一米五万石

正利潤拾三万九千六百八拾九兩ツ、

御益金拾五万八百六拾四兩ツ、

右ノ通暫時ニ広大ノ御利潤罷成申候ニ付、不被為失機

会急ニ其御用意有御座度奉存候、其外上海へ御運送可

相成品々、第一茶・白糸・椎茸・昆布・鰯・御種人參・

鶏冠草・白炭・杉板・松板・棕枳皮・煎海鼠・干鮑・

干貝・干海老等余多有之、西洋人長崎・横濱等ニテ買

求、別テ高直ノ運賃ヲ相掛ケ上海へ差送り、其余潤ヲ

以盛大奢驕ヲ專ラトイタシ候上、余多ノ蓄財ヲ得候義

御座候得共、夫ニテ広大ノ御利潤有之候儀御推計有御

座度奉存候、

此外上海へ御運送相成候品柄ノ義ハ、未附言ニ取

調奉申上候、

一右米穀運送ノ御余潤金拾五万八百六拾四兩ハ全無之モ

ノニ被思召、左ノ概要ナル件々急速御取開相成候様、
急願奉存候、

一八万六千八百兩

但米穀運送ノ御益金拾五万八百六拾四兩ノ内

一四万六千八百兩

洋銀ニシテ八万枚

但百枚ニ付壹分銀二百三拾四歩

右砂糖製法・蒸氣機関式拾揃西洋へ御注文代

但壹揃ニ付洋銀四千枚ツ、

差引

金四万兩

右三島并冲永良部島へ廿ヶ所蒸氣機械御居方御雜用金

見賦、壹ヶ所ニ付金二千兩ツ、

右ハ三島土産砂糖ノ義、天下無双ノ御産物ニハ御座候

得共、其製法甚疎拙ニシテ、御国益手薄ナル事ヲ多年

歎息仕居申候処、近来西洋諸國へ砂糖製法蒸氣機械相

開ケ、広大ノ利潤ヲ得候由、尤其箸ヲ發明致候ハ、瞬

時ニ数万兩ノ蓄財ヲ成シ、忽王公ニモ被賞候由、博物

新篇等ニモ相見得居候ニ付、此機械開國ノ功業迅速ニ

相立可申段、此已前ヨリ申上候趣モ有之候得共、未決

〔藏九〕

才ニ不被為及候処、方今開國ノ籌策愈切迫ニ被為成、此機械御取用不相成候テハ、些少ノ御余潤等ニテ追付不申御時節柄ト乍恐奉遠察候、其利要ヲ探索仕候処、右之代価ヲ以、八月ノ間ニハ、長崎參着仕候段承リ申候ニ付、唯今ヨリ早々西洋へ御注文被仰越候様急願奉存候、尤其製法ノ第一ハ、一機械一日製ニ砂糖三撮ヲ製法イタシ候由御座候間、十一月中旬ヨリ二月下旬迄都合百日ノ間製法仕候得ハ、左ノ通御国益相成可申候、

一機械製造高百撮

斤ニシテ五十壹万斤

二拾機械製造高千二拾万斤

代洋銀貳百拾四万二千枚

但百斤ニ付式拾壹枚ツ、當時上海ノ相場

金ニシテ百貳拾五万三千七百兩

但百枚ニ付壹歩銀貳百三拾四歩、當時長崎相場

内金貳拾万四千兩

銀ニシテ壹万六千三百貳拾ノ目

但砂糖千貳拾万斤、此員數是迄黒砂糖大坂表ニテ御売

払相成來ニ付、七拾壹分六分ニ見賦ヲ以差引

差引正御利潤

金百四万九千七拾兩

一五ヶ年ニシテ金五百貳拾四万五千三百五拾兩

一拾ヶ年ニシテ金千四拾万七百兩

一拾五ヶ年ニシテ金千五百七拾三万六千五拾兩

右之通年々歳々廣大ノ御国益罷成、開國要鍵ノ良策是ニ止リ可申候ニ付、返ス〜早々御注文被仰越度急願奉存候、左様御座候ハ、第一余多ノ人夫ヲ相省キ、島民御救助罷成候而已ナラス、黍耳質絞取候節、是迄相用候機械ハ至極ノ簡略ニテ、耳質多ハ相残り過分ノ費有之來可申候得共、此機械相用候得ハ漸少ノ費候儀無御座、勿論減少モ不仕候間、重々ノ御国益罷成儀ニ御座候、乍併三島ノ愚民共直様蒸氣機械ノ製法取覚申間敷候ニ付、機械御注文被仰越候節ハ、其道ニ達シ候者四人御雇被成、給銀ノ義ハ壹ヶ年壹人ニ付洋銀三千枚位モ頂戴仕候由御座候間、四人ニテ壹ヶ年都合洋銀壹万二千枚、金ニシテ七千兩ニ相成、前件ノ御利潤ニ較ラフレハ些少ノ事ト奉存候間、右機械積來候船ニ為乗組、直ニ大嶋ノ内并利好ノ場所へ入港、機械一同相卸シ候様被仰越、其時分蒸氣御手船一艘被差越、万端致

指俵候様被仰付候ハ、譬へ今通ノ時勢ニテモ嫌権等ノ患無之候間、旁々御弁利相成、御入費モ格別相減シ可申哉ニ奉存候、左候テ三島ノ御所置御一洗無之テハ甚以不宣、砂糖耕作而已嚴重御潤有之事故、土民昼夜勉強仕、偶砂糖致製造上納仕候而已、別ニ代米被成下漸兩三年跡ノ代米相下リ候位ニテ人氣甚不宣、次第ニ困窮仕候ヨシ、依之些少ノ凶年ニテモ兼々窮至イタシ候ニ付、餓死ニ及モノ不少、畢竟ハ御米積糶難破イタシ候処ヨリ相起リ、天災ノシカラシムルトモ可申候得トモ、最早航海随意ノ蒸氣船相開候上ハ天災トハ難申、人情実ニ不忍訊ニ御座候間、蒸氣船ヲ以北越・奥羽ノ間ヨリ下直ノ米穀御買入ニテ御運送有之、是迄相滞御代米不殘御払被下、尔来砂糖上納イタシ候節、別ニ御払被下候様有御座度、且又右御利潤金ノ内五十分ノ一位ヲ以土民一統へ御配慮被下候ハ、利ニ起リ(カ)是人情ノ自然、殊ニ是迄難渋イタシ居候折柄ニテ御座候間、人氣競立一涯耕作勉強仕可申ニ付、年々百万斤余出来増ノ義案中ニテ、少ヲ捨大ヲ取候理、反テ御国益相成可申哉ニ奉存候、且又右ノ通製ニ白砂糖御製造相成候上ハ、蒸氣船ヲ以上海へ御運送有之度、左候へハ其余

ニ相殘黒砂糖モ員數相減シ候ニ付、大坂表ノ相場倍ニ相成ヲ以、過分ノ御国益罷成可申候、

但天草ノ儀砂糖百万斤程出来候由御座候間、蒸氣機

械御取立相成候節ハ、前以御手ヲ被廻、都テ買求

ノ上御囲被成居候ハ、其年ヨリ直ニ大坂表黒砂

糖倍価ニ相成可申、其節蒸氣船ヲ以御運送被成候

ハ、則金壹万兩余ハ無相違御益罷成可申哉ト奉

存候、左候テ追々蒸氣機械御注文被仰趣(越力)、御産物ノ

砂糖無殘製候、砂糖ニ御製造相成候様御座候ハ、

開国全是ニテ相備可申、左候ハ、強兵ハ直ニ相整

可申哉、勿論此蒸氣機械ハ米穀運送御利潤ノ内ヨ

リ御代払相成候ハ、別段御出銀ニ不及、富国ノ

速策是ニ止リ可申ニ付、無御減少ニ拾機械一同ニ

御注文被仰越度奉存候、開国切迫ノ御時節ニ至リ、

別段御出金ニモ不及良策ヲ御疑惑相成候テハ、百

年ノ功ヲ積候テモ御大業相立申間敷哉奉存候、

一英佛兩國へ遊学人数拾六人

内四人ハ追々御家老職ニテモ被仰付候家職ノ内御人撰

式人ハ御軍賦役ノ内ヨリ御人撰

三人ハ攘夷說ニテモ唱候壯士ノ内ヨリ御人撰

右人数ハ英佛ノ軍務、地理・風俗巨細ニ見分イタシ
罷歸リ候様被仰付度奉存候、

一人ハ郡奉行ノ内ヨリ御人撰

右ハ英佛ノ農業耕作ニ相用候機械国々相用、弁不弁
ヲ取究相詔候様被仰付度奉存候、

式人ハ台場築城・砲術ニ相心得候者御人撰

右ハ英ノ砲台築城并大小砲製造ノ大意ヲ注目イタシ
罷歸候様被仰付度奉存候、

一人ハ造士館ノ内ヨリ御人撰

右ハ英佛諸学校并病院・幼院・貧院等ノ所置研究致
シ罷歸候様被仰付度奉存候、

三人ハ細工并機械取扱且絵図面ヲ達者ニ写候者

御人撰

右人数ハ我国要用ノ者ト見受候ハ、其取扱并絵図
写シ罷歸候様被仰付度奉存候、

一銀分二万二千八百枚

右我国ヨリ英国迄蒸氣飛脚船ニ、人数拾六人往来中
等ノ運賃分、壹人ニ付洋銀千八百枚ツ、

一銀三万二千枚

右遊学人数拾六人諸雜用金見賦、壹人ニ付貳千枚ツ

一銀分三万八千八百枚

内千八百枚往来運賃

右ハ通弁人壹人御差添不相成候テハ不相濟候ニ付、
右雜用見当、

合銀步六万四千六百枚

金ニシテ六万七千七百九拾兩

但此金子ハ前件申上候米穀運送ノ御余程金十五万
八百六拾四兩ノ内、砂糖製造蒸氣機械代ハ八万

六千八百兩、差引殘金六万四千六拾四兩相殘居

候ニ付、右之内ヨリ御差出相成候ハ、金二万

六千七百七拾四兩相居、別段御出銀ニ及不申候、

右之通当秋ヨリ英佛ノ兩國へ被差遣、日數大概百五

十日ツ、滞在イタシ、前件ノ趣巨細ニ注目研究致候

義ハ勿論、一切万物ノ利用ヲ試、我国へ弁不弁致明

味、要用弁利ノ機械ト見受候ハ、直ニ相談置罷歸

候様被仰付度、尤愚存ニテハ、左ノ件々御詔又被仰

付越度奉存候、

一蒸氣軍艦式艘船中一切ノ要具相添、

但大砲三十六挺備

右大砲ノ儀ハ當時有名新發明ノアルムストロンク・ウイツトホルトノ類、得失ノ吟味ヲ尽シ、玉菓相添居付候様取究、爾來御召船ト被定置、御住居等ノ儀モ、巨細ニ絵圖面ヲ以御誂早々打立來候様約定可致旨、被仰付越度奉存候、

代

銀分七拾五万枚位

壹艘ニ付三拾七八万枚位

一新製大砲五拾挺

右ハ百幾度以上ノアルムストロンク・ウイツトホルトノ間得失吟味ノ上、相誂候様被仰付、前ノ濱砲台へ御居付相成候様念願奉存候、尤近來砲台へ居付候大砲ハ少々ニテモ、玉目大ナルモノニ無之候テハ其功薄ク、異國ニテハ六百封度ノアルムストロンクヲ製造致シ、砲台へ居付候由、尤玉ハ四拾封度ノ散薬ヲ相用、此玉の中イタシ候ハ、如何成大船モ沈没ヲ免レ難シト承申候、且又大砲御居付ノ砲台ハ、右遊学ヲ尽歸ル上、英佛兩國ニテ有名柴(堅固丸)ノ砲台注目イタシ候通、前件申上候砂糖ノ御国益ヲ以テ、御出費無御厭御製造相成候様奉存候、

代銀分凡式拾万枚

但壹挺ニ付四千枚位ツ、

一 ミンエヘール 軟五千挺

一 ミスーケヘル

但壹挺ニ付洋銀拾五枚ツ、

右ハ近世發明ノ小銃ニテ、椎ノ実玉ヲ相用候故、八九町ノ遠町ニ達シ、是迄相用候劍銃ヨリ余程簡弁手輕ニ有之、當時有名ノアルムストロンク同様ノ小銃ニテ、極々要用ノ品ニ御座候間、是非注文無之テ不叶様奉存候、

當時新製短銃式百挺

但五眼又ハ六眼銃

代銀分八千枚位

但壹挺ニ付四拾枚ツ、

右ハ當時物騒ノ折柄ニ御座候間、御上下ノ節非常ノ為用心御供方ニ御渡付相成、羽織下右脇ニ帯候様被仰付度奉存候、

一 銀分製造機械式揃

代銀分凡四千枚位

但壹揃ニ付式千枚ツ、

右機械ハ至極簡易ノ趣向ヲ以、百數十枚ノ銀分ヲ拵候機械ニテ、第一人工ヲ省キ要用ノ品ニ御座候間、一揃ハ幕府ノ銀座へ御献貢相成、人工ヲ省キ国家ノ御爲ニ候間、尔来此機械ヲ以て歩銀御製造有之度旨御建白有之、外尙揃ハ御国許へ被召置、琉球通寶御製造相成候ハ、人工ヲ省キ候而已ナラス、連日何拾万枚ニテモ御出来相成、実ニ広大ノ御益罷成可申儀ト奉存候、農業耕作ニ相用候機械見合、

但田畑ヲ耕亦ハ蕎麥ヲ刈取機関ノ類、

代銀五万枚程

但農業耕作ニ相用候機械些少ノモノニテ、一機械銀分百枚位ヨリ百五十枚又式百枚迄ノ事ニ可有之相考へ申候間、五万丈モ御詔被成下候ハ、大概御領国中行足ハ可申哉ト奉存候、

右機械ハ農業耕作ニ至極弁利罷成、耕候機械等我半時ノ間ニ五六反ヲ耕候由、富国強兵ノ第一、人夫ヲ見計ヲ以相詔候様被仰付度奉存候、

一ワートルホンフ蒸氣機械

但欠数大小難取事モ候ニ付、代銀モ不相分候得共、

大概洋銀三千枚位モ可仕哉、

右ハ御領国中ノ儀、米穀不足ノ御国柄御難渋ノ御儀ニ奉存候、右機械ヲ以テ水ヲ物、^(揚)新田御開発有之度、然ハ早々御領国中新田御開発ノ御吟味有之、右場所柄ニ応シ候機械、郡奉行見計ヲ以相詔候様被仰付度奉存候、

一銃藥製造機械

一諸糸綿ヲ織ル機械

一金銀銅鉄ヲ掘ル機械

以上代銀分五万枚

一金銀銅鉄ヲ見出且掘候事ヲ研究イタシ候モノ

一高竈・反射竈製造ノ事ヲ研究致候モノ

一製菓分理ノ事ヲ研究イタシ候モノ

一製菓機械製造ノ事ヲ研究イタシ候モノ

右之外造船研究イタシ候者御雇ニ相成、我国ノ軍艦御製造相成候テ可然哉ト奉存候テモ、右^(左)右上行ノ御手業十分御取開ノ上ニ無之候テハ、無益ノモノト奉存候、勿論西洋人へ御詔相成産物ヲ以御交易相成候方第一、其船モ宜十倍ノ利ニ有之様奉存候、

御雇賃銀壹ケ年都合式万枚

但忝人ニ付洋銀五千枚ツ、

惣洋銀合百拾五万七千枚

但前件諸談物九行ノ高

金ニシテ六拾七万三千三百貳拾兩

右代り白糸貳拾五万三千七拾六斤

但百斤ニ付上中三百拾六兩并當時上海ノ相場

代金五拾八万五千九百五十九兩

但百斤ニ付上中貳百七拾五兩并上州前橋辺ニ於テ

御買入御本代、則右御詠文品代ニ御座候

差引

御益金八万七千三百六拾壹兩

右白糸ノ儀ハ諸国ヨリ余多出産仕候得共、上州前橋辺ノ産ヲ我国第一ト賞美仕候ニ付、江戸表御屋敷ヨリ御手ヲ廻シ御買入相成候ハ、^(虫隠)組万ノ相場ニテ、何拾万斤ニテモ相求メ候、右之通御益罷成申候、右御本代金ノ儀ハ、前件申上候砂糖製法蒸氣機械当分ヨリ早々御注文被仰越候得ハ、当冬初二ハ参着可仕候付、急ニ御取仕立相成候ハ、来春ヨリ御製造相始候、来春頃ニ至り候ハ、前文申上候通り、年々歳々金百余万兩無相違御国益罷成可申候ニ付、右之内ヨリ白糸御買入御本代御差出相成候テモ、一ヶ年御益分ノ内四拾六万三千百拾壹兩ハ相残可申候ニ付、早々遊学人数御人撰

ヲ以テ被仰付、当月頃ヨリ致渡海、英佛ノ兩國ニテ精細評ヲ尽シ、右之通相詠候様被仰付越度念願奉存候、

尤大小砲并軍艦ノ儀ハ甚不足仕候間、大小砲八年々何

十挺ツ、送付候様被仰付度奉存候、且又大小砲調練ノ

次第ハ右軍艦出来候上、乗来候士官共御雇相成、右之

者致伝習候様被仰付度、左候テ右軍艦へ余多ノ兵士被

召乘、頻ニ調練被仰付其功ヲ積候ハ、乍恐太守様御

乘艦西洋諸国御航海被遊御巡見、第一英国都府ノ攻戰

^(虫隠)□襲ノ弁理御熟覽候様有御座度、恐至極奉存候、尤其

時分ニ罷成候ハ、^{(朱)(虫隠)}別冊申上候蒸氣軍艦追々出来参可

申候ニ付、数艘ノ類船ヲ以當時仏人切通遺候地中海・

青松海ノ地狭モ切抜可申候ニ付、喜望峯ノ難海ヲ航海

ニ不及、道法モ近罷成、乍恐御懸念ノ儀ハ有御座間敷

奉存候ニ付、是非被遊御憤発度、左様御座候ハ、乍恐

西洋諸国ハ不及申、地球上ノ万国皆以御武威奉感伏候

儀ハ勿論、夫ヨリ幕府ヲ初我国ノ諸侯誰欵憤発可不仕

哉、往古魯西国モ我国同様ノ鎖国ヲ唱へ開港仕候得ト

モ、始ノ程ハ引受候而已之^(易力)賢益ヲ仕候処、魯ノ利ハ皆

他人ノ為ニ被取奪、國中疲弊相究候処、時ノ帝ヒート

ル深ク是ヲ慷慨歎息、自ラ憤發士民ニ化シ、船大工ニ

成リテ和蘭ノ都府へ数年相学、夫ヨリ西洋諸国ニ周旋諸芸ヲ学、魯西亜へ帰軍艦壹艘モ無之、海軍惣督ヲ命シ遊学ニ出シ、或ハ諸侯ノ列ヲ以テ悉ク諸国へ遊学セシメ、右人数罷帰候節、上帝諸侯ヨリ下士民へ諸芸ヲ教へ候ニ付、忽國中相開ケ、尔後大ニ完成シテ、終ニ今英佛ニ対シ臂ヲ張り候モノハ、当時地球上ニ於テ魯西亜国ノ外有御座間敷、是偏ニヒートルノ功ニ有之、富国強兵完成ノ良策ニモ御座候、我国ノ人氣不応ノ儀難被行奉存候ニ付、早々右三ヶ条ヨリ相始ラレ、諸国一統粉骨碎身ノ御奉公申上候ハ、今拾余年ノ内ニ富国強兵共ニ御充実可被為成候間、愈以員惣御陳啓有之、(練力)地球上ノ時変ヲ被遊御待、是非一度ハ英国都府へ其度ノ御遺恨不被遊御復讐ハ何分ヘカラス、譬へ御一代ニテ御鬱積不被遊御晴候節ハ、御子御孫迄モ屹ト御遺言被仰置候様念願奉存候、乍恐其成ト不成ト、御国家ノ御興廢ト前件ノ三ヶ条、急速御取用ノ有無ニ可有御座哉ト奉存候間、早々其機械ニ当ル人才へ万事御委任相成、御大行御開成ノ至昼夜奉苦願候、且亦御時節御到来、英国都府へ被遊御復讐候節ハ、別紙申上候通三ヶ年ノ内ニ私買受献貢仕候軍艦、其節迄相保居候ハ、

何卒其内へ被召加被下度、左様御座候ハ、不忠ノ私被召加候同前難有、乍恐死後ノ面目泉下ヨリ舞躍快然ト齒切ヲ止メ、遺憾ヲ忘レ可申奉存候、此段不願万死愚策奉申上候、恐惶敬白、

一月日

五代才助

追テ奉申上候、天下ノ形勢開国ニ帰シ、普ク富国強兵ノ世体罷成、於我国ノ目的ヲ定候へハ、北越・奥羽・松前ノ地ニ相究可申候ニ付、小形ノ蒸氣船ヲ以日本海岸一周致シ候様被仰付、繁多成ル港々へ而三日ツ、碇泊イタシ、土地・風俗・産物ノ有無年々平均ノ員數巨細ニ承合、薄々相誌シ鹿兒島へ罷歸リ、蒸氣船会所ニ於テ精細吟味ヲ尽シ、熟考計算ノ上、何々ハ何方ヨリ何方へ致運送、何品ハ何方へ御運送有之、御国益大ナルヲ算定イタシ、運送ノ順序ヲ相定メ、五六艘ノ蒸氣船順序ヲ相守、片時モ休憩ナク御運送相成候ハ、盛大ノ御所置相付不申テハ、一箇ノ弁利而已御目的ニ蒸氣船ヲ被相動候テハ、御国益之御座候間、早々蒸氣船日本海岸ノ周イタシ、諸国ノ産物承合候様被仰付度奉存候、且亦北越ノ義ハ二三ヶ月ヨリ八九月迄ノ間運送弁シ、冬分ニ到り候テハ波濤高ク、容易ニ通船難成由ニ

御座候間、^(堅固丸)極契図ノ蒸氣船ヲ以、是迄和船ノ不通時節

ヲ不厭運送ヲ始候ヘハ、忽數十万金ヲ得可申、是我国於富国第一ノ良策ニ可有之哉ト奉存候間、蒸氣船日本海一周イタシ候節ハ、此等ノ義モ細々注意イタシ罷帰候様被仰付度奉存候、尤右之通御手業相伸候ハ、右ノ内ヨリ上海ヘ御運送相成候品柄ハ、多分可有御座哉ト奉存候得トモ、当今ノ間ニ逢申間敷候ニ付、左之件々ヨリ被相初、上海行御取開ニ相成候様念願奉存候、

一白糸ノ儀ハ当今粗承リ候ヘハ、横濱交易ニ鬻候儀御禁制相成候ヨシ、此機械御座候間、本文ニモ申上候通江戸御屋敷ヨリ御手ヲ被廻、関東出産ノ白糸委ク御買求相成候ハ、^(悉丸)当分余程下直ニ御手ニ入り可申、左候ヘハ上海表ノ御益高尚又相増可申哉奉存候、

一茶ノ義ハ上海表別テ宜御座候間、当分出来候御国産ノ余分ハ勿論、筑後并肥後表ヘ御手ヲ被廻、一手御買円メノ上上海ヘ御運送可有之、左候テハ本文ニ申上候上海ヘ米穀運送ノ御益金、未式万五千両程相残居候ニ付、右金子ヲ以早々御領国中一般ニ茶座御取立有之、大郷ハ二三ヶ所、小郷ハ壹ヶ所ツ、茶製館被召建、左ニ製法相記候紅茶御製法有之候ハ、是迄御商法相成候青

茶ヨリ品位ノ高下ニヨリ直段相異不申、勿論紅茶ノ義ハ製法至テ簡易ニ有之、価モ上下二ツノ区別ヲ以上品壹斤拾七八匁、下品拾四五匁ト大概相究候モノニ有之、青茶ヨリ余程高直ニ御座候間、夫丈ケハ御国益相増候様可有御座哉奉存候ニ付、郡奉行ノ内御人撰ヲ以両人程混ト被遊被仰付、原常ノ相對雇ヨリ五人位モ引上候賃銀ヲ以御雇、利ヲ以人望人氣ヲ集メ、往還邑路ノ左右迄並木ノ如ク御植付相成候ハ、御國中ノ義稀成茶相応ノ質御座候間、三嶋ノ砂糖ニ次御産物ト相成、三ヶ年ノ後ハ年々大ノ御国益相成可申奉存候、紅茶ノ儀ハ青茶摘加減ヨリ少々葉大ク相成候節、古茶交リニスキ取釜煎ニイタシ、取物頻ニモミ付候ヘハ水氣ヲ生ス、其時橙子位ニ丸メ、桶様ノモノニ入蓋ヲシメ、天氣ノ模様ニヨリ一日亦ハ一日半ノ間破置、^(本「機シテ」)赤色ヲ帯候ヲ適宜トイタシ、取出シモミホトキ、釜ニ掛煮揚候而巳、

右紅茶ノ義ハ近来西洋一般相開ケ、座間并食時ノ節煎相用候様罷成、幾千万斤有之候テモ其用広ク、其費多クシテ引足不申由、右茶ノ儀ハ油質ノモノ喰候節咬候而已ニ有之、其費式ト七トノ如ク、然テ価モ格別相変

候段承り申候、

一 昆布ノ義ハ松前箱館ヨリ長崎へ御運送御冊ニ相成、時節ヲ見合上海へ御運相成候ハ、広大ノ御余潤罷成申候ニ付、右蒸氣船日本海一周致候節、松前箱館等ニテ乏品承合置、交テ被相始候ハ、重々御国益相成候様奉存候、

一 椎茸ノ儀ハ、御領國中諸所町人共御免許ヲ受ケ、椎茸山入置申候ニ付、当春ヨリ余多出産可仕候間、迷惑不致候様御買上相成、上海へ御運送有之候様御座候ハ、御国益ニ罷成可申哉奉存候、

一 白炭ノ儀ハ此以前ヨリ度々申上候趣有之、冬分ニ至候ハ、上海表別テ高価罷成、百斤ニ付三枚ヨリ四枚迄仕ニ付、船付宜場所へ炭山被召入、不用ノ棉木ヲ以白炭御焼調相成、時節ヲ見合御運送有之候ハ、金式万両ハ無相違御国益罷成可申奉存候、

一 對州ノ地ハ至極ノ山国ニテ、山海ノ稼ヲ以生活仕候国柄ニ御座候間、鯛・椎茸・鶏冠草ノ類夥ク出産仕申候ニ付、對州侯へ御示談、孤島ノ乏ヲ補候御趣向ヲ以御引受被相始、右品々都テ御買求ノ上、上海へ御運送相成候様奉存候、右之外松板・杉板等モ御利潤罷成、鮑・

煎海鼠等モ御製禁ノ品柄故、就中御益有之、依御所置ハ如何様トモ御趣向可有之哉、御種人參ノ儀ハ然時宜過分ノ御益罷成候へハ、上海ノ運上斤斤ニ付貳拾五匁位モ相懸リ候間、上海渡海ノ節少々ツ、積越テ、窃ニ御商法不相成テハ其功薄ク御座候、右之件々急ニ御取聞相成、我國ノ貿易ハ勿論、上海・廣東・天津迄モ御運送盛大ニ御手術相伸申候ハ、追々広大ノ御国益罷成、本文ニ申上候砂糖製法ノ御国益相併候へハ、速ニ富国ハ御充実可相成奉存候、強兵ハ第一人ヲ拵候義ヲ急務ニ奉存候、造士館等ノ内ヨリ才氣有之候子供五六十人程、外ニ少々年長ケ候人才貳拾余人、御人撰ヲ以西洋諸国へ被差遣、海陸軍術ハ勿論砲術・天文・地理・製薬・分理等ノ義共悉ク研究イタシ罷帰候様被仰付、右人数ノ内諸術熟達イタシ候モノへ教師被仰付、御領國中諸所へ諸学講御取建有之度奉存候、且又我国西洋ト相變義ハ、常例不用ノ俗事繁用多端ノ上ニテ、軍整ノ儀ハ非常ト相唱へ、平常専務ニイタシ候義更ニ無御座、三百年來昌平ノ惠弊トハ乍申、我国兵務不振ノ道理ニシテ、今形ニテハ數百年ノ久ニ至候テモ、強兵ノ功容易ニ難積奉存候間、大概文官・武官ノ區別被相定、

諸向奉行・頭人・出役迄モ精々御減少有之、大小砲士官且御軍務要用ノ件々専務ニ相勤候様被仰出、夫々階級ノ順序ヲ以相当ノ御扶持方并御心付銀被下候様被仰付度奉存候、左候テ諸郷之郷士共繰廻シヲ以御城下へ被召呼、相当ノ御賄料ヲ以大小砲調練被仰付、隊長・伍長其外主寄ノ外ハ御城下ノ士官ヨリ相勤、練兵五六千位ハ平日御城下ノ御守兵トシテ被備置候様有之、追々富国強兵共ニ御充実ニ至リ候ハ、自天下ノ万国御武徳ニ奉降伏、御積鬱可被為成御晴雪御儀ト奉恐存候、

六二八 〔江田平蔵外三人供被仰付事〕

取次御用人

北條 織衛

御旗本

江田 平蔵

井上新右衛門

〔朱〕〔文久三年癸亥参考〕
三郎様御旗本

猪俣為右衛門

早川 務

右之通兩人ツ、島津〔久慈〕大蔵殿ヨリ北條織衛御取次ヲ以

テ、老年交代ニテ 御出馬御供被仰付候事、

〔表紙〕

忠義公史料

文久三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」
〔紙数七〇枚〕の記載あり〕

六二九 税所篤清自記（吉祥院）

不省老骨篤清故 久光公江御目見、又御懇篤ヲ蒙リ候儀、記臈丈巨細申上候付、御聞取可被下候、今ヨリ四十余年前僕^{（嘉永元年）}三十才之二月初旬、御祈願所重富圓明院^{（長門郡）}ト申寺へ住職被仰付、御本丸故 順正公江御目見相済ム、重富公御屋シキ故 久光公へ御目見相済、三日中重富江引越申候、且迎船等被成下候様役人等へ頼置、夫ヨリ寺社奉行ヲ走り廻り、婦寺之上祝等仕候、夫ヨリ三

日ヲ経テ迎船參候ニ付、小僧一人召連レ上之濱ヨリ乗船仕候、見送り僧中其他ニ候、彼之地役人組頭其外待受丁寧ニ御座候、然ルニ三日ヲ経御祈禱ニ取掛リ、毎年正二之間一七日之祈禱有之、寺ニハ和尚成リ出世之者ナクテハ、注ル^{（マツル）}モ出来不申候、左候テ右祈禱モ相済、三十日計ヲ経テ、故 久光公御子様方御七人御同伴ニテ御帰館之由、役人共ヨリ為相知、直ニ崇廟岩劍神社^{（長門郡長門町）}江御參詣有之候付、其心得有之度旨役人共ヨリ承リ候付、手当等仕居神社鳥居迄御出迎、夫ヨリ寺へモ御仏詣、御休御茶一服・菓子御茶受等差上御帰館ニ相成、夫ヨリ御參詣之由、初ニ御男子四人又御姫方三人跡ヨリ御參詣ニテ、寺へモ御仏詣同断等茶菓差上御寛遊ニテ御帰り、女中連モ六七人御供ニテ、実ニ仙家之華花之如ク、今更昔ヲ思ヒ出シ、於真サマ十四・於哲様十二・於廣様八才・今ノ忠義公御十三、其一ツ違ニテ御七人御同腹ニテ、御母公ハ峯姫様ト申上、二十四才ニテ御他界被遊候由承リ居候、扱三日ヲ経、奥通御免ニテ御目通被仰付候由承リ、進上物一通ナカラ当惑付、役人方へ相談之上、御近習ニテ可然取計可呉トノ儀ニ付安心仕候、昼後ヨリ參殿、御盃等頂戴之上囲碁競争相

初、御相伴ニハ伊集院權右衛門御納戸、御納戸鹿嶋郷十郎・山本五郎右衛門右兩人ハ本ヨリノ知人ニテ、互ニ祝ヒ申候、終日午後九時比迄勝敗ヲ不分候処、相手ハ四人、拙者一人終ニ相倒サレ、笑止ニ御座候、夫ヨリ追々役人家等へ御入ニテ参殿御相手仕候、公ト伊老ハ私ヨリ二三手上ニテ、伊老殊ニゴ好ニテ其上強飲ニテ込果候、御本丸ヨリ之附人ニテ威張被居候、御子様方モ每カ程女中五六人ニテ茶菓ニ込リ、後形菓子・竹ノ子しめ物ニテ為濟申候、小僧ハ忠義様方之御氣ニ入、御屋シキニ罷上リ、右ニ付十年役ニカコシマ迄出候処、前ノ濱ニテ官軍被倒申候、三十日余之御滞在ニテ鹿兒嶋ニ御歸リニ候、扱御年寄仲津サマト申人ハ、九才之比ヨリ御殿ヨリ周防様へ相付被參候由、誠ニ出来女ニテ、近衛公老女ト同然之人物ニテ、上平之馬場上原助七ト申人之妹ニテ、此人ハ拾六才之時須田新角ト申強勇ヲ打果シ候人、上平之馬場中之豪ケツニテ、彼女ハ於ハ公殿カ久光數年勤勉之人ニテ、年比モ公ト同年位ニ承居候、先夜ハ彼ノ人之夢像見候後思ヒ出シ候処へ、御手翰ヲ被下、扱モ彼人之元ノマ彼是申上候儀ニテ、昔時ヲ思行候次第、此等ハ往時之夢語りニ候間、御笑捨可

被成下候、

一 維新前 久光公ニ之丸御出張無之内、大久保其他有志之面々御目通りヲ願クレ候様、度々承り候ニハ込果候得共、無和理右之段中上候処、此涯見合候様汝ヨリ能々申聞置候様承り、其段ヲ彼等へ申聞候処、無致方引取申候、其後西郷・月照僧入水後、又々大久保・海江田兩人、頻ニ御庭前ニテ暫時御目通願上吳候様承り、又々公へ申上候得ハ、順正公ニハ御庭ヨリ西郷御召シ成候儀承居候得共、重富ハ御本丸同様奥通御免之人物ナラテハ、勝手ニ目通不相成規則ニ付、無是非ニ付、其段申聞置候様被仰下、其段ヲ申聞候得ハ、無致方ト引取申候、其比公篤種之國書御覽之比ニテ、捨弟古史本ノマ傳ヲ二冊差越有之序ニ、建白書ヲ書中ニ秘シ差上候儀モ有之候、其後モ追々建白取次申候次第、公モ寒中其方モ氣之毒也ト被仰下候儀モ有之、又ハ差上候節白封箱之御奉印被下、其節非常ニ祝ヒ申候、夫ヨリ間モ無御樓門へ建白箱出申候付、或老人ト談シ上書仕候、第一人撰、第二究士御救、第三武術炮術等也、人撰ハ一ニ小松帶刀、二ニ宮之原主計、三ニ脱カ町田民部・岩下佐次・川田主水等、五人之内兩人ニ之丸御家老職、諸士拾人

余之内大久保・吉井・海江田・奈良原・村田其他御納戸御小姓等ニ上書仕候、然ルニ御家老ハ喜入攝津殿兼務ニ相成、御側御用人役ニ小松殿、御納戸ニ鹿嶋・山本兩人、御納戸見習ニ大久保其外吉井杯御徒目附等也、不当トイヘトモ不遠トテ皆々祝申候、殊ニ大之父母滿悦ニテ、悦ニ参リ呉レ候様承リ、昇進ニ付私ヲ呼申候、大久保之老人ハ拙之父ト殊ニ入魂ニテ、親類同然ニ仕候、其比私ヲ誠忠組頭取ニテ俗僧ナリト訛評惡シク候付、念ヲ入候様平方之親類者ヨリ承リ候儀モ有之、無隣ニテ申居候、其比捨弟(弟)ハ城山居住ニテ、兄玉何某之方拙寺へ集ヒ申シ候、迷惑ナカラ無和理氣張居候、捨弟御用部屋書役(後方)ハ三嶋方へ罷出モシ、人撰ニテニ之丸御用部屋書役ニ被召出難有、是モ公ノ大恩ニ候、其ヨリ弟ハ御用部屋杯ノ好キ人物也ト被仰候儀モ有之、大方用意ハ大人公之脚下ヨリ出申候、扱亦私吉祥院へ転住仕候儀ハ、安政二年二月比ニ御座候、

久光公へハ、国事情ニオイテハ御談シ申上候儀ハ無之候得共、文久三年之夏南泉院代借ヨリ上京之折、二之丸へ罷上リ候処、公ニハ何カ御用召御年寄仲津殿へ、

京師へ何カ御用モ有之候ハ、被仰付度申上候テ罷歸申候処、兩日ヲ経テ仲津殿ヨリ奥迄罷出候様承リ、夕べ罷出候処、為御饑別金千疋被成下、又近衛殿・岩倉殿へ奉書差上候付、内密ニテ諸大夫迄相届候様被仰付、難有拜受申上候、其比御上京ニハ、生麥一条到来之節ト被存候、御歸リニ京都御屋シキニテ、得能良介取次ニテ御伺申上候、大久保其他へモ面会仕候、御歸リ伏見込飯熊・蓮光院兩人御見送り申上候、伏見ニテ大久保御用取次御側役兼務被仰付候段書面相届候、大久保・西郷書面其他之書面モ沢山ニ候処、十年之役吉野川洗ニハ陣中_ニ之真中ニ相成、逃レ出候節焼失紛亡仕候、殞心ニ候、

一老拙還俗仕候儀ハ慶應元年比ト存申候、其時分大磯之龍洞院ト申処転住被仰付、吉祥院ヨリ寺格モ宜シク、高百六十四石ニテ候処、其比夷人戦争ニ付、琉球船逃レ居候ヲ目掛大砲打掛候節、飛火ニテ焼失、漸ク御位牌様丈取出候、其節之住持ハ本尊其他焼亡、彼是之義ニテ退院被仰付、田舎寺へ被差遣、其蹟ハ拙住職被仰付、一年位相立候テ、寺事ハ懸リ被召上吉野隠居、高三十石ニテ罷在候、寺高百六十石之内六十石余ハ自分

仕明寺有之、右丈御返シ被下候様類ニ願申候得共無其

詮、喜入殿廢寺掛ニテ、拙ナト廢寺之比ハ大切之御奉

書等持出候得ハ、無拋別段之思召ニテ御切米八石被成

下難有次第、其節昔之奉書ヲ仲津ヲ以公へ差上候得ハ、

無和理別段之思召有之候、実ニ公之御報恩ト御位牌緣

之恩沢ヲ伏拝ミ居候、両三年ヲ經テ惣廢寺相成候ニ付、

無致方寺跡ヲ申受、十年役迄学校教員等ニテ取続居申

候、其内大久保其他之人々力ヲ添具候得ハ、左程困難

モ不仕候得共、何之噂モ不承、本ヨリ愚昧之我等ニテ、

還俗成リト見限居候哉、推察罷在候次第、其内捨弟追

々見次具候故、會計ハ助リ居申候テ、無是非次第ト明

メ居候、此比ニ至リ 公ハ度々旧情ヲ知サル面々ナリ

ト被仰候、

一月照和尚海没、南林寺へ仮葬致シ有之候故、大久保其

他森山・豊岡杯ト計ヒ、於吉祥院四十九日法事當ミ仕

候、面々寸志之持出候、第一森山・奈良原・海江山・

吉井・税所其他多勢ニ御座候、僧兩三人御座候、法花

經相誦誦惣テ飯元ノマ、出申候、其節手向之歌ニ

大久保利通

手向する法のむしろのもろ人ハ

君とひとしく身をかへりミス

僧真海吉祥院

鷺の山たかきみのりの蓮葉に

さやけき月の光りかへれし

全 人

雲井なき月の光も衰えて

うきめのためにおふはれにけり

飯熊蓮光院

おのつから法の功之たかけれハ

月照山にすみわたるらむ

其頃拙寺へ修行ニ被居候カネ若人也、

此等モ昔時ノ夢物語ニ候得共、序ニ入笑覽候、

又十五年四月比上坂之折御暇乞罷上リ、御筆ヲ添クモ

願上候得バ、暫時待ヘシトテ御詩一枚被成下候、今ニ

秘藏伏拝ミ居候、

谷口春残黄鳥啼、稀辛夷花尽杏花、飛始憐香開山尽、

下不改清陰待我歸、

玩古翁書

御印□□

猶又故哲丸君御他界事情、敦公様へ取合之事杯モ有之候得共、事故長クアトヨリ差上可申候、

六三〇 近衛忠房公高崎猪太郎へ書翰

今日書状ハ進シ不申候、不悪聞取頼入候事、

昨鳥入来之砌、三郎殿へ書状進シ候趣約束致置候得共、

実ハ今夕下坂之事不心付、未認不申候事、但昨今ハ殊之

外寸隙無之、何卒演舌ニテ宜敷申候様、尚近日之内正風佐

太郎ニテモ差下シ、其節書状可進候、甚違約ニ相成候得

共、扱々御用繁不悪聞取頼入候、扱明石・淡路之間炮発

之事、右ハ昨鳥淡路守へ篤卜御沙汰ニ相成候事ニ候、何

モ当地形勢仲之助始へ尋問ニテ、三郎殿へ申入呉候様頼

入候事、御用多中乱書一筆荒々如此候也、

前殿下ヨリモ宜敷可申入被命候事、

忠房

高崎猪太郎殿(五)

内々

六三一 口上覚

(番号五五五と同文により削除)

六三二 風説(姉ヶ小路殿暗殺下手人)

六三二ノ一 姉小路殿へ切掛リ候者、薩州之士田中新兵衛・仁禮源(羅平)

絶之丞外ニ僕一人、ノ三人被召捕申候ヨシ、

右之内田中新兵衛ハ、町奉行所ニオイテ未御吟味無之

内切腹致候故、世上一統弥薩藩ト極メ申候、

其後藝州之手へ薩藩一人伊勢神主山田大路陸奥守等申

者ヲ召捕申候ヨシ、又上杉手ニモ一人召取申候ヨシ、

右ニ付薩州ハ兼テ乾御門御固メニ有之候処、此度御免

ニ、又 中川宮様へ薩州ヨリ警衛之為勇士入込居候処、

是又御断ニ相成、

六三二ノ二

姉小路少将昨夜亥刻頃退出掛ケ、朔平御門東之外ニテ、

武士体之者三人計白刃ニテ不慮ニ及狼藉、手傷為相帯

逃去候ニ付、直ニ帰宅療養為仕候、但切付候刀奪取置

候、依之此段御届ケ申上候、尤檢分ノ者ニハ不及候、

夫々急々御通達殿御吟味之義頼入存候也、

亥五月廿一日

六三三 参考 寺島宗則自記抄

文久三年癸亥

二月四日曾昌啓病死スト聞キ、白金ニ抵リ之ヲ深川正源寺ニ葬ル、昌啓年五十三、横臥四五日ニシテ没セリ、前ニ病報ヲ聞カス、藩医足立梅景ノ診ヲ乞ヘリト云フ、脳病不食ノ症ナリ、其祖父昌遵・父昌宇共ニ物産学ニ通シ、皆島津榮翁(重憲)公ニ仕ヘ、昌遵ハ公命ヲ以テ成形図説ヲ著シ、刻成ル者卅卷、序ニ文化元年曾榮記トアリ、先ツ農業ヨリ起シ、各物羅旬名ヲ附シ、且凶ヲ加ヘ、我歴史ニ在ル所ヨリ殖産方法・功用等ヲ詳ニスレトモ、目次多カラサル未完ノ著述ナレハ、学者統編ナキヲ憂ヒテ、宗則ニ其統稿ヲ求ムルコト屢ナレトモ其統藁ナシ、昌遵ノ自筆ニテ成形図説藁及料ト題セル写本、高サ二三尺ニ積テ筐中ニ残リシモ、皆刻成ルモノ、藁ニシテ統稿ニアラス、惜哉宗則築地ニ住スル時、明治四年ノ火災ニ鳥有トナレリ、昌遵ノ祖先ハ曾梅翁ト称ス、清国ヨリ長崎ニ投化シ来レリ、正保二年長崎ニテ没ス、昌遵ニ子ナシ、豊前小倉藩士猪飼叔藏ノ次子ヲ養子トシ昌宇ト云フ、昌宇モ亦物産ノミナラス博識ノ聞ヘアリ、昌遵纂集ノ書名拾貝ナル者ヲ火災ニ失ヘルヲ以テ、

昌宇再ヒ聞見スル所ヲ集テ拾貝ヲ編メリ、廿五卷アリ、皆自筆ナリ、宗則今之ヲ保存セリ、昌宇ノ実子タル昌啓ハ、学博カラスト雖トモ、亦尋常ノ物産学ニ通シ、性鋭敏、人ト応接能ク事ヲ弁シ、島津齊興公ニ侍医ノ名ヲ以テ仕ヘタリ(行實略也)島津忠義公ヨリ帰鹿ヲ命セラレ、妻ヲ白金ニ住セル曾ノ母ニ託シ、三月鹿城ニ至リ、下町ナル一旅舎ニ宿シ、更ニ藩医上野良節ノ別室ニ寓ス、島津久光公汽船ニテ上京、其随行ヲ命セラル、船中公ニ謁シ、始テ西洋ノ事情ヲ述フ、兵庫ニ達シ船奉行ニ転シ、公命ヲ以テ名ヲ安右衛門ト改称ス、久光公滞京(三日)十余日、復タ船上ニ從フテ下鹿ス、是ヨリ五代才助ト共ニ汽船ヲ管轄ス、当時汽船三隻アリ、皆軍艦ニハ非ス、六月廿七日英艦七隻谷山ノ前湾ニ入り、次日鹿湾ニ進ミ一夜泊シ、又翌日鹿城ノ前面ニ来リ、去年生麥道路ニ於テ、久光公ノ從者英人ヲ殺シタルノ暴行ヲ論シテ、其罪人ヲ罰シ、且死者ノ遺族ニ償金ヲ出スコトヲ責ム、宗則之ヲ訳シテ公ニ呈ス、藩議許サス、且歎イテ撃ンコトヲ謀リ、各艦ニ西瓜ヲ贈スルヲ以

(戰爭ノ部ニ詳記ス)

テ名トシ、拔擢ノ士ヲ以テ之ヲ護送シ、數隻ノ小船ニ數十人乗リ、西瓜ト共ニ艦中ニ入り、拔刀擾乱ノ際直ニ陸ヨリ発砲ノ準備ナレトモ、艦長此策ヲ推知シ、西瓜及士ヲ他艦ニ受ク可ラスト号令セリ、但其中ノ指揮官ノミ西瓜及士ヲ甲板ニ入レタリ、然レトモ艦中ノ兵士等銃槍ヲ以テ我士ヲ困ミ、我ヨリ撃ツ可ノ余地ナシ、英ノアドミラルル及公使我士一人ヲ分テ之ヲ引接シ、且ツ我カ書翰ヲ取レリ、此時陸ヨリ一船來リ、該書ハ出ス可ラスト止メタルニ依リ、已ニ出シタル書翰ヲ取返シ、辞シテ陸ニ還レリ、宗則等ノ管轄スル三隻ノ汽船ハ、戰鬪ノ用ナケレハ、鹿灣外ニ去ルヲ利アリト小松帶刀ニ問シニ、尚用便アルヲ以テ重富ナル岬陰内ニ碇泊ス可シトノ命ヲ得、英艦鹿城前ニ來ルノ前日重富灣ニ退ケリ、然レトモ余ト五代トハ下町海岸ノ一旅舎ニ在テ動靜ヲ窺ヘリ、次日西瓜ノ策行ハル可キ密議ヲ聞キ、戰議動カス可ラサルヲ嘆シ、二人相携ヘ歩シテ市街ヲ過クレハ、市人家財ヲ運搬スルノ状火災ノ時ノ如シ、磯ナル火薬製造所ハ竹下清右衛門其主宰タリ、之ヲ見テ戰議決セリト告ケ、其海岸ヨリ小艇ニ乗リ、重富ノ

前ニ碇泊スル汽船ニ移レリ、此日砲声聞ヘサルヲ以テ、何故戰端開ケサルカト疑フタリ、然ニ英艦ハ鹿城ノ前面ニ泊スルノ第二日ニ、西瓜船ノ使者ヨリ呈シタル書翰ハ之ヲ取還シ、尔後確答ナキヲ以テ、七月二日早天英艦我汽船ニ向ヒ來リ、我船三隻ニ彼船各一艘ノ舷ヲ接シ、水夫我船中ニ來リ、速ニ去ル可シト云フ、余ト五代トハ一船内ニ在リ、之ニ答テ云フ、未タ敵タルニ非ス、何ソ我船ヲ奪ハシム可キヤ、決シテ去ルコト能ハスト、彼云フ、好シ、然レトモ他ノ諸人ヲ留ム可ラスト、尚之ヲ拒ミテ士官ヲ殘シ、櫻島ノ前ニ至レル頃、他ノ士官モ留ム可ラスト迫ラル、カ故ニ、士官モ皆上陸セヨト命ス、他ノ二船ノ乗組者ハ重富前ニテ皆去ラシメラレ、殘ル者ナシ、英艦我三船ヲ率ヒ、櫻島ノ近キ洋面ニ來レルヲ陸ヨリ見テ大ニ怒リ、凡午十二時発砲ヲ始ム、彼レ余及ヒ五代ヲ英艦ニ移シ、悉ク我艦ニ放火セリ、砲戦三時計ニシテ陸ヨリ発砲ヲ止ム、英艦ノ砲撃ハ一時モ長カリシナラン、砲火ノ為ニ市街人家ヨリ火起リ、盛ニ焼クヲ望メリ、琉船二三隻碇泊セル者アリ、英艦ヨリ小艇ヲ出シテ之ニ放火烧失セリ、薄暮指揮艦

ヨリ宗則等来ルヘシト云フヲ以テ、小艇ニテ指揮艦ニ来レハ双刀ヲ奪ヒ、アドミラル及公使ニ謁シテ聞ケハ、艦長・次官其他数名弾丸ニテ倒レタリト、七月十一日横濱ニ至レハ、旧知タル米人ウエンリード来艦スルニ会ス、其周旋ヲ以テ、夜ニ至リ小艇ニテ河崎駅ノ河流ノ下ヨリ上陸シ、此駅ニ一泊シ、次日江戸ニ入レリ、英艦ニ在ル時清水卯三郎モ亦在リ、余等一時潜伏シ、鹿城ノ状ヲ知テ帰ルニ如スト決シ、清水ノ郷里ニ至ル可シト約セリ、江戸ニ於テ清水ト会シ、其親族ナル熊谷駅ノ一村、四方寺村ニ住スル吉田六三郎ニ見ヘ、暫時身ヲ託センコトヲ乞ヒ、数日ノ後其一族ナル下奈良村吉田市右衛門ノ別室ニ寓スヘシトノ好意ヲ得テ此ニ転寓ス、五代才助ハ同居一ヶ月余ニシテ、江戸ノ松本良順ニ乞ヒ、其家徒ト称シテ長崎ニ至レリ、宗則ハ此年尚下奈良村ニ在リ

(米)「福沢物語ニ符合ス」、十月二十六日妻阿茂登白金ニ在テ女子ヲ生ム、千嘉ト名ク、明治八年九月十日死ス、年満十二ナリ、

六三四 洋製汽船買入数

西洋製造ノ蒸気船ヲ買入レタルハ、左ノ船名ナリ、買入ノ順次年月詳ナラス、次第錯雑セリ、

承天丸	翔鳳丸	平安丸	永平丸	万年丸
白鳳丸	天祐丸	青鷹丸	乾行丸(軍艦)	
安行丸 <small>戊辰ノ時神戸ニテ幕府分補スル者</small>		春日丸(軍艦)		
櫻島丸	鹿兒島丸	開聞丸	幸福丸	製鐵丸
雲行丸	豊瑞丸	三邦丸		

六三五 藝藩交易ノ顛末

薩州藩(広島県豊田郡豊町)御手洗トノ間ニ於テ、条約ノ件ハ旧藝州藩士族船越壽左衛門ナル人ノ専ラ担任スル処ニシテ、素ヨリ契約ノ成立等詳細ノ手續ハ判知スル能ハサレトモ、当時其掛員タル御手洗町多田勘右衛門等ノ記憶スル処ニ抛リ、左ニ起因等ノ大略ヲ記シ、参考ニ供シ候、

一起因及終始年月

文久三亥年長州下ノ關ニ於テ、薩州御用聞町人柿本彦左衛門・鬼塚惣助ナルモノト、藝州御用聞町人桑原儀三郎ナルモノ、代人ト出会、物産交換ノ件ヲ協議セシ欵、右薩州人兩名ハ廣島ヘ渡航シテ、勘定所

掛員ト該件ヲ定約シタル趣ニ聞ケリ、依テ翌年四月
中旬薩州ヨリ、使者市來庄右衛門ナル人御手洗町へ
來着、藝州ヨリモ吟味役村上仲之助其他小鷹狩助之
丞・船越壽左衛門等ノ数名出會、而シテ該人員ハ不
殘廣島へ渡航シ、同五月ヨリ御手洗港ニ於テ諸品ノ
受渡シヲ始メ、明治三年春ニ至リ止ム、其結約中薩
州ヨリ使者數度渡航セシコトアリ、

一 運漕上ノ手續及契約

双方ノ物品ハ必ス御手洗港迄運輸シテ受渡ヲナスノ契
約ナリ、薩州ヨリ回着ノ物品ハ生蠟・種油・錫等ナリ、
蠟・錫ハ販路狭マキカ故歟、后ニハ天保錢并西洋品・
絹布類・端物等數多回着セリ、藝州ヨリハ米穀・繰綿・
銅鉄ノ類、就中主トシテ米穀ヲ輸出セリ、最初子年ハ
依ルヘキモノナキヲ以テ輸出品ノ數判然セス、翌丑年
分ハ輸出ノ米穀俵數凡三萬三千余、鉄九千七百束余ナ
リト記憶セリ、又其翌寅年以後ニ係ル分ハ依ルヘキモ
ノナク、是又員數判然セス、而シテ薩州ヨリ柿本淺太
郎・鬼塚祐右衛門其他兩三名ノモノ、交代御手洗港ニ
勤番セリ、藝州ヨリハ當時同所金子十郎右衛門掛持宅
へ勤番所ヲ構へ、船越壽左衛門ナル人時々出張シテ、

諸般ノ駈引ハ都テ同人ノ專ラ担任セシ哉ニ考案ス、
一 御用ヲ勤メシモノ、姓名身分
交易番所(勤番所ヲ云フ) 掛員ハ、勘定所ヨリ左ノ者へ命シタリ、
該掛員ハ諸品受渡シノ節出頭スルノミニテ、報酬ハ概
略出飯米ニ比シ支給アリシナリ、

御手洗町年寄

金子十郎右衛門

同町庄屋

多田勘右衛門

同町組頭

山本彌一郎

附屬人

脇屋友次郎

同 藤 助

清水幸右衛門

雇人

坂田吉右衛門

一 薩州問屋ノ原由

御手洗港ニ於テ、從來薩州船ノ問屋業ヲ営ムモノ脇屋
與右衛門・清水善兵衛兩名アリ、何レモ薩州ヨリ免許

状ヲ受領セリ、則左ニ其全文ヲ謄写ス、

今度薩州問屋被致免許候以来、請状ノ通諸事引請世話可被致候、依如件、

延享三年寅十一月九日

松平大隅守内

黒葛原源左衛門印

栗丸長左衛門印

安藝ノ内御手洗

薩州問屋

脇屋與右衛門殿

延享三寅年薩州船問屋被致免許状被相渡置候処、

數代正道相勤候御取訳ヲ以テ、此節御紋付挑灯小差被相渡、勿論永々其許へ相付候様申渡置候間、猶引請可被致世話候、依テ証書如件、

安政六年未二月十一日

薩州

橋口柰左衛門印

藝州御手洗

脇屋與右衛門殿

今度薩州船問屋被致免許、御紋付挑灯小指被相渡候付、以来御手船ハ勿論、御領内諸船トモ諸事引請可被致世話候、仍証書如件、

安政五年午十二月

薩州

御船奉行

長崎勘介印

橋口柰左衛門印

藝州御手洗

清水屋

善兵衛殿

右辻維嶽氏ヨリ過般御依頼ニ付、御廻付ニ及候旨ニテ送ラレ候、尚ホ悉クハ追テ調査ノ上、御返答ニ可及トノ義ニ御座候也、

六三六 九月十四日応接之大意

一去ル十四日応接之儀ハ前日決定イタシ候処、夕刻ヨリ又々不定ニ候哉、深更ニ及急決定イタシ候、尤右前日横濱表江亞・蘭両公使、軍艦ニテ出張可致御申遣シ候

事、

一 今般之応接英・佛ヲ相除キ、亜・蘭両公使江ノミ及応接候儀ハ、亜墨利加ハ第一ニ条約被取替候国ニテ、格別懇親ニモ有之、和蘭之儀ハ外国トモ相違、或百年来旧交之国柄ニ付、先鎖港談判手初メ、右両国公使江国内之事情無抛廉ヲ打明シ候ハ、引合ニ及ヒ候積ニテ、及応接候儀ニ有之候、尤応接中亜・蘭両公使江十四日及引合候儀ニテ、英・佛両公使江内分ニ取計可呉旨申談候所、両公使申聞候ニハ、各国共横濱一港之地ニ罷在候儀ニ付、内分取計候儀ハ難出来、帰港次第今日御談判之模様逐一申談候ハデハ、公使之職掌ニ対シ不相濟由ニテ、右様之儀内分取計候テハ、公使之罰ニ有之候趣申聞候事、

但当日応接之席へ相連リ候モノハ、一橋殿御同人ハ他席内ニ被承候

シ、京都ヨリ鎖港之儀ニ付御越居候御使之モノ共、〔坂倉勝幹、老中〕〔井上正直、老中〕〔水野忠精、老中〕

禁裏附、周防守殿、河内守殿、和泉守殿、若年寄、

寺社奉行、御勘定奉行、外国奉行、神奈川奉行、

箱館・長崎之奉行等ニ有之候事、

一 応接之模様ハ前条之通国内人心不折合ニテ、無抛横濱一港ハ鎖シ候趣等縷々申出候処、彼方ニテハ御申談之

儀ニ付、御談之筋委細相伺可申、尤右ハ不容易儀ニ付、迎モ私トモノミ相置候テ相濟候儀ニハ難出来、何レ英・佛両公使江モ篤ト御談判可被成、左候上ハ銘々本国防府江申遣シ、本国防府ニテ委細評議ヲ尽シ候上ニテ、可否之御決答可申上儀ニ可有之、迎モ右様之御談シ向ハ、在留公使共之職任ニテ取計相成候儀ニハ無之候ヨシ申聞候事、

一 末談ニオヨヒ亜・蘭公使申聞候ニハ、先般御国内人心

不折合之趣ニテ、千八百六十三年第一月一日ヨリ我國ノ

月十二日御開可相成筈之両都江戸而港兵庫モ、五ヶ年之御三当ル

延期ニ相成、又々今般モ同断、御国内人心不折合之廉

ヲ以、現在御開相成候横濱港マテ御鎖シ被成候様ニテ

ハ、此後迎モ又々人心不折合ニ付、箱館・長崎之港御

鎖シ可被成ハ必然之儀ニテ、後ニハ外国人ヲ老人モ御

国地江不寄附様之御心地ト奉推察候、日本政府ニテ右

様之御思召ニテハ益浪賊之勢ヲ益シ、外国人ハ兎ニ角、

却テ政府之御威權ヲモ為失、諸藩之勢ヲ強クイタシ候

訳ニテ是ハ薩摩・長州等ノ事ヲ指シ可申候、日本政府之御為ニ不宜儀ト、乍

恐奉存候趣申聞候事、

一 亜・蘭公使申聞候ニハ、今日之御談判ハ右様之儀トハ

更ニ相心得不申、此節柄之儀ニ付、諸藩之内政府へ敵對イタシ候モノ等ヲ御征伐ニモ相成、私共援兵等之御相談ニモ有之哉ト相心得、差急出張イタシ候処、案外之御談ニテ驚入候、畢竟右様之御談ニ有之候ハ、私共御呼寄可被成筋ニテハ無之、御老中方之内態々横濱江御出張ニテ、御頼入可然ト被存候、私共モ右御談シト最前ヨリ心付候ハ、決テ出張ハ不仕事ニ候、已後共英・佛両公使ハ、決テ出張仕間敷候間、左様御心得可被成旨申間候事、

十四日応接之模様ハ、前条之旨意ニ有之、只々此方ヨリ申入候事ヲ彼方ニテ承り候迄ニテ、末段ニ至リ一心之議論ヲ相述候迄ニ有之候、此後英・佛之応接ニテ如何模様相變り候哉難計候得共、過日之応接面ニテハ、急々戦争等之沙汰ニハ及申間敷ト被存候、英・佛両公使江之応接ハ、来ル十九日操練所ニテ、亜・蘭同様呼寄引合候積ニ有之候所、応接之趣旨ハ迎モ出張可仕様子モ無之候ニ付、昨十七日神奈川奉行支配組頭、内命ヲ受ケ横濱表江出張ニテ、英・佛之両館江罷越、出張之儀折入テ相頼候積ニ有之候、此後共彼ヨリ出張相成候哉、時宜ニヨリ此方ヨリ出

張可致哉、未タ右之模様ハ相分り不申候、

六三七 鎖港談判ノ大意

九月十四日鎖港之儀ニ付応接大意

前文略、扱昨日鎖港御談判之御模様、今朝極内其筋ニテ承り候処、御談判之大意ハ御国内追々不折合ニテ、諸侯以下不容易形勢ニ至リ、鎖港之儀ハ、猶

天朝從來之 叡慮ニ付、何レトモ横濱之儀ハ鎖港被成度、若此程ニテ打過候ハ如何様之事変出来モ難計、万一之儀有之候テハ、却テ和親ヲ壞候基ニモ相成候儀ニ付、厚致勘弁承知有之候様ニト之御趣意ニ付、御談御座候処、亜・蘭之ミニストル共申上候ハ如何ニモ無御余儀御次第ト承申候、乍去ミニストル官之儀ハ和親通商之為、御国地へ在留罷在候儀ニ付、当役ニテ直様承知之御決答ハ難申上、否申越候上御答可申上候、且英・佛両国之儀甚心配之儀ニテ、早々御談判被為在候様申聞、尤昨日之所ハ至テ平穩ニ相濟候趣ニ御座候間、一寸御内々申上候、已上、

九月十五日

六三八 横濱風説 (南部彌八郎報告)

当月廿一日閣老^(長行、老中格、唐津藩世子)小笠原侯鎖港之談判トシテ、陸地ヨリ

被相越候積之処、差懸リ延引相成、廿七日同様ノ手筈ニテ亦々サシカ、リ被相延、其後ノ日限イマタ治定無之、当日外国ノ官吏へ差出候酒肴飯菓之設代金凡三百両、兩度分六百両程ノ失費相成、品々ハ掛リ幕吏共打寄給リ尽シ申候、尤談判ノ事實都テ表立被仰渡候トハ表裡ニテ、敢テ嚴敷申達候筋ニハ更ニ相聞得不申、タトヘハ当港ヲ退キ長・箱ノ兩港ニテ貿易可致、畢竟是迄ノ暴業モ右等ヨリ發候儀ニテ、方今我国人心ノ居動形勢等篤ク熟察之上、聞濟呉候様イタシ度ト申位ノ勢ニ可有之、詰リ一時引払ノ儀ハ難波ニ付、一兩年中御猶予追々引払申度旨、外夷共歎願仕候筋ニ共可有御座哉ト申居候輩モ御座候、

但

閣老ノ応接ニハ夷人ヲ奉行所へ召呼候テ對話御座候ニ付、酒食等差出申候由ニ御座候、外国奉行等

ノ節ハ船中へ差越候故、何等ノ手当モ無御座候、

一廿七日外国奉行菊地伊豫守^(隆吉)江戸ヨリ蒸氣船ニテ相越、

付添ノ通詞西吉十郎へ市中ニテ行逢申候間、内々承候処、英国ヨリ申立候償一件而已ノ儀ニテ、申立之通無

減少相渡可申、去ナカラ国用多事ノ折カラニ付、當時何程相渡、殘金ヲ年賦ニイタシ、幾歳ニ相渡可申等ノ

儀ニテ、他ノ論ハ一事モ無之、素ヨリ彼申立通之事ユ

へ、異議モ無之筋ト存候旨申聞候、右鎖港ノ談論、何

故廿七日差懸延引相成候哉不相知候処、江戸へ罷帰承

候へハ、一橋様近々御着、^(松川慶喜)太田・酒井兩侯御掃職等ニ

テ、暫時見合ニ相成候事ニモ可有御座哉ト推計仕候、

一都テ応接向之儀近來別テ隱微ニ御座候間、一兩日過候

上ナラテハ確實ニ分リ兼候旨、通弁共ヨリ承申候、

一鎖港ニ付横濱へ触渡ノ趣ハ、江戸ノ如ク兵端ヲ開ク等

ノ文言無之、至テ穩成文体ニ御座候由、然共日本商人

ハ先日ノ騒動以來其俟ニ相成居、中ニハ既ニ取片付、

夫々へ全ク引取候向モ相見得、之ニ反シ外國人ニテハ

鎖港之談判最初嚴敷、中ニタルミ、後ニモ只今迄之通

ニ可有之杯ト風説仕候、夫故商館雜作ハ勿論、新規家

作賦ノ手金渡等イタシ候向モ御座候由ニ御座候、

一廿八日・九日兩日御小姓与・番頭組下共二組大坂御用

ニテ出立イタシ、大番組モ不時出立之向有之、尚追々

大坂出立ノ向御座候段、駅路ニテ承申候、

一 当時売船種々有之候内、英国鉄製蒸氣船長四拾八九間

至極之美船ニテ、代銀二拾五万ドルラルト申物有之、

尤昨年幕府ニテ買入相成候ジユンキート申候船ハ尤美

船ニテ、拾八万ドルラルニ御座候間、此度ノ船ハ大煥

モアルムストロング(頭註卷「新製大砲アルムストロング」
砲ノ名ヲ据付、軍船形ノ船ニテジユ

ンキーヨリ大キク一段美事ニ候間、ジユンキート同直

ニテ、当金何程渡、残金年賦等ニ相談相整候ハ、宜敷

ト申尊承申候、加州ニテ買入ノ目途御座候得共、余リ

大振、且当時代金ノ差支ニテ見合居候様子ニ御座候、

右之通四月廿六日夕横濱着イタシ、廿八日昼後迄テ

逗留承申候趣ニ御座候、此段申上候、以上、

亥五月二日 南部彌八郎

追テ申上候、英国ニテ出板ノ日本略武鑑両面摺寫枚

入手仕候間差上申候、為御見合

此御方様ノ所へ丸点位置申候、此段モ申上候、以上、

原文凡例

シマヅケ、マツダイラ・シユリーノダイブ、ジユシー

ノジジユー、サツマ・オーシユミ・ヒユガ等、リーキ
ユー、カコシマ、コクシユー、七十一万

六三九 (日本貿易新聞)

日本貿易新聞第二十三号

千八百六十三年十月十四日

即文久三年九月二日

神奈川開版

去ル土曜日ノ午後、我等ハ大坂及ヒ京都(界町門)騷動ノ報告ヲ
得タリ、是確實ノ説ニシテ更ニ疑フヘキノ理ナキヲ以
テ、我等ハ例ノコトク速ニ之ヲ衆人ニ布告セリ、

此新聞ハ重大ノ事件ナルカ故ニ、我新聞会社之ヲ報告
セルコト甚タ早卒ニ出タリ、此ヲ以テ其文モ或ハ誤リ

易キモノアリテ、我等ヲシテ広大無辺ノヲモヒヲ生セ
シム、然レトモ其翌日ニイタリテ、我等更ニ他ノ告知

ヲ得ルヤ否ヤ、直チニ其誤リヲ正フスル事ヲ得タリ、
去ル日曜日ニ我等ハ江戸ヨリ次ノ報告ヲ得タリ、但コ

ノ報告モ同ク之ヲ出板シ、蒸氣船ニ托シテ之ヲ長崎及
上海ニ贈レルモノナリ、

予カ一昨日汝ニ贈リタル新聞ハ、実ニ信用スヘキモ
ノナレトモ、猶少シク之ヲ改メサルコトヲ得ス、

大君ノ臣下ト京都ノ公卿トノ間ニ劇シキ戦ヒアリ、且(誤聞)

大坂及ヒ其近傍ニモ亦争乱起リテ、和州ノ代官及ヒ其配下殺害セラレタル者少ナカラス、

来月八日ニハ一橋公横濱ニイタリ、再ヒ小笠原ノ主意ヲ継テ、外国人ヲ当港ヨリ引退カシメントス、モシ一橋公

此主意ヲ達スル能ハサル時ハ、諸大名各ミツカラカヲ竭シテ之ヲ行フヘシ、之レニ由テ彼大名等ハ既ニ

(兵員多数ニ過ク)

五万ノ兵士ヲ迎フヘキ用意ヲナセリ、

其他外国人ト交易セル日本商人ヲ襲撃セル事アリテ、ソノ兩人ハステニ大坂ニヲヒテ殺サレタリ(事夷)

上ニ挙タルモノニヨリテ、前日得タル新聞ノ誤アルコトヲ知レリ、其後我等之ヲ聞ク、長州党ハ屢天子ニ嘆願シテ謂ラク、諸大名ノ攘夷説ヲ助ケン為ニハ、一介ノ殿堂ヲ修復シテ神ヲ拜スルニシカス、但シ天子ハ長州ノ陰謀アリテ、ソノ天子ヲ脅シ、政府ヲ奪フテミツカラ將軍職ニ任セラレント企ツルコトヲ知ルトイヘトモ、已ムルヲ得スシテ其宮室ヲ出ント欲スルニイタレリ(訛言)、且長州ハ野戦砲二挺ヲ以テ天子ノ宮室及ヒソノ都府ヲ焼打シタリ(市街ノミ焼ヒ)

(慶順、熊本藩主)

細川越中守ハ長州ニ敵対シテ、暫時ノ間ニ彼ヲシテ余議ナク京地ヲ退カシメタリ(誤伝)

越前守其他高貴ノ諸人切害セラレタルヲ以テ、双方共ニ死セル者少カラス(嘘説)

長州ハ、天子及ヒ大君ニ向テ一揆ヲ起セルコト明白ナリ、之ヲ以テ大君ノ船下ノ關ヲ過ル物アレハ、則尽ク之ヲ奪ヒ、或ハ之ヲ発砲セリ(薩州ノ二船ニ発砲セルノミ)、大君ハ全權酒井侯及ヒ其他ノ諸人ヲ長州ニ遣シ、尽ク其領地等ヲ奪ヒトラシメントス、且天子ハ長州ノ官位等ヲソキ、國中ノ最賤キ者ニ貶スヘキ命ヲ下シタリ、然レトモ此事ニ就テ、大君心ヲ用ユルコト甚少キヲ以テ、天子ノ命モ唯中途ニ止リテ、遂ニ此暴逆ヲ屈伏セシムルニイタラサルヘシ、

大抵コレト同時頃ニ、大坂ニ於テモ亦一ツノ争乱アリテ、長州人運上所并ニ代官所ヲ襲ヒ、其出納官ノ重役人、即チ此府ノ副代官及ヒ其他ノ諸人ヲ殺害セルコト少カラス、然レトモ浪人スナハチ暴逆人等ハ、竟ニ敗北遁逃シタリ、

毛利^長ハ江戸・長崎及ヒ浦賀等ニイタル迄、國中緊要ノ場所コトニ其同族ノ人ヲ置ケリ、

兩三日前ニ大君ノ側ニ於テ、別段諸大名ノ會議アリシニ、小笠原ノ主意ニ復シ外國人ヲ逐ヒ攘フヘキ評議ハ、再ヒ之ヲ廢シテ、此主意ヲ行ハン為ニ取極タル期限モ亦之ヲ引延スルニイタレリ(事實)

方今日本人ハ專ラ毛利暴逆ノ事ニ就テ其心意ヲ苦ムルカ故ニ、之ニ比較スレハ外國人ノ一条ハ、猶稍輕キ事ナリトシテ、之ヲ顧ミルニ違アラサルナリ、

日本人ノ中ニモ種々ノ說アリテ、或ハ速ニ毛利ノ騒動ヲ鎮靜セルヲ以テ喜トスル者アリ、或ハ之ニ由テ盛ニ戰爭ノ基本ヲ開クヘキ說ヲナス者アリ、

(井戸ヶ谷)
イトガヤノ殺害(全上)

今日午後凡三時頃ニ、我等將ニ此新聞紙ヲ出板セントスル時ニアタリテ、横濱居留地ヨリ凡二里計ヘタ、リタルイドカヤトイヘル村ニ於テ、外國人ヲ殺害シタル者アリト告ルモノアリ、コ、ニヲヒテ同社中速ニ驅出シ、殺害ノ場所ニイタリテコレヲ見ルニ、殺害サレタルモノハ、米カ亜弗利加第三拔隊龍ノ一部ノ長ニシテ、方今ハ当港ニ在留セルロイテナントカムツトトイヘル人ナリ、

其殺害ノ暴惡ナルコトハ實ニ恐ルヘキ有様ニシテ、其

右手ハ手ツナヲ握リナガラ身体ヨリ切離タレ、其頭・頸及ヒ身体ハ寸々ニ創ヲ蒙リタリ、

蓋シカムツトハ凡ソ午時頃ニ馬ニ乗シテ独行シタル由ナレハ、其殺害サレタルコトハ凡午後二時頃ニアルヘシ、

我等横濱運上所ノ通弁官ヨリ之ヲキクニ、殺害人ハ三人ナリトイヘリ、然レトモ我等之ヲ考フルニ、例ノコトク其同勢尚多カルヘシ、

午後第六時ニ、カムツトノ死骸ヲ横濱居留地ニ送りケリ、之ヲ護送セル者ハ英・佛ノ騎兵・歩兵并ニ佛ノミニストル、其外總テ諸国ノ全權公使ヨリ諸役人ニ至ルマテ夥敷人数ニシテ、是皆此注進ヲキクヤ否ヤ直ニ馬ヲ走ラシ、殺害場ニ至リタル者アリ、

合衆国ノコンシユル及ヒ英國ノコンシユル、独立ノ使臣館ニ在ルメツトマン及ヒ医官ゼンキンス等ハ、第一番ニ殺害場ニ到着シタリ、然レトモ事既ニ過テ之ヲ救フコト能ハス、殺害人ヲシテ其業ヲ遂シムルハ、豈哀ムヘキノ甚シキニアラスヤ、

蓋シロイテナントカムツトハ、行年殆ト二十一歳ニシテ、實ニ其成功ヲ望ムヘキ少壯ノ將長ナリ、之ヲ以テ

彼ノ不幸ニシテ禍ニカ、レルハ、外国会社中誰カ悲歎セサル者アランヤ、

右九月七日翻訳

開成所出役

宮崎元立訳

六四〇 高野山ヨリ御届(中山忠光等ノ事件)

六四〇ノ一

御届奉申上候口上之覚

去ル廿二日夜八半時頃、天朝浪人京都中山前侍從使者尾崎衛五郎・土居左之助・上田宗賢ト申者手勢四拾人計召連、鉄砲・切火繩・拔身鎗ヲ為持、高野山ヘ大口ヨリ登山、一山中ヘ申談ノ筋有之趣ニ付、早速学侶方・聖方・行人共掛合、不取敢行人方天王院長屋商人宿金藏茂兵衛方ニ止宿申付置、夫ヨリ学侶方惣代両院・聖方惣代一院・行人方惣代兩人、金龍院ヘ出張之上浪人方ヘ為致案内候処、拔身ノ鎗十本・火繩ニ火ヲ付、鉄砲十挺計為持、金龍院ヘ入来、浪人共ヨリ別紙写之(朱)通リ袖扣一通差出候ニ付、各一見ノ上一同示談候テ御答可申入旨申入置引取、三派共重々掛合ノ上別紙写之通復書相認、翌廿三日九時前五ヶ院前夜ノ通面会ニテ

差出候処、一見ノ上浪人共申口ニハ、是ハ尤ノ復書ニテ候ヘ共、僧侶常体ノ事ニ候、此度申入候ハ不存、別紙武刃ヘ荷担イタシ候カ、又ハ

天朝ヘ可随カ否之処答一刻モ早ク可致旨申候ニ付、重々及応接候得共一向聞入不申、苦々敷儀ニハ候ヘ共、僧侶ノ身分ニテ別ニイタシ方モ無之亦々引取、一同示談ノ上御答可申入旨ニテ互ニ一応引取、浪人方ヘ宿役人兩人差遣シ、入魂ヲ以先方ノ心底為相探候処、此上一山ノ答振ニヨリ、当山ニ於テ致一戰候外無之抔ト、言語同断ノ儀申居候由承帰候付、三派各大評議中ノ処手間取候ハ、一山ヲ忽チ焼払フヘキ用意ニテ、人足共追々登山候由相聞、誠以差急ノ難目前ノ場合ニ押移、三派一同進退相迫リ、右様ノ狼藉者ニハ理解難相整様奉存、無抛急難ヲ遁レン為、先方之申分ニ順シ、別紙写之通リ再復書相認、亦々前五ヶ院列參ニテ差出申候(朱)処漸ク致納得、請取ノ天ノ川辻御本陣中山公ヘ差上可申、又々御用向ノ次第ニ寄可致登山ト申置、同廿四日五時過先無事ニ皆々大和口ヘ引取候趣、本山ヨリ申越候ニ付、此段御届奉申上候、以上、

九月四日

大徳院代

寺社

正覺院

御奉行所

六四〇ノ三

口上手扣

今般此表御発向御袖扣之御旨一同敬承奉恐縮候、当山
八千有余年奉浴

六四〇ノ一
右ニ付往復書三通

袖扣

今般此表発向之趣意ハ、大和

行幸

神武帝山陵・春日社へ

御逗留、御軍議モ被為 在候テ、

神宮へ

行幸御座候付、正義ノ諸藩ハ

神宮へ予メ集參可被致ト 御沙汰有之候ニ付、募義ノ

奉迎

鸞輿、且此頃於京都松平相摸守反心イタシ候ニ付テハ、
(池田慶徳、因州藩主)

皇国ノ人奮起セスンハアルヘカラズ、因テ其山内ノ趣

意モ予メ致承知度使者差向候付、御応接ノ上御覚悟ノ

復書待入候事、

八月廿二日

六四〇ノ四

口上手扣

今般此表御発向御袖扣之御旨一同敬承奉恐縮候、当山
八千有余年奉浴

皇国ノ御恩、深難有拜戴罷在候法体ニ御座候へハ、日
夜(夜)安全御願、円満天長地久之御祈奉抽丹誠候外無

他事候、猶向後聊改転仕間敷候、山内一同心得旁申上

候、以上、

八月廿三日

六四〇ノ四

口上手扣

今般此山へ御発向御袖扣ノ御旨敬承奉恐縮候、当山ハ

千有余年奉浴

皇国ノ御恩沢、難有拜戴罷在候、然処当節之儀ニ付、

何方ヨリ何事ヲ申来候共与党仕間敷候、勿論

勅願山ニ御座候間、

叔慮ノ御旨堅相守可申候、万一臨時

朝廷 御遷座被為在候節ハ、擲身命急度可奉守護候、

其余不寄何事御差図相背申間敷、一山一同深相心得急

度改転仕間敷候、依テ被仰付候通捧復書候、以上、

八月廿三日

右之通承得申候間、此段申上候、以上、

亥九月廿八日

南部彌八郎

六四一 和州浪士長州邸へ入ル云々達書

六四一ノ一

長門宰相家来へ

今般和州賊徒追討ノ儀諸侯へ被 仰付候処、昨廿七日
藤堂家寄手ノ者へ追寄、浪士八九人計リ浪花表へ逃去、
其藩屋敷へ被入候趣キ相聞へ候間、右浪士共搦取、藤
堂家討手ノ者早々可引渡旨被 仰出候事、

九月廿八日

六四一ノ二

〔忠敏 傑山藩主〕
青山因幡守家来へ

松平大膳大夫家来へ御沙汰有之候就テハ、同人家来出
京潜伏致シ候者共ハ、逐一屹度取締候様、御固メノ面
々可相達旨伝 奏衆ヲ以テ被 仰出候、此段申達候、
以上、

九月廿八日

六四二 京都報告〔兵庫開港期日〕

先年言上仕候兵庫開港之期限、当月頃之由此間四五
字廢爛

有之候、早々取調此間六七
字廢爛 追々攘夷可被 仰出之処、万
一如風説当年開港夷人幅湊候テハ、甚不都合千万候間、
前条

御沙汰被為 在候段可被 仰越旨、〔慶司輔殿〕 閔白殿被 命候由
被申越、

御沙汰之趣敬承仕候、右兵庫開港期限之儀ニテハ、兼
々御配慮被為 在、既ニ各国へ

御使ノ者被差遣、延期之儀精々為及談判候儀ニ付、当
年開港ハ決シテ無之事ニテ御座候、此段宜閔白殿へ御
申上有之候様存候、以上、

九月廿日

〔勝殿、老中、備中松山藩主〕
板倉周防守

〔宗精 同上 山形藩主〕
水野和泉守

〔信義 同上 丹波龜山藩主〕
松平豊前守

〔慶永、前福井藩主〕
松平春嶽

〔慶喜〕
徳川刑部卿

〔俊寛〕
坊城大納言殿

六四三 一揆討手ノ面々へ達書

大目付へ

先達テ以来一揆蜂起之儀ニ付、不被為安

宸襟、過日討手之儀被 仰出候得共、捷報無之猶予ノ
形ニ相見ヘ、弥以被惱

御慮候、策略之次第モ可有之候得共嚴重申付、寸刻モ
早々打取鎮靜有之候様、昨今再度野宮宰相中將ヲ以被
(定惣)
仰出候間、急々退治奉被達奏聞度候事、

九月四日

六四四 海軍掛へ聞繕書面

亥九月十三日周防守殿江讓之助ヲ以進達

和蘭国江御詔蒸氣機関之儀ニ付奉伺候書付

和蘭国江為御使罷越候ハ、長崎製鉄所江据付可相成見
込ニテ、詔置候式拾五馬力蒸氣機関長崎表江着イタシ
候ハ、製鉄所ニ有之候六馬力蒸氣機関江戸表江相廻、
(保徳、勘定奉行)
大小砲鑄立掛江引渡候様可仕、尤委細之義ハ竹内下野
守江可談旨、御書取ヲ以被仰渡奉得其意候、然処長崎
表製鉄所之義、此上鍋島直大、佐賀藩主松平肥前守獻納製鉄諸器械御据付
相成候得ハ、最早右式拾五馬力蒸氣機関御取建可出来
余地無之、且縱令御取建出来候テモ、素ヨリ辺陲之土
地、数多之諸器械御備置程之用ヲタシ申間敷、殊ニ六
馬力蒸氣機関ハ、元来大小砲鑄立御用可相成品柄ニモ

無之候間、右ハ長崎表江被差置、式拾五馬力之方御取
寄、江戸近海御都合宜御場所へ御取建御遣ヒ御座候方、

万端格別御便利可宜奉存候間、右之通被仰付候方ニハ
御座有間敷哉、伺之通被仰渡候義ニ候ハ、式拾五馬
力蒸氣機関和蘭国ヨリ持渡候上、長崎表江陸揚等手数
相掛候ハ無益之御失費ニ付、同所着船次第其船便ヲ以、
直ニ神奈川表江為相廻候積取計候様可仕ト奉存候、依
之下野守江モ申談、此段奉伺候、以上、

亥九月十三日

(忠恕、大白付)
大久保豊後守

服部肥後守

右別紙一通ハ、当所稻佐製鉄所ヨリ御老中へ伺出相成
候由ニテ、其筋ヨリ差出シ、弥盛ニ御取立之趣ニ御座
候、依テ為御見合写取差上申候、以上、

亥九月廿日

長崎御附人

六四五 (英国軍艦渡来一件)

六四五ノ一
英夷渡来ニ付関東之事情切迫ニ付、防禦之為大樹掃府之
義尤之訳柄ニ候得共、京都并近海之守備警衛策略大樹自
指揮可有之候、且攘夷決戦之折柄、君臣一和二無之テハ
不相叶候処、大樹関東へ掃府、東西相離候テハ君臣之際

情意不相通、自然間隔之姿ニ相成、天下ノ形勢不相救之場ニ可至申候、其当節大樹帰城之義ハ、於

叡慮不被安候間滯京有之、守衛之計略被相運、奉安

宸襟候様

思召候、英夷応接之義ハ浪華港へ相廻シ、拒絶談判可有之、開兵端候節ハ大樹自出張、万事指揮候得ハ、皇国之志氣挽回之機會可有之

思召候、関東防禦之義ハ、可然人体相撰被申付候様御沙汰候事、

三月十七日於 小御所

関白殿一橋へ被相渡

前書之趣大樹家御請仕候節ハ、攘夷之御首途ニテ直ニ八幡へ行幸、於 神前節刀賜思食御座候、

^{六四五ノ一}此度横濱港へ英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎義出立掛、

生麥ニオヒテ三郎家来英吉利人ヲ及殺害候儀ニ付、三ヶ

条之申立何レモ難聞屈筋ニ付、其趣ヲ以可及応接候間、

速ニ兵端ヲ開候哉モ難計、依テハ銘々藩屏之任有之候ニ

付、夫々備向手当モ可有之間、心得ニ相達候事、

二月廿九日

右薩州ト英吉利之一件ニ付大評定、

二月廿九日壬生新徳寺へ聚会、但山岡・松岡両公・諸組隊長并隊中三五人ツ、目付役・世話役共ニ新徳寺本堂へ集、

右島津一件、英吉利申立候三郎ヲ渡候欵、贖金出候欵、右不承知ニ候テ、薩州へ軍艦ヲ差向可申段申出ル、右三ヶ条イツレモ許シカタク、但シ

大樹公ハ御道中ニテ御守被遊、御附御供大越公・板倉公等断然ト御断之義、京師御詰一橋公其外獨老方ニテモ早々相断可申段御評決ニテ、今朝御目付澤勘七郎外獨老人出

立下向被致候ヨシ、右ハ薩州之一件ニテ直ニ戦争ニ相成

候義、大体之攘夷ヨリ先ニ相成候テハ、大体之趣意薄ク相成候ニ付、攘夷御断之義ヲ先へ致度トノ評定ニ候、各異見モ有之、大評定ニ候、今日大風雨ナリ、

今日昼後ヨリ為見廻速水又四郎出張致シ候間、此段為心

得御達シ申候、以上、

三月朔日

取締出役

老番組

七番組

六四五ノ三

急廻状

取締役

追テ廻状順達留リヨリ御返却可有之事、

鵜殿鳩翁〔長統〕

此度横濱港へ英吉利軍艦渡來、昨戌年島津三郎儀江戸表
出立之節、於生麥英吉利人兩人打果候儀ニ付、三ヶ条之
儀申立、何レモ難聞届筋ニ付其旨及応接候間、速ニ戦争
可相成事ニ候、依テハ其方引連候浪士共早々帰府致シ、
江戸表ニ於テ差図ヲ受尽粉骨相勤候様可被致候、
右之通被 仰出候間可被得其意候、

取締役

一番組ヨリ

七番組迄

小頭

目附世話役中

六四六

〔英国新聞〕

〔采〕文久三年癸亥
千八百六十三年第七月廿七日、我六月十三日

日本部

我カ大英日本ノ事情ニ就テ、和戦孰レカ是ナルコトヲ
會議ス、其説紛々タリ、コッチレン氏其座ニ在テ曰ク、

他事ハ予姑ラク是ヲ舍ク、英ノ日本ト難ヲ構スル必シ
モ不得止ノ大變故アルニアラス、細故ヲ執テ和親ヲ絶
チ、鬻端ヲ啓クコト是トスル所ニアラス、況ンヤ彼レ
戦争ヲ求ムルニ意ナシ、吾今是ヲ挑ム、是其禍福利害甚
タ観カタキニアラス、我カ国人日本ニ行キ其節度ヲ奉
セズシテ、漫リニ炮礮ヲ動カスコト波瀾万里勢態悉シ
カタシ、先ツ其情態如何ヲ詮議スヘシ、是急務ノ一ナ
リ、
總シテ我国日本トノ条約支那ヲ開端トシ、纔二千八百
五十四年ニ始ル、是ヨリ前ハ吾国未タ日本ノ如斯上國
ナルヲ識ラス、渠レ国体ノ齊整人俗ノ偉美ナル、吾謂
フニ、自余ノ自ラ礼節文華ヲ具フルト称スル国土ト云
ヘトモ、ソノ実ハ日本ニ恥ツベキコト少ナカラス、千
八百五十三年ニ当リテ、惡墨利加合衆国始テ日本ト通
信シ、翌年盟約ヲ許ス、是ニ於テ我カ上將ロルトエル
ギン始メテ日本ニ行テ仮条約ヲ許ス、是ニ於テ我ニ於
ル和親ノ步驟ヲ見ルニ、渠レ決シテ輕挙妄動スル者ニ
非ス、然ラハ則当今ノ事勢我ヨリ主トシテ其兵端ヲ開
クニハアラサルカ、且其事タル始終弥々我ニハ失錯ナ
キヤ否ヤ、其初何等ヲ彼ニ求メテ、事勢竟ニ此ニ及ヒシ

ヤ、先此三者ヲ糺明訊問シテ、而後戦闘ノ議ヲ為スヘシ、且戦ニ至テハ如何シテ勝ツ、審ニ察シテ而後発セサルヘカラス、不然時ハ許多ノ費用ヲ疲ラシ、国ヲ蠱シ民ヲ損ス、其禍少ナカラス、且渠カ盟約中ニ云ヘルコトアリ、曰ク、江戸ニ近キ幾里内軍艦ヲ碇泊ヲ許サスト、然ルニカルトエルキン既ニ軍艦ヲ其限内ニ入ルヲ見、我国人等カ処所不当ナルモノアルヲ知ルニ足レリ、加之我艦ヲ入レ、彼レ之ヲ拒ム時ニエルト答曰ク、余直ニ大君ニ謁シテ議スヘシト、豈簡慢恠侮ニアラスヤ、我レ日本ノ国体ヲ察認スルニ、彼レニ神ナル帝王アリ、方隅国郡ヲ管領スル諸侯アリ、更ニ帝王ニ次ク諸侯ヲ管轄スルノ大君アリ、其ノ建国鄭重敦実ナル、仮令吾輩簡傲ヲ以テ之ニ加ント欲ストモ、何ソ彼ノ帝王大君ヲ凌轢スルコトヲ得ンヤ、然レトモロルトエルキン遂ニ大君ニ謁シ、望ヲ達シテ帰ルコトヲ得タリ、当時大君ノ議ニ以テラク、本邦二百五十年來民昇平ヲ楽ミ、食足り、財富ミ、他ノ貿易ヲ須ツ所ナシ、且支那一タヒ貿易ヲ許サ、ルノ愈レルニ如スト、其前見遠慮アルコト如此、然ルニ聘ヲ厚フシ、礼ヲ卑フシテ我遂ニ望ヲ達スルコトヲ得タリ、今僅々タル細故ニヨツテ、小

忿ヲ忍ヒスシテ兵ヲ動かシ、刃ニ饜ラントス、是ヲ公正ノ理ト云フコトヲ得ンヤ、嘗テ日本ノ礼ナキノ國ト聞シニ、文吏ヨリフヘント等日本ノ礼法ニ敦ク、財貨富饒ナルコトヲ称ス、サキ二千八百五十八年ニ当リテ、Gen. Rutherford Alcock イギリス特派全權公使ロツゾルフルトアルコツク条約ノ為メ日本ニ行シ時、彼此礼節欺待ノ状ヲ聞テ、其輕卒暴戾ナラサルコトヲ知ルヘシ、アルコツク数々日本人ノ善良懇信ナルコトヲ言ヘリ、アルコツク曾テ彼ノ名山ニ登リシトキ、其路程ノ村落ヲ觀テ彼ノ国人ノ善良ナルヲ明証セシコトアリ、アルコツクヨリロルトマルメスポリーニ送リシ書中ニモ、日本善治ノ体ヲ叙ス、此数説ヲ參觀スレハ、彼国礼節アリ財貨アリ、輕侮シ易カラス、今日ニ至テ俄ニアルコツク戦争ノ警ヲ報告ス、余謂フニ、凡ソ外國ニ出テ事ヲ処スル者宜シク其度量ヲ寛大ニシ、謹テ輕躁ヲ戒ムヘシ、アルコツク今日ノ所報余カ深ク是トセサル所ナリ、アルコツクカ初メ横濱ニ至ルトキ、日本人急ニ館舎ヲ營ス、専ラ外国人ヲ横濱ニ集メ、神奈川ノ駅ヲ距ルコト近ラサラシム、コンシユル國人其意ヲ悟リテ、館ヲ神奈川ニ築シコトヲ請フ、日本ノ執政アルコツクニ諭シテ、神奈川ハ侯伯朝覲ノ駅路ナリ、

侯伯ヲシテ開港ノ議ニ協和セシメハ可ナリ、今不然シテ賣場ヲ神奈川ニ設ルコト、各國ノ為ニ便ナラスト云ヒシカ、後果シテ^{中タヒ}リスチャルトソン其他数人、諸侯ノ通行ニ出会ヒ、誅斬セラル、者少ナカラス、今吾國人其事ニ就テ償ヲ責難ヲ抗ス、皆其宜シキ所ニアラス、既ニシテ千八百五十九年横濱ノ繁昌言語ニタエタリト云フ、彼ノ推場ヲ横濱ニ築キ、侯伯ノ通路ト相隔シムルコト、全ク政府ノ厚意ニ出ルコト此ノ如シ、且日本政府ノ諭言ヲ聞クニ、我國人未タ外國人ニ慣レズ、故ニ是ノ多少ノ鬪斬アリ、吾將ニ往々之ヲ禦カントスト、凡事皆ソノ厚意然ラシムル所ニ非ルコトナシ、今アルコツク俄ニソノ通信ヲ壞ランコトヲ報告ス、雖然此度ノ事先キニアルコツク等カ謂フ如ク、我國ニモ又非アリ、何ントナレハ姑ク我ヨリ強テ貿易ヲ求メ、条約ヲ請ヒ、後チ一二ノ細故ニヨリテ忽チ兵ヲ馭テ之ニ迫ラントス、已ニ理ノ至当ナルモノニアラス、況ンヤ吾國民其法ヲ守ラサルモノ亦或不少ヘシ、此ニ由テ之ヲ視レハ、倫盟ハ独リ日本ノスル所ニアラサルヘシ、然ルニ事ノ是非ヲ問ハス、俄ニ之ニ兵ヲ加ヘントスルハ、何ゾ賦税ヲ緩メテ後チ其レニ利息ヲ加ヘ、不納ヲ責ル

ニ異ナラン、且日本ニテノ合戦間々陸軍ヲ須ユ、徒ニ水軍ノミヲ頼ムヘカラス、サレハ我國官吏ノ日本ト難ヲ構スルモノ我陸軍ヲ印度ニ備フルヲ知り、応援大便ナルコトヲ喜ブヨリ起ル所ナルヘシ、我商民等日本ニ行キテ、倍徒仟佰ノ益アル其金ヲナセリ、アルコツク、カイール、ロツゾルニ送リシ書ニ、日本金銀ヲ外國ニ輸出スルコトヲ禁ス、近頃江戸城ニ火アリシモ、外國人ニ換金ヲ許スヲ惡ム徒ノ所為ナリトソ、アルコツクハ英商民ノ所為悉ク是ナリト思ハス、仍テ日本政府ニ告セシコトアリ^{此一節原文ノ意領會シ、今續ニ直記シテ其本色ヲ存スルノミ}、商民ノ情態如此、況ンヤ日本公使タ、殷富ナルノミナラス、多ク從衛士馬ヲ率ユ、我レ若穩ニ通信ヲナサハ、彼亦穩ニ貿易ヲ營ミテ、必スシモ我ヲ拒サラン、然ルヲ今狼リ二千戈ヲ動カシ、生靈ヲ損害シテ之ニ加フルニ兵ヲ以テセハ、彼レ何ソ其契書ヲ裂キ、我戰艦ヲ退ゾケサルコトヲ得ンヤ、今日ノ戰吾ハ信セス、リツテル氏ノ議ニ曰ク、今ヨリ二三月ヲ待ス、人々必ラス我カ政府ニ詣テ日本ニ対スル処置ヲ請フヘシ、余ヨリフヘントレノ説ニツイテ之ヲ考フレハ、初メ日本吾ヨリ先キ魯西亜・亜米利加ニ通信ヲ許セシ故ヲ怒ランコトヲ懼レテ、吾ヲ有

ムル為メ此盟ヲタツ、サレハ此盟カレノ権宜ニ出テ、日本 皇帝ノ心盟血誓ニアラズ、ソノ所開ノ港偏ニ江戸所隸ノ諸地ニ限ルヲ覩テ知ルヘシ、況ンヤ日本人ヲ見ルコト寇讐ノ如シ、蓋シ彼レ魯西亜・亜米利加ノ其國ヲ輕蔑スルニ懲ル故ナリ、然シテ有士諸侯ハ閑ラス、是日本條約ノ真條約ニ所以ナリ、今我戰爭ヲナス、誰ヲ敵トシテ戰ハントスルヤ、日本皇帝ト戰フヤ、抑大君ト戰フヤ、又諸侯ト戰フヤ、余先コレヲ問ハサルコトヲ得ス、夫レ戰ヲコノ地球上ニナス、モト至重ノ事、体生靈ヲ惱シ、費用ヲ疲ラス、豈輕拳妄動スヘケンヤ、レイアル嘗テホント局中ノ建議蓋シ戰ヲ進ムルノ策ナルヘシヲ聽テ、是ヲ是トセス、頗ル和議ヲ旨トス、其故何トナレハ、初メ魯西亜・亜米利加二國日本條約ニ入シトキ、レイアルト英國ノタメニ建議シテ謂ラク、通貿易(商賈)ハ國ノ急務、今日本ト盟ヲ訂シテ魯・米ニ鞭ヲ着セサレハ遺憾ナリト、然ルニ今各國トヒトシク貿易シ、ヒトシク和親ス、豈懷ニアラスヤ、其約ロルトマルメスボリーノ命ニ由テ、ロルトエルジン之ヲ成ス、若日本條約ノ信スヘカラサルヲ知ラハ、ホント局中宜シクコレヲ事ノ如シテ争止ムヘシ、然ルニ當時其事ナリ、今ニ至リ俄ニコ

レヲ批評シ、輕々シク戰ヲ議スルハ何ソヤ、日本ノ情勢陽ニ和親ヲナシ、陰ニ吾ヲ計ラントスル姦謀詐術アルニ非ス、タマ／＼外國通信ヲ拒ム徒アリテ、事コ、ニ及ヘリ、何ヲ以テカ彼レト絶テ禍難ヲ構スベケンヤ、宜シク吾レ日本ヲ窘辱スルノ意ナキコトヲ表シテ相和スヘシト、是ヨリ英ノ國論一定シ、商民無事ニシテ禍ヲ蒙ル者ノ償ヲ請シメ、政府ヨリモ日本政府ニ謂テ凡商民ノ請フ所ハ許シ、鬪暴ニ及ハサランコトヲ計ルニ帰セリ、

六四七 二月十九日英國船將ヨリ差出書翰之大意

英國之高官ヲ生麥ニオイテ殺害イタシ候島津三郎并ニ一類之者ヲ不殘召捕、英人立合之上ニテ首級ヲ刎候様致度、此儀日本政府之御威勢薄シテ御処置難成候ハ、償金トシテ五拾万ホントステルリンク我國三十万兩ニ宛ルヲ政府ヨリ差出シ可有之、其上ニテ薩州鹿兒島へ廻リ、島津家ヨリ殺害ニ逢英人妻子養育料トシテ、三十万トルルヲ請取可申候、若相拒ミ候ハ、戰爭ニ可及候間、日本政府ヨリ重キ役人扈人檢使トシテ、是非共軍艦へ御乗組相願度存候、右ハ今十九日ヨリ廿日廿四時廿四日

ハ我政府之命ニ無之、全之間返答被下度、猶予之刻限此刻限ハ三月九日ニ宛ル後船將手限之猶予之由、相過候ハ、即刻軍艦ヲ廻シ、大坂ヲ始メ長崎・箱館其外諸湊ニ至迄出入船ヲ奪ヒ、且江戸ヲ焼払ヒ可申候、是 英国旗章并ニ条約ヘ対シ、日本政府之越度有之ニ付、無拠此事件ニ及申候、

六四八 亥二月廿一日英吉利人へ御返翰

貴国第四月六日附之書翰并別封トモ落手セリ、被申越候事承知セリ、早速 大君殿下へ報通可致、將又其軍艦ヲ以薩州へ差渡、夫々談判之品アラントノ由ニテ、今更別ニ弁論ヲ費スヲ待ス、兼テ其許ニモ我國ノ事情ヲ承知被致候如クナレハ、右之一挙ハ意外ノ患害差起リ、一層之葛藤ヲ重ネ、互之不和ヲ醸シ候場合ニ可至哉モ計カタク、且我國之制度ニモ差響、品々不都合之廉少ナカラス、深く痛心スル処ナレハ、右薩摩国へ軍艦差渡サントノ義ハ見合候様致度、今一条モ政府ニオイテ当節殊更ニ配慮有之折ナレハ、暫其所置ニ任セラレ候様ニ望ム所ニ候、就テハ当方高貴之士官一名乗組セ候儀ハ、其需ニ応シカタク、勿論是以 大君殿下へ言上之回復ニ可及ケレ共、不取敢返書旁此

段申入候、拜具謹言、

文久三亥年二月廿二日

(信篤 老中、龜岡藩主)
松平豊前守花押

(正直 老中、浜松藩主)
井上河内守同

六四九 当月廿七日在京諸大名方へ春嶽様ヨリ御

渡シニ相成候書付

此度横濱港へ英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎義江戸出立掛ケ、生麥ニ於テ三郎家来英吉利人ヲ及殺害候ニ付、三ヶ条之義申立、何レモ難聞屈筋ニ付、其赴ヲ以可及応接候間、速ニ兵端ヲ開候哉モ難計候間、銘々藩屏之任ニ有之候ニ付、夫々備向手当方モ可有之候間、為心得相達候事、

同夜彦根家へ御渡シ書付

此度江戸表へ異国軍艦差向、三月八日迄相待御答無之候ハ、戦争ニ可及之旨申立候、右ハ御承引ニ相成候筋ニ無之候間、御一戦之御覚悟ニ有之候ニ付、其方へ横濱ヨリ川崎迄之辺ヲ御警衛被仰付候、早々人数差出シ防禦尽粉骨候様可致候旨被仰出候、

六五〇 大坂三郷町触

京地近海へ蜚船渡来イタシ候節ハ勿論、平日迎モ
帝都御守衛之諸家、多人數入込ニ相成候処、古来ヨリ
運送不弁利之土地柄故、糧米以下市民食料薪炭等欠乏
無之様、専手当之儀

御所表ヨリ厚御沙汰之次第モ有之条、是迄西国・北国
筋ヨリ諸湊廻船致シ来候向々、定限之外米穀ハ猶更右
数相増、日用之品可成丈相廻可申候、右ニ付水陸駅場・
間屋共仕来ニ泥ミ、無謂手数ヲ掛ケ、運賃等食候旧弊
ハ速ニ相改、猶船車造増、或ハ新道・新川等開拓之義
ヲモ心付候者ハ、其筋へ可申出候、尤御料ハ御代官、
私領ハ領主・地頭ニテ、方今之御時勢相弁、都テ直積、
京着之上払米等イタシ不苦事ニ候間、何レモ 皇都非
常之御備第一ニ心掛候様可取計候、

亥三月 越前

彦岐

三郷

惣年寄へ

六五二 大坂御城代ヨリ達書

唯今從京地宿次到来、一昨廿九日切紙致披見候処、昨
戌年八月島津三郎儀江戸出立之節、於生麥英吉利人兩
人相果候ニ付、同国ヨリ此度横濱港へ軍艦差向、三ヶ
条申立候処、右ハ難聞屈筋ニ付、其旨応接ニオヨヒ候
間、速ニ戦争ニ可相成、此段当地之面々へモ可相達旨、
春嶽殿ヨリ申来候間、此段為申述如此御座候、以上、

三月朔日

松平伊豆守

兩御定番
宛

町奉行

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
〔紙数五十三枚〕の記載あり〕

六五二 文久三年癸亥十二月薩摩ノ汽船ヲ下ノ關

ニ擊沈メタル事実附十六節

市來四郎談話速記

吉木竹次郎 速記

明治二十六年一月十七日午後二時一同着席、市來四郎

君臨席、

市來君 早ヤ三十年ニモナルコトデ能ク覺ヘマセヌケレ

ドモ、中原サン御相對デ御話致シマス、オ互取調上関

係ノ輕カラヌコトデゴザリマス、文久三年ノ十二月二十四日ノ夜、薩摩ノ蒸氣船ヲ長州様ノ兵隊ガ砲撃シテ打沈メマシタコトガゴザリマス、其御話ヲ申上マス、私ガ下ノ關ニ於テ其顛末ヲ談判致シタ事実ガゴザリマスカラ、忘レタ事モ多ウゴザリマスケレドモ、差向キ記憶丈ケノ御話申上ゲマス、就テ私ガアチラニ出掛ケマシタ始メカラノコトヲ少シ御話シ致シマス、左モナケレバ話ガ続カヌ様デゴザリマス、私ガ下ノ關デ御談判致スト云フモノハ、全ク突然ナ事デ、実ニ予想外ニ出マシタ御談判デゴザリマス、

御承知ノ通り文久三年七月、鹿兒嶋灣ニ於テ生麥事件ニ就テ英艦ト戦ヒマシテ、其後長州様ヨリモ軍サノ御見舞ト云フ御使ガ参リマシテ、御藩ニハ下ノ關ニ於テ外国ト御戦争後デゴザリマスカ、弊藩ヘ援兵ノ御相談旁ノ御使モ兼ネテ居ラレタソウデス、其他藝州・熊本ナト、或ハ御近親ノ所カラ御見舞ノ使ガ続々参リマシタ、藝州ヨリハ宮田権三郎外六七人参ラレマシタ、此宮田ハ御使ノ中ノ重立チタル人ト聞ヘマス、御側ニ使ハル、人ト云フコトデゴザリマス、外ニモ六七人デゴザリマス、サウシテ鹿兒嶋ニ参ラレテ御見舞ノ儀式済

ミテ、各地戰場ノ見置ナト申込ミニナリマシテ、私ガ
案内致シテ、戰場ヲモ見セマシタ、私ガ案内致スモ訳
アルコトデ、去年即チ文久二年夏、幕府ノ許可ヲ得テ
琉球通寶ヲ拵ヘルコトニナリマシタ、私ガ其方ノ事務
ヲ有ツテ居リマシタ、琉球通寶ハ名義デ実ハ天保錢デ
アル、目方又ハ格好モ同様拵ヘル様ニ許可ヲ得マシタ、
夫等ノ事ヨリシテ鹿兒島ニハ地金ガ乏ウゴザリマスカ
ラ、廣嶋ニ内々手ヲ廻ハシ、本料ヲ買取ル事ヲ約束致
シテゴザリマス、ソコデ私ハ担当ノ事デゴザリマスカ
ラ、戰場見物ノ案内旁其縁故カラ致シタデゴザリマシ
タ、夫レデ貿易ノ取極メモ致シタガ、夫レハ別問題デ
ゴザリマスカラ、他日御話シ申シマシヨウ、ソコデ廣
嶋ノ御使ガ帰ラレ、天保錢散布ノ手段彼是ニ、御手洗
田郡豊町
島ニ貿易会所ヲ立テマシタ、夫レモ私ノ担当デゴザリ
マス、夫レ是レノ所ヨリシテ、軍サ御見舞ノ御使者ノ
御答札ナリ、貿易ノ拡張方ニ就テ廣嶋ニ參レト云フコ
トデ參リマシタ、サウシテ其使者ヲ終リマシタ後チ、
長州ノ動靜モ聞キ糺シテ上京セヨト云フコトデ、彼是
今日デ云ヘバ、名義ヲ仮リテ探偵ト云フ様ナ者デゴザ
リマシタ、モウ一ツニハ英國トモ再ビ戦ハフト云フ表

通りノコトニナツテ、砲台建築又ハ修造等ニ忙シク、
其時俄ニ大砲ヲ拵ヘルコトニモ行カヌカラ、外国ニ注
文スルガ宜イトイフコトニナツテ、私ハ會計上ノ事ヲ
持テ居リマスカラ、私ニ注文方ヲ引受ケサセマシタ、
其代価ノ払ヒモ私が担当デ致セト云フコトデゴザリマ
シタ、鹿兒島ヲ出立シテ長崎ニ出マシテ、大小砲ノ注
文致シマシタ、夫レハ先日略ホ御話シ申シタ所ニ続キ
マス、其用ヲ終ヘ、佐賀ニ出マシテ、大隈重信サン杯
ニ其時會ヒマシテ、鹿兒島ノ戰爭ノ諮問ニ逢ヒ、其時
マデハ長崎ニモ出タ事ハ無イト云フコトデ、質朴ナ風
デ、小銃ナンド自分デ担ギテ来テ見セル様ナコトデ、
彼是レサウイフ話ニ徹夜致シマシタコトモアリマス、
三日程逗留シテ、サウシテ太宰府ニ行ツテ、正月元日
ノ御祭式ヲモ拜見致サウト、十二月二十九日ト心得マ
ス、太宰府デノ巷説ニ、下ノ關ニ於テ長州ノ人々ガ薩
摩ノ蒸氣船ヲ撃沈メ、多クノ人ガ死シタト云フコトデ
ゴザリマシタケレドモ、其以前ヨリ長州ト軋轢ガアツ
テ、國人皆ナ敵視シテ居リマシタ、其辺ノ者ニ聞ク所
ガ愈々相違ナイ、誰某ハ斯フ云フ、誰某ニハ斯ウイフ
手紙ガ来タトイフ稍々実ラシイ話デ、夫レデハ一國ノ

恥辱デアル、相済又事デアルト思ヒマシタケレドモ、何分巷説デアリマスカラ、夫レヨリ福岡ニ出テ御親戚ノ事デモアリ、説ヲ確メマシテ、其上如何様ニカ場合モアラウト考へ、太宰府ヨリ直チニ出立シテ福岡ニ参リマシタ、吉永源八郎ト云フ人ハ齊彬存生ノ際、度々鹿兒嶋ニ御使ニ来タ人デ、懇意ニ交ツタ人デアルカラ此ノ人ニ聞キ、又ハ長湊公モ御^{〔黒田筑前藩主〕}在國ト云フ事デゴザリマスカラ、尊慮ノ程モ伺ツテ私文ケノ尽ス所ガアラウト思ツテ、暮方ニ太宰府ヲ立チ福岡ニ参リマシタ、夜モ更ケテ居リマシタケレドモ、吉永ノ宅ヲ訪ヒマシタトコロガ、幸ヒ在宿デ最早ヤ息ンデ居ラル、ト云フトデアツタガ、面会ヲ申入レマシタトコロガ会ツテ呉レマシタ、サウシテ第一ニ虚実ノ程ヲ尋ネマシタトコロガ、如何ニモ其通りノ筋デアル、御上^{長湊公}ニモ余程御心配為サレテ、此レヨリ薩摩トハ軋轢ガ一層甚シクナロウト、御心配ノ御話ナド細々ニ承リマシタ、其事柄ニ就テハ委シク分ツテ居ルコトデ、御手許ニハ今日ニモ風説書等ヲ私が取次ヒタ次第デ、余程委シク事実ハ分ツテ居ルト云フコトデ、夫レ文ケ確カニ伺ヒマシタカラ、是ヨリ小倉ニ参ツテ、長州ノ人々ト談判シマ

セウト見込ノ趣モ語りマシタトコロガ、吉永申サル、ニハ、如何ニモ御尤ノコトデアル、併シ美濃守様ニモ御心配遊バサレテ居ラレタカラ、アナタガ御出デト云ヘバ、御差図ノ程モアラウカラ一泊シナイカ、是レカラ格別遠路デモナイカラ御聴ニ達シテ、何カラ御承知シテ出掛ケナイカト申サレマシタカラ、如何ニモ尤デアル、私ハ斯様々々ノ手續デ参ツテ、是レカラ廣嶋ニ行クコトデ、行キカ、リニスフイフ事ヲ聞イテ、第一藩ノ大事デアルカラ傍観シテ参ル事ハ出来ヌ、兎二郎小倉ニ参ツテ、サウシテ下ノ關ニ渡リ、砲撃ノ始末談判致サネバ曲直ハ知レヌ、顛末ヲ聞テ久光公ニ申出たらバ指揮セラル、デアラウカラ、彼ノ兵隊ノ長デモ重役デモ面接尋問致シタイトノ趣ヲ以テ御伺下サレト、御沙汰ノ通り夜分ニモ御伺ハ出来ヌカラ、明日早朝ニ御伺ヒテ致サウト申サレマシタカラ、吉永ノ申サル、通福岡ニ一泊致シマシタ、サウシテ翌日今ノ十一時頃ニハ吉永氏カ来ツテ言ハル、ニハ、成行キ言上致シタトコロガ、美濃守ノ仰ニ、何分大事ノ談判デアルカラ厚ク注意セヨ、長人ノ横暴ハ実ニ甚シナンド、御丁寧ナ御沙汰ヲ蒙リマシタ、尤モアチラニ踏込ンデ其顛末

ヲ聞クハ尤モト思フ、然レトモ談判上ニ就テハ申スマ
デモナイ事ナガラ、過激ナル言ニ涉ラヌ様ニトノ御事
デ、私ガ心得振リヲ今一応聞ヒテ来イトノ御事ナリシ
トテ、吉永ハアナタノアチラニ踏込ムニ就テハ、予メ
考フル所ヲ承リテ言上致シタイト云フコトデ、私ハ踏
込ミマシテ、砲撃ノ顛末ヲ聞テ、其曲直ハ弊藩一己ノ
制スル^判諷デハナイト考ヘマス、因テ砲撃シタ顛末ト意
旨ノ所在ヲ聞テ朝廷・幕府ニ上申シ、公平ナル御処分ヲ
仰クノ心得デゴザリマスト申上ゲ下サレタイト申シマ
スルト、直ク吉永氏ハ登城致サレ、程ナク參ラレテ言
ハル、ニハ、御見込ノ程上申致シタトコロガ、尤モノ
心得デアルカラ、兎モ角顛末ヲ質問スルニ止メテ、下
ノ關杯ニ於テ何様な事が有ツテモ辛抱セヨトノ御言ナ
リシト申聞ケラレマシタ、必ズ質問マデニ止マル様ニ
ト云フコトデ、私ニモ固ヨリ其心得デゴザリマス、万
事其辺ハ御安心下サル様ニ願ヒマスト申シマシタ、吉
永ノ言ニ、晩方マデモ逗留ハ出来ナイカ、美濃守様御
会ヒモ為サレタイト思召トイフコトデアツタ、夫レハ
固ヨリ難有イ事デゴザリマスケレドモ、片時モ早く小
倉マデ差越シテ、其顛末ヲ質問致シタヒ、又何フ事が

アレバ立帰ツテ言上致シマセウ、今日ノ拜謁ハ御免蒙
ツテ直ニ出立致シタイト御断リ申シ、夫レカラ早追ヲ
仕立マシテ小倉ノ方ニ着キテ、本陣ト申シタ村上銀右
衛門ト云フ旅店ガアリマスカラ、其方ニ着ヒテ見マス
ルト、予ネテ出シ置キマシタ目付役土持平八^{編註}ト申者ガ
居リマシタ、今ハ土持佐平太ト申シテ元氣ニシテ居リ
マス、夫レハ以前ヨリアチラニ出張致シタ唐物締ト申
シマス、一名苦船横目役トモ申シマス、夫レガ出張ノ
名義ハ幕府ノ唐物商法ニ就テ、琉球ヨリノ舶来品ノ密
売ヲ致シマスカラ、其取締ノ為メ予テ派出致サセテア
ルノデアリマス、時勢モ面倒デアリマスカラ、第一視
察探偵ヲ申付ケテ方々手配リヲシテ、其辺ノ事ヲ調べ
テ居ル役人デアリマス、夫レモ村上ノ所ニ居リマシタ
カラ、直様砲撃ヲセラレタ顛末ヲ聞キマシタトコロガ、
概略ハ分リマシタ、咸ナ巷説デ悉ク信ズル事ハ出来ヌ
ニ依リ、下ノ關ニ渡リテ、兵隊ノ長カ或ハ重役ニ面接
シテ聞クガ肝要デアルニ、唯ニ巷説聞取位デハ手後レ
ノ事デアル、此事ハ一大事デハナイカト云ヒマシタト
コロガ、土持申スニ、如何ニモサウデアルケレドモ、
今長州ノ形勢ト云フモノハ、誠ニ暴ナモノデ、就中薩

摩人が下ノ關邊へ行ケバ、直ニ殺シテ仕舞フト云フ景況ニ聞エル、夫レ故上方ニ往来スル大小船モ下ノ關ニハ近寄ラズ、大里地方ヲ通行スル様ナコトデアル、斯ル形勢ナレバ、一人二人ガ踏ミ込ンデモ暴ナ事ヲスルニ相違ナイ、小笠原家ノ役人カラモ其辺ハ聞テ居ル、故ニ京都文ハ鹿兒嶋ノ方ヨリ派出シテ来ル役人モアラウト思フカラ、踏込ムコトヲセズニ居ル、私申ス、夫レハ成程サウデモアラウガ、今日巷説ヲ以テ届ケル様デハ却ツテ迷ヲ取りテ、益々感情ヲ悪クスルニ相違ナイ、兎モ角下ノ關ニ押渡ツテ、彼ノ役人ニ直接其顛末ヲ委シク聞届ケテ報知スルガ宜カラウト考ヘル、是レカラ一緒ニ下ノ關ニ行カウト申シマシタケレトモ、其役人ハ躊躇致シマシタカラ種々論シマスルモ、土持ハ今彼ノ有様ハ、鹿兒嶋人ガアチラニ踏込メバ、直チニ暴ナル扱ヒニ逢フニ相違ナイト云ツテ進ミマセンカラ、私モ壮年ノ時デ、夫レハ怪シカラ又話デアル、我々公然談判ノ為メニ渡關シタ者ニ暴ヲ加フレバ、曲益々重ネル訳デアルカラ、私一人行カウトマデ申シマシタ処カ、漸ク行カウト云フコトニナツテ、其中ニ村上ヘ船ノ手当杯ヲ致サセマシテ出立ントスル処ニ、村上ハ小

笠原家ノ役人ニ通知シタ様子デ、程ナク重役ガ二人来テ、決シテ渡海ハ宜シクナイ、必ズ難ニ遭フニ相違ナイト云フコトデゴザリマシタ、私答ニ御心付キノ程ハ難有ガ、サウイフ暴ナ事ヲスルモノデナイト思フ、船ヲ撃ツタハ間違ヒカモ知レヌ、兎ニ角夫レヲ尋問セネバ此方ノ処置振りニ基ク所ガナイ、サウセネバ道モ明クマイ、我々一兩人渡海致シタニ暴ヲ加ヘルコトハ決シテ無イト思フ、万一横暴ヲ加ヘたらバ曲ヲ重ヌルデアルカラ、堂々ト其曲ヲ鳴シテ兵ヲ以テ問罪スルガ宜イ、私ハ心得デ行キマスト申シテ、夫レカラ土持ト下ノ關ニ行キマシタ、下ノ關ニハ薩摩ノ定宿ハ白石正一郎ト云フ者ノ所デアツタガ、此者ハ文久二戊年頃ヨリ薩藩ト長州トノ軋轢デ、感情ガ悪クナツテ其方ニ参ズ、三浦屋ト云フ所ハ商人ノ定宿デ有カラ、其方ニ参リマシタ、私ハ手附ノモノ四人連レテ居リマシタ、是レハ商人デ、藝州ノ貿易杯ニ使フ者デアリマス、夫レヲ召連レテ居リマシタ、夫レニ家来二人ヲ召連レテ態ト騒ガヌ様子ヲ致シテ、三浦屋ニ踏込ミテ亭主ノ源蔵ト云フ者ヲ呼出シテ、兵隊ノ長官又ハ重役ニ面会致シタイカラ、其筋ニ申立ヨ、速カニ御面会下サル様ニ致

シタイト依頼致シマシタ、三浦屋ハ承知致シタト云ツテ出テ行キマシタ、下ノ關ニ參リマシタハ其日ノ昼時分ト心得マスケレトモ、晩方迄モ一向返事ガゴザリマセヌ、度々催促スレドモ役所ニ出テカラ帰ラヌト云フコトデ、腹ガ立ツテ堪ラヌケレドモ、仕方ガゴザリマセヌ、暮前ニ帰リマシテ、段々手数ヲ重ネマシテ隙取リマシタ、兵隊ノ方ハ職務外ノ事デアルカラ応接ハ出来ヌ、政庁ノ方ニ伺ヘト云フコトデ、此地ハ長府ノ領分デアルカラ、長府ニ伺マシタ処ガ、時節柄ノ事デアリ、殊ニ薩摩様ノ人ト言ヘバ嫌疑ニ渉ル場合モアルカラ、長府ノ一決デ面会スルコトハ出来ヌ、兎角御宗家ノ方ニ引合ヒ、其上面会セヨトイフコトデ、長府ノ役人伺ヒニ出デマセウカラ、御退屈ナガラ御抑ヘ下サレトイフコトデ、夫レカラ待テドモ夜ニ入ツテモ參ラヌ、催促モ数度致シマシタケレドモ、只今其事デ亭主モ出テ居マスト云フコトナドデ、仕方ガゴザリマセヌ、夜十一時頃町役人ト云フ様ナ人が參リマシテ申ニハ、此地ハ長府ノ領分デゴザリマスカラ、宗家ノ重役ガ御目ニ掛ルト云フコトハ出来マセヌ、又宗家ノ重役モ出テ居ラヌ故ニ、長府ノ役人一存ニ御目ニカ、リ悪イト、

又兵隊ノ方ハアナタノ御沙汰ヲ言ヒマスト、職務上ノ事デナイカラ御面談ヲ致スコトハ出来ヌト云ツテ居リマスト、サウイフ訳デ宗家ノ方ニ彼此レ引合ヲツケマスカラ、両三日御逗留下サレト云フコトデアリマシタ、夫レハ怪シカラヌ御話デアル、今日御面談ヲ致シタイト云フモノハ、過日弊藩ノ蒸氣船ヲ砲撃ヲ為サレタ、夫レガ為メニ士分ノ者モ夥多沈没致シ、二十余人モ溺死致シマシタ、弊藩ニ於テハ輕カラヌコトデアアル、依テ砲撃ナサレタ顛末ヲ御尋ネ申サンガ為メニ出マシタ、然ルニ兵隊ノ長官ガ御応接ハ出来ヌ、長府ノ御領分デアルカラ、宗家ニ伺ハネバ御談判ガ出来ヌト云フコトデハ仕方ガナイ、是レカラ私ハ萩ノ御城下ニ通りマスカラ、御心得ノ為メ申シ置キマス、御両敬ノ事デモアリ困難ノ事デアレバ、其辺ノ御心得モアリサウナコト、存ジマス、此デ御談判ヲ致サウト云コトデナイカラ、直チニ御城下ノ方ニ罷越シ、談判致シマスト申シ離シマシタトコロガ、其役人申スニハ、當時柄ノ事デ困リマスカラ、兵隊ガ夥多居ツテ無礼ヲスルカモ知レヌ、又若シ御無礼デモ致セバ、重ネテ困却デアルカラト懇々ト申シマシタ、ケレドモ御宗家ニ伺ハネバ、御面接

致サレ難ヒトアレバ仕方ガナイ、私モ急ヒデ上京スル身デアルカラ、二三日モ逗留ト云フコトハ出来ヌ、依テ御城下ニ罷通りタイト申スノデアル、成程此時節御都合モ、ゴザリマセウガ、御両敬ノ御間柄ハ、個様ノ大事ハ御互ニ寛急ノ場合御親ミアルベキコトナルニ、唯今承ル趣デハ甚タ心得兼ル御話ナリト、随分曳カヌ氣ヲ含ンデ申シマシタ処ガ、右役人申スニ、御尤モノコト、存ジマス、尚ホ其筋へ御話ノ趣申出マセウカラ、暫時御控下サレト懇ニ申シマスカラ、然ラバ速ニ御返事下サレ、私ハ直チニ出立ノ用意シテ御待チ申スト申シマシタ、早ヤ其時昔ノ四ツ時分デゴザリマシタ、私申スニハ、唯今ヨリ半時ハ待チ申スベシ、半時過ギマスト御城下萩へ出張致シマス、兵隊ガ無礼ヲ致セバトテ、此方決シテ恐レマセヌ、無礼致シタラ夫レマデノ事デアル抔ト申シテ一応返シマシタ、其時ハ速ニ返事アリマシテ、程ナク宗家出張ノ役人ト長府役人ガ御面談申シマスカラ、萩へノ御出立ハ御止メ下サレト云フコトデゴザリマシタカラ、サウイフ訳ナラバ一応御面接致シマセウ、併シナガラ輕キ御役筋トノ御談判ハ御断リ申シマス、夫レ丈ケノ御談判ノ出来ル御役人デナ

ケレバ、決シテ御面接ハ出来ヌ抔ト、随分氣強ク申シマシタ、程ナク其役人ガ參ラレテ、名刺ヲ以テ金子部・粟谷益太郎ト云フ人ガ參ラレテ、面接シヤウト云フ事ニナリマシタ、其兩人ノ他ニ名刺ヲ出サヌ者二人都合四人ガ參ラレ、襖越次ノ間ニ八十人バカリモ參ラレタ様子、其人々ニハ会ヒマセヌ、私ノ席ニハ四人デ、名刺ヲ出サレタハ二人デゴザリマス、初面接ノ挨拶モ終リテ申サル、ニハ、当地在陣ノ兵士等ガ御藩ノ蒸氣船ヲ砲撃致シタ事ニ就テ御談判云々ノ趣キ承知致シマシタ、宗家ノ重役ハ唯今詰合マセヌ故、兵隊長官其他其筋ノ役人共へモ掛合、一応私共御面接致ス様ニト申スコトデゴザリマシタト申サレマシタカラ、私ハ余事デモゴザリマセヌ、弊藩ノ蒸氣船ヲ砲撃ナサレ沈没致シ、乗組ミテ居ル士官七八人、水夫マデ二十余人行衛知レマセヌ、就テ私ハ途中テ砲撃サレタコトヲ聞ヒテ砲撃ナサレタ御意旨、御藩主御命令ノ次第、且砲撃サレタ時、蒸氣船ノ挙動等御尋問致サンガ為メニ出マシタ、其顛末ヲ詳ラカニ伺ツテ上京致シテ、大隅守モ上京中（島津久光）デゴザリマスカラ、申聞ケマスル心得デゴザリマス、就テ砲撃御命令ナサレタハ、大膳（毛利慶頼）大夫様ニ出タルハ無

論ノコトデ、是ハ御命令ニ出タルハ指知レタル訳デ、掘テ御尋ネ申スニモ及ヒマセヌ、砲撃ノ次第ハ兵隊デナケレバ實際ノ事御分リナイカト存シマス、故ニ兵隊ノ長官サンニ御面接御尋申シタイト申シマス、兩人ノ言ハル、ニハ、夫レニ就テハ誠ニ相濟マヌコトヲ致シマシテ、先日來宗家ハ勿論、末家ニ至ルマデ甚ダ心配致スコトデゴザリマス、全クノ間違デ外国船ト認メマシテ、兵隊共ガ輕忽ヨリノコトデ、後ニ尊藩ノ御船ト云フコトガ分リマシテ、御託ノ使ヲモ差立ヨウナトト宗・末家相談中デゴザリマス、願クハ御推慮被下タイ、尤モ発砲ノ次第モ随分心得テ居ルカラ御話致サウ、其所テ宜シク御推察ヲ願ヒマス、幾重ニモ御託ビヲ致シマス、初ヨリ御託々々ト繰返シ申サレマシタ、ソコデ私申マスルニハ、成程御託ビナサル、ニ就テハ輕カラヌ事デ、私ハ前ニ申上タル如ク、其顛末ヲ承リ主人ヘ申聞ケルノミノコトデ、御託ビノ御取次ヲ致ス訳ニハマイリマセヌ、是ハ一藩ノ大事件デゴザリマスカラ、ドンナ御命令デ砲撃為サレタト云フ事ヲ承リテ届出たら、必ズ修理大夫・大隅守ノ思慮モ御座リマセウシ、又自然天朝・幕府ノ御命令モゴザリマセウ、私ニ於テ

御託ビノ御取次ヲ致ス訳ニハマイリマセヌト申シテモ、尚ホモ繰返ヘシ御託ビノト申サレマシタケレドモ、私ハ何程承知致シテモ夫レ丈御託ビノ御評議ナルニ於テハ、御使者デモ遣ハサル、ガ宜イ、私ハ顛末ヲ承ルノミノコトデ、外ニ御答弁ハ出来マセヌト申切り、仮令御使者遣サレ、御託ビ御申込アリテモ、砲撃ノ顛末ヲ御申述ナケレバ、恐ラク御使者モ無効ニナルベシト存ジマス、私ニハ御託ノ御取伝ヘハ出来マセヌケレドモ、砲撃ノ顛末ヲ承ルニ就テ御託ト申スハ承リマシタカラ、御接話ノ次第ヲ具申シ、御託ヒノ御主意ハ必ス申伝ヘマスカラ、私ヘハ私ノ企望通り砲撃ノ顛末ノ御話ヲ願ヒマスト申シマシタ処ガ、四人ノ面々ハ一時別席ヲ致シタイト云フコトデ退カレマシタ、程ナク又復席シテ申サル、ニハ、如何ニモ御尤ノ事デアル、夫レデハ砲撃ノ顛末ヲ御話シ致シマセウ、ケレドモドコマデモ兵隊共ノ輕忽デアルカラ、御託ビハドコマデモセネバナラヌ、御兩敬ノ御親ミモアルコト故恐縮致シテ居リマス故ニ、夫レ丈ケヲ申サウトノコトデゴザリマシタ、私申ス、夫レハ勿論、御託ビノ御主意ハ勿論デアルガ、私ハドコ迄デモ顛末ノミヲ伺フ積リデア

ルカラ、御託ビノ事ハ御取次キ致シマセヌ、其積リテ御話シ下サレタシト申シマシタ、夫ヨリ兩人ハ其顛末話ニナリマシタ、丸デ外国船ト誤認シテ砲撃致シタ、昼間ヨリ雪降り、濛霧深ク、旗章モ見取レヌ天氣デゴザリマシタカラ、逸リ切ツタル者共外国船ト誤リテ砲撃致シタモノデアルト、私申ス、成程降雪濛霧ノ天氣ナレバ、御弁ヘハ無ツタデモアラウケレドモ、仮令外国船デモ一応ノ御引合ヒモナク、無暗ニ砲撃ハ心得兼ねル、失礼ナガラ暴ノ字ハ免カレヌカト存シマス、幾ラ敵船デモサウイフ軽忽ナ事ヲナサルベキモノトハ、驚キ入りタル御軍法ト申ス外ハゴザリマセヌ、是ハ兵隊ノ輕忽ト云フハ口実ト思ハル、幾ラ外国ノ船デモ濛霧ノ間ニ分ラネバ、夫々御確認ニナツテ砲撃致サレサウナモノデアル、サウイフ御軍令ハ驚ク外ハゴザリマセヌ、此前頃弊藩ノ蒸汽ガ通ツタ時モ砲撃ナサレテ、其時ハ幸ヒ船モ損セズデゴザリマシタガ、乗頭ノ者ガ上陸シテ御談判ヲ致シ、固ク御条約シタコトモアル、其条約書ニ夜分ナラバ大提灯ヲ帆柱毎ニ出シ、昼ナラバ旗章ヲ掲ゲルト云フコトノ御約束ガゴザリマス、其御約束ニ対シテハ如何デゴザリマセウ、又御軍法上ニ

於テサウイフコトヲ為サル、ノハ、尊王ヲ御唱ヘ為サル、御国柄ニハ、失礼ナガラ不似合ノ事ト思フト申シマシタ所ガ、兩人申サルニハ、誠ニ御氣ノ毒ナ事デ、御挨拶ノ致シヤウモナイ、何レ使者差出シテ御託ビ致サウト、サウイフコトデ唯々御託ビノトノミ申サレマスカラ、私ニモ仕様ガナイ、私申スニ、自然御評議モ、ゴザリマセウカラ、濛霧ノ間デ御弁別ガ無クテ、兵隊ガ逸リテ砲撃シタノデゴザリマセウガ、其距離ハ何程アリマスカ、大砲ハ何十斤ノモノデ、如何ナル大砲ヲ何発撃ツタト云フコトヲ尋ネマスルニ、前田・壇浦山口眞同七兩砲台ヨリナサレタ、其砲台ニハ何十斤ノ大砲ガ幾ラアルカト申シマス、夫レハ能クハ知ラヌトイフコトデ、又砲撃ノ數ハ幾ラデアルトイフト、十一二発デア
ル、其中破裂彈ハ幾ラ、実彈ハ幾ラト云フ事モ細々ナル質問ニ係リマシテ、夫レカラ実彈四ツツカ、破裂彈八ツツカ云フ答弁デゴザリマシタ、其中燒玉デモ御撃チナサレタトカ、夫レカラ焙丸ハ、夫レハ撃タナイ、実彈ト破裂彈デア
ル、距離ハ凡十町カ八九町位デア
ル、併シ濛霧ノ間デア
ルカラ能クハ分ラヌ、夫レカラ船ニ撃テタ部分ノ質問ニモ係リマシタ、夫レ杯ハ一向分

ラヌデゴザリマシタ、サウイフ次第デ砲撃シタニハ相違ナイト云フコトデ、夫レデハ誤認デ砲撃致サレタト云フモノデアラウガ、沈没シタ後ニ砲台ヨリ小船ヲ出シ、即チバツテラヲ出シ、沈没ノ検査ヲナサレ、或ハ勝鬨ヲ挙げタト云フコトデアル、夫レハドウイフモノデ鯨波ヲ挙げタモノテアルカ、夫レカラ脚舟一隻流レテ居ルノヲ引戻シテ、壇浦ノ台場前マデ引ヒテ来テ有ル様子ニ承ル、夫レハ分捕リノ意デハナイカ、夫レヲ分捕リ為サレタト云フモノナラバ、即チ薩摩ノ船ト云フ事ヲ認メ、勝鬨ヲ挙げタモノデハナイカ、ソコニ至ツテ御思想ト挙動トノ比較ヲ致シテ、コチラニハ考ヘヨツケナケレバナラヌト云フ所迄デ詰メテ尋ネマシタケレドモ、一向ニ確答ガナイ、御両敬ノ間相濟マス、其前ニ約束ノコトモアルニ、濃霧ノ為メ外国船ト誤認シテ砲撃致シタニ相違ナイ、其辺ハ如何ニモ御推察ヲ願ヒマス、大膳大夫様ニモ御済ミ為サレヌコトデアルト云フコトデゴザリマシタ、十一二発モ御砲撃ト云フコトガ分リマシタ、外国船ト誤認デ砲撃ニ相違ナイ、以前ノ約束モ心得ヌト云フコトナラバ仕方ガナイ、砲撃ヲ致サレタ点ト弾数が分リマシタカラ、其上大膳大夫

様ニモ済マセラレヌトノ御事ナレバ、大要分リマシタカラ、細事ハ御尋申ス必要ハゴザリマセヌ、就テハ天・暮ヨリ自然御裁判モゴザリマセウ、私ニハ御詫ビノ御取次ハ致シマセヌ、御談判ノ趣ハ御覽通りニ筆記致サセマシタカラ（其時私方ニハ二人ノ手附共ハ筆記サセマシタ）、然シテ我々兩人ノ内一人ハ上京一人ハ鹿兒嶋ニ歸リ、御談判ノ成行キヲ報告致ス心得ナルコトヲモ申シマスルト、外兩人ハ詫ビノコトヲ重ネテ申サレマシタガ仕方ガナイ、併シナガラ私ハ砲撃ヲシタト云フ点ヲ聞ケバ、夫レデ宜シイ、他日御談判ヲ致ス次第モアラウト答ヘマシテ、論談ハ結ビマシテゴザリマス、サウシテ右ノ方々ハ立帰ラレマシテ後、宿屋ノ主人ガ出テ、私共モ小倉ノ様引取ル手当致シマシタカラ、暫時御扣致シテ貰ヒタヒ、御談判ノ次第ヲ尚又其筋ニ申シテ、其上尚ホ御挨拶ニ及ビタイト云フコトデ、是レハ尤モト思ツテ扣ヘテ居リマス、一時バカリモ致シテ、其時ハ兩人參ラレテ申サル、ニ、一々御話ノ趣其筋ノ者ヘ申聞ケマシタ、実ハ兵隊ノ長ニモ申シマシタ、全ク兵隊ノ輕忽カラ出タコトデ、長官トモニモ甚タ迷惑致シテ居リマス、自然使者差立御詫致スカラ、其辺モ

宜シク聞置キ呉レトノコトデゴザリマシタカラ、私ハ砲撃ノ次第概略承知致シマシタ、尚後日御談判致スコトモアラウト云ツテ、サウシテ三浦屋ヲ立出デマシテ小倉ニ帰りマシタ、夫レカラ鹿兒嶋ヘハ直クニ報知ノ飛脚差立テ、私ハ土持ト分レテ直グ上京ノ途ニ就キマシタ、大坂ニ五日目着キマシタ、大坂ニ着キ江戸堀ノ虎屋ト申ス宿屋ニ就キテ居リマス、奈良原幸五郎・山口金之進・伊藤萬次郎ト申ス三人ガ京都カラ長州ニ談判ノ為メ差下スノニ逢ヒマシタ、ソコデ右三人ニ談判ノ次第語りマシタ、夫レデハ我々ガ行ツテモ必要ガナイ、是ヨリ帰京シヤウト一緒ニ京都ニ登リマシタ、其時京都屋敷ニハ兵隊ガ二千人モ居マシテ、一同憤激致シテ、詰問ノ為メ長州ニ発向セント大騒ギシテ居マシタケレトモ、久光ハ奈良原・山口等ヲ遣ハシ、談判ノ上ニ出兵スヘシト一応取鎮メ、名義ヲ正ウシテ罪ノ兵ヲ出サネバナラヌ、一応其顛末ヲ調べバナラヌトイフコトデ、幕府カラモ 朝廷カラモ同様ナコトデ、奈良原・山口等ヲ尋問ノ為メニ出シタサウデス、兵隊ハ飛出サウト云フコトデ制シ難キコロデ、サウイフ勢デ仕方無イトコロニ、奈良原杯ガ行キカ、ルトコロ

ニ私ガ行ツテ、概略ノ事情ガ分リマシタデゴザリマス、京都ニハ大久保・小松ガ居ツテ、其成行キヲ聞キマシテ、久光ヘハ小松・大久保一緒ニ談判ノ成行キヲ申出デマシタ、久光申サレマスルニハ、兵隊等ガ飛出デ、問罪セント騒グニハ困ツタ、夫レ丈ケノコトガ分レバ宜イガ、夫レデハ一橋ニ出テ其成行キヲ申セ、余程心配アル、閣老ノ板倉モ余程心配為サレタ、此方ヨリ若シ飛出ス様ナ事ニナレバ面倒ナコトアル、長州ノ曲ナル事ハ判然ダカラ詫アルガ当然ダ、是マデ長州ハ寺田屋事件ノ行掛リ上ヨリシテ憎イト云ツテモ、名義ヲ正シウシテ、夫々兵ヲ向ケルデモ如何様トモセネバナラヌ、名義ノ立たヌ私闘ニ類スル様デハ、 朝廷ニ対シ恐レ入ルコトデ、同志喧嘩ハ実ニ好マヌコトデ、外国ノ難題モ目前ニ横ハツテ居ルカラ、中間喧嘩ハ致シタクナイナドト申サレマシタ、一橋ヤ閣老ニ逢タラバ、其辺モ申スガ宜イト申付ケマシタカラ、夫レカラ翌日ノ晚ニ板倉サンノ方ニ出ヨト云フコトニナリマシタカラ、留守居役・添役ノ者ト一所ニ出マシタコロガ、御取次ギデハゴザリマセヌ、板倉ハ直接ニ御逢デゴザリマシタカラ、其成行キヲ詳ニ申上ゲマシタ、板倉モ

兎毛角私闘ヲ開イテハナラヌ、長州人が以前ヨリ不都合ナ次第ハ存ジノ通りデアアルカラ、夫々名義ヲ正シウシテ御処分ニナラネバナラヌコトデアアルカラ、決シテ輕忽ニ兵ヲ動カス様ナ事ガアツテハナラヌト云フ仰テゴザリマシテ、夫レハ固ヨリ私ハ關係ハゴザリマセヌ、私ハ行キカ、リニ顛末ヲ尋問シタコトデゴザリマスト申上ゲマシタ、其翌日ニ一橋家ノ用人ヨリ出ヨト云フコトデゴザリマシテ、其時ハ御家老カ、御用人カ、一応話聞カレマシテ申上ケタト見ヘテ、御内々御逢ヒ為サルト云フコトデ、其時モ前同様ニ申上ゲマシタ、一橋様仰ニハドウデアアルカ、本當ニ詫ビヲ云フ積リニ見ヘルカ、口バカリデハナイカト云フ御質問デゴザリマシタ、私申上ケルニハ何トモ申上ゲ兼ネマスケレドモ、果シテ詫ヲ申スデゴザリマセウ、始メヨリ抵抗弁難スル様ナ事ハナク、御詫ビノト云フコトデ、私ニハ答弁ニ苦ム様ナコトデゴザリマシタ、固ヨリ私ノ考ヘデハ、此船ハ長崎製鉄所ノ船デ、乗組ノ者ハ弊藩ノ者デゴザリマスケレドモ、彼此レ幕府ト弊藩ニ關係スルコトデゴザリマスカラ、自然御評議ニナルベキコト、存シテ談判致シマシタケレドモ、御詫ビト云フコトハ再

三申シ、或ハ両敬ノ親シミ云々、其辺モ氣ノ毒ナト云フコトデゴザリマシタナドト申上ケマシタ、仰ニ、夫レデハ必ズ詫ビノ使ガ来ルダラウ、夫レデハ宜イ都合ニナラウト云フコトデゴザリマシタ、サウシテ程ナク長州征討ノ御内達ガ發シマシタ、其内御征討ノ評議ガアルト云フコトデ、二三度幕役ヨリ呼出サレテ談判ノ次第ヲ問ハレマシタ、其時鹿兒嶋デハ問罪ノ兵ヲ出サウト云フコトデ、或ハ飛出サウトシタニハ困ツタサウデゴザリマス、然ルニ程ナク長州ノ御使者ガ薩摩ニ参リマシテ、御詫ビト云フコトニナツテ、其事ハ夫レデ、夫レカラ長州征討ト云フコトガ追々發シマシテ、元治元年ノ冬各藩ノ兵ガ長州國境近ク出張リマシタコトニナリマシタ、

(邦卒)
中原君

十二月ノ二十四日、先鋒隊ト奇兵隊ト交換致シマシテ、其晩ノ事デ、奇兵隊ハ其受持ヲ讓ラレテ、待ツニ待ツタトコロデ御藩ノ船ガ来タモノデアアルカラ、輕忽ナガラ撃ツタモノデ、固ヨリ先鋒隊ト奇兵隊ト両方持ツテ居ツテ、夫レデ先鋒隊ハ止メタカラ引カセテ、奇兵隊ノ受持ニナツテ居ツタガ、引代ツテ又奇兵隊ガ出タノデ、其晩デゴザリマシテ、撃チ始メテカラ是レ

ハ違ツタト云フコトニ氣ガツイテ、長府ノ船ヲ出シテ
 調ベタトコロガ、薩船ト云フコトガ分ツテハ大變ト云
 フコトデ、本藩ノ方カラモ二三入モ出テ来テ探偵シタ
 トコロガ、薩船ニ相違ナイ、夫レナラハ断リヨスルカ
 ト云フト、コチラガ外国船ト認メタモノデアルカラ、
 向ウカラ質問ニ会ツタ時ニ言フガ宜イデハナイカ、コ
 チラカラ先シテハ宜クナイトカト評議ノ決着ガツカ
 ス、薩船ト云フコトガ分ツタカラ、コチラカラ詰問ヲ
 待タス使者ヲ立ツルガ至当デアル、過チヲ蔽フ様デハ
 ナラヌト言ツテ、長イ建白モゴザリマス、又奇兵隊ハ
 船ヲ出シテ調ベタガ悪イト云フコトデゴザリマシタ様
 子、政府ハ兎モ角、黙ツテ居テハ悪イカラ、御藩ノ船
 ト云フコトデアルガ、果シテ然ルカドウカト云フコト
 デ、夫レカラアナタガ御出デニナツタモノデ、始メテ
 確マツタコトデゴザリマスカラ、是非御詫ビノ使者ヲ
 遣ラネバナラヌトイフコトニナツテ、使者ヲ遣ツタ様
 ナデゴザリマス、

居ルトコロテアルカラ余程憤ツタモノデ、私ハ久光ニ
 逢ツタ時ニ久光ノ申サル、トコロハ、先ヅ夫レハ宜イ
 都合ニ話ヲシタ、拙者ガ考ヘト云フモノハ、斯ク危急
 存亡ノ秋ニ方リテ、同志喧嘩ハドコマデモ否ヤデア
 ル、同志喧嘩ヲ主張スル者ガアレトモ、サウシテハ
 朝廷ノ御心配ガ一方ナラヌコトデ、遂ニ内乱ノ為メニ外国
 ヨリ嘗メラル、コトニ至ルカラ、其輕重ヲ考ヘテ、兵
 隊等ニ逢ツテハ、アチラヨリ詫ビルト申スコトヲ言ツ
 テ置クガ宜イ、曖昧模稜ノコトヲ云ツテハ激昂ヲ来タ
 シ、其激昂ガ因ノ不幸ニナルコトデアアル、質問ニ来ル
 者ガアルデアラウト申シマシタ、私申スニ、実ニオツ
 シヤル通りデゴザリマス、私ニ於テモ向ウカラ詫ビト
 云フコトデア安心ヲ致シマシタ、暴言デモ申セバ、夫レ
 ニ対シタコトモ行掛リ言ハネバナリマセヌケレドモ、
 又彼レモ狡猾デモアラウガ相済マヌト云フコト
 デ、御両敬ノ間ヲ云ヒマスト、向ウニハ御両敬ノ間実
 ニ相済マヌト申シマシタ、御沙汰ノ通り私闘ヲ開クコ
 トハ、ドコマデモ私モ好ミマセヌ、幕府ニ出マシテモ
 ドコマデモサウ申シマス、私闘ト云フハ実ニ方今ノ世
 態大失策デゴザリマスト申シマシテ、久光トノ話ハ能

ク着キマシテゴザリマス、ソコテハ板倉・一橋ニモ種々話モアリマシタガ、丁度同様ナ事ニ申上ゲテ置キマシタ、其時ハ血氣ナ輩ハ実ハ脱走シテ出掛ケルト云フ輩モアリマシタ、夫レデ始メ談判スル時ハ、高杉氏ガ長官デ居ルト云フコトデ、是非高杉氏ニ逢ハフト申シマシタケレドモ、アレハ二三日前ニ引上ゲタト云フコトデアリマシタ、

中原君 其時高杉ハドコニ居リマシタカ、総督ハ赤根武人デアラウト思ヒマス、政府カラ出タハ山縣ト佐瀬ハ十郎位、アナタノ御出デノコトハ政府ニ上申シタハ二名ガ連署シテアリマス、

^(勇)早川君 奇兵隊ノ長ハ赤根デゴザリマシタカ、

中原君 山縣ト佐瀬カト思フ、重モニ二人デアリマス、市來君 名刺ヲ出シタ人デナイ、名刺ヲ出サヌ人ガ言ヒマシタ、金子ト粟谷ハ余リ言ハヌデゴザリマシタ、曖昧トハ察シマシタケレドモ、夫レナリデ置キマシタ、下ノ關ハ凄シイ有様デ、陣太鼓ヲ叩キ立テ、今デモ軍サスルト云フ形勢デアリマシタ、

早川君 私共ノ困デハ有心故造デ、予メ計ツテ砲撃シタモノト今日マデモ思ツテ居ル、

中原君 過ツタニハ相違ナイ、併シ下々ノ者ハ宜イ気味ト思ツタデモアリマセウ、

市來君 其時薩摩ノ方モ悪イ事ハ、攘夷家カ極嫌ヒナコトニハ、長崎デ外国人ニ払ウ金ガアツテ、其代リニ綿六百本積ミテ居リマシタ、夫レヲ探知サレタデハナイカト自ラ疑ヒモアリマシタ、

^(顯比)安井君 其比長州ノ方ニモ有心故造ノ話ガゴザリマシタ、

市來君 是レハ畢竟故造デモアルマイガ、薩摩一己デ怨ヲ買フ様ナ事ヲシテハナラヌ、堂々ト天下ノ兵ヲ挙ゲテ討ツコトニナル、談判ノ結果ニ依リテハ、一國デ引受ケネバナラヌコトニナルカモ知レヌ、夫レデハコチラニモ心配スルカラ、ソレデ一橋様ヘモ板倉サンニモ私ハ決シテ私闘ハ開キマセヌト申上ケマシタ、殊ニ鹿兒島ニモ京師ニモ知レマシタラウカラ、一刻モ早く具申致シタイト考ヘテ上京致シマシタ、其時ハ和戦ノ決スル場合デ、余程心配デゴザリマシタ、

早川君 筑前ハ衝留メタ事モナイガ、有心故造デアルト極メテ仕舞フテ、丸デ問ハヌ、私ハ八月十八日ノ變動ノ事ハ知ラヌガ、彼ノ大和ノ一挙ガアツテ、同志ヲ牢

カラ引出シテ、夫ヨリ吉野ノ方ニ脱走シタガ露顯シテ、夫レヲ助ケヤウト云フ精神ガ、一ノ考ヘデゴザリマシタ、夫レデ八月二十四日カ二十三日カ馬關ニ入込ンデ、其時ハ警備ガ嚴デアリマシテ、即チ薩摩ト云フト、長州ノ方カラハ殺氣ヲ含ミテ居ツタ、其後條公カラ矢野梅庵ニ密使ガ參ツテ、夫レヲ私が取次ギテ、其返書ノ時ハ私ハ三田尻(山口縣)ニ居ツテ、兵隊ガ流行ノ歌ニ薩摩ヲ辛辣ニスルト云フ意味ノ歌ヲ謳フテ、サウイフ感情ヲ持ツテ居ツタモノデ、其前ニ長州ノ同志中ハ、薩摩ハ必ズ長州ヲ討ツデアラウトイフ説デ、其後十二月ト思フガ、月形洗蔵ト筑紫モ行カヌト云フコトデ、其翌二月四日カ五日カニ船ヲ撃ツタコトヲ証拠ニシテ、薩長和解ハ行クモノデナイト云フコトデ、私ハ斯フイフコトハ激発シテ却ツテ宜イト云フ説デアリマシタ、

市來君 下ノ關三浦屋ニ居ルニ昼カラ夜分ニカケテ、旅宿ヲ見廻ルヤラ守リテ居ルヤラ、誠ニ凄マシイコトデスカラ、私ハ宿屋ノ女ヲ呼出シテ酒ナド飲ミテ、平氣ノ姿ヲ示シテ居リマシタ、其間ハ御評議デアツタト見ヘテ、大變隙ヲ取リマシタ、

中原君 焼ケマシタノハ、自火デ焼ケマシタト云フ説デ

マリマスガ、

市來君 焼丸ヲ撃ツタ撃タヌデ、今日ノ如キ破裂彈ハ火カ移ルトイフコトハゴザリマセヌカラ、其説ヲ立テタハ実ハ私闕ヲ開カヌ積リデ、綿ニ火ガ伝ヘ遷タトイフコトニナツテ居ル、焼玉デナケレバ火ハ着カナイモノニナツテ居ル、サウイフ所カラ兵隊ノ激昂ヲ柔ゲタ、小倉ハ敵視シテ居ルカラ、私モ煽動サレタ、土持ハ巷説ヲ以テ、夫レモ小倉カラ聞タモノデアルカラ煽動サレテ、長州ハ暴ニ暴ヲ重ネタモノニナツテ居ル、必ズ御出デ為サル、ナド、重役ガ私ノ旅宿ニ來テ注意ガアリマシタ、

安井君 実ニサウ思ツタモノデアル、私等ノ船モ何デゴザリマシタ、矢張り下ノ關ヲ通行シテモ、ドウモ何時ドウイフ目ニ逢フカ知レヌト云フコトデアリマシタ、

市來君 下ノ關ヲ通ルニ、門司ノ方ヲ通ツテ真中ヲ通ラヌ位デ——夫レカラ征討トナツテゴザリマスカラ、鹿兒嶋デハ是非兵ヲ出シテ、問罪ノ戰ヲシヤウト騒キマシタ故、御託ビノ使者モ城下ニ通シテハ如何ナルコトヲ仕掛ルモ測ラレヌカラ、城下ヨリ二十里許リノ阿久根ト申ス処デ応接ニナリマシタサウデス、其時一般ノ

激昂ヲ抑ヘルニハ家老ドモ、心配致シタサウデス、京都デモ同様デ、私ガ着シテ談判致シタト聞ヒテ、大勢詰寄セテ談判ノ始末ヲ問ハレテ、面倒ナコトデアリマシタ（一同立札）

〔史談会速記録第十五輯にて校訂〕

六五三 落合直亮君ノ国事軼掌ニ関スル事歴附十

六節

落合直亮談話速記

吉木竹次郎 速記

明治二十六年九月廿七日午後二時一同着席、落合直亮

君臨席

（直亮）

落合君 段々先般中オ話申上ゲマシタ続キデゴザリマスガ、丁度慶應三年ノ冬、江戸鹿兒嶋ノ屋敷ニ集リマシタ時カラシマシテノ日記ガゴザリマシテ、先般ノオ話ノ事ヲ繰返シマシテ申上ゲマス様デゴザリマスケレドモ、其オ話ヲ確カメル為メニ、オ話ノ尻ニ日記ヲオ添ヘニナツテハドウデゴザリマセウト云フコトヲ、先日寺師サンニオ話申シマシタコロガ、夫レヲ話ス様ニト云フオ話デゴザリマシテ、夫レヲ今日ハ持参シマシテゴザリマスガ、甚タ疎漏ナ日記デ自分覚ヘニシマシ

タ丈ケデ、至テ簡略ナコトデゴザリマスケレドモ、実事ヲ掲載シマシタコトデゴザリマスカラ、先ヅ試ニ一ツ申上ゲテ見ヤウト云フノデゴザリマス、始メニ慶應三丁卯年冬

十二月二十二日、江戸城ニ丸焼失、

同二十三日夜、芝三田庄内藩手勢屯所ニ乱暴人有之候事、

同二十四日、無事、

同二十五日早旦、益満氏来邸、外ニ多人数寄来候趣報告有之、依之各其心構シテ再報ヲ待居候内、西北隅物見ニ敵軍ヨリ大砲打懸火之手上ル、其内四方ヨリ砲発ノ声聞ユ、依之一同糺合方南方蔵前ニ下立、藩医黒田松榮驅来砲丸ニ中リ候間、介錯成呉候様切迫ス、松田正雄ヲシテ介錯セシム、又山田兼三郎頭上ニ砲丸中リシヨ見ル、依之藩命ヲ待ツニ忍ビス、入来ル敵兵ト一戦シテ、鬨声一発共ニ阿州邸境ノ堀ヲ破リ、敵兵ヲ切抜ケ三田街ニ出ヅ、此時奥田元討死、山本氏当敵ヲ討取事凡十名余、岩波方右衛門・龜山・井上等傷ヲ蒙ル、斯テ味方高輪通りニ至リ五六ヶ所放火シ、去テ品川・蒲田ニ至リ、便船四艘ヲ求メ打乗、碇泊ノ蒸気船ニ至ル、

此人数ニ先達テ伊牟田・科野兩人ハ乗船シ居リ、急キ乗移ル、味方ノ便船二艘遅着ノ間ニ、此船ヲ待事不能出帆ス、是ヨリ敵艦追々寄来大砲ヲ発スル事頻ナリ、追々近寄数ヶ所ニ中リ、船中傷ヲ蒙ル者二三名アリ、依之最早遁ル、二道ナシト、船中一決シテ大砲ヲ差向ケ、此方ヨリ乗付討死セントス、然ルニ此方ノ大砲四発ノ内二發敵艦ニ中リシカバ、此度ヲ外サズ立向ハムトセシニ、其勢ニヤ恐レケム、敵艦俄ニ立去リ遠ク逃行、爰ニ於テ浦賀ヲ指シテ難ナク乗出シ、日暮ニ至リ伊豆下田湊ニ着ス、此夜爰ニ一泊、船ノ破損ヲ修繕ス、二十六日早朝、下田ヲ発シ遠洲灘ニ懸リシニ、暴風西北ヨリ吹発リ、激浪山ヲナシ船動揺甚シ、此時船夫誤テ蒸氣車ニ錯繩ヲ懸テ機械運動ヲ失シ、如何共為方ナク、風ニ任せ運ヲ天ニ祈ルノ外他ナク漂流ス、其辛苦思フベシ、

二十七日、暴風未収、

二十八日、今朝風静リ、蒸氣車ノ繩モ解テ始テ生路ヲ得、順行ノ道ニ就ク、

二十九日夕方紀州熊野浦九木湊ニ着ク、上陸結髪浴湯酒盃ヲ傾ク、此夜出船ノ報告有之速ニ帰船、然ルニ此

夜船不出、

三十日、此日風波不安心ナル空合ナリトテ船出セス、依之伊牟田氏陸ヨリ上京セントイフ、我モ共ニ出立、

坂田氏モ同伴ノ事ニ決ス、

屯集同盟同船人名

小嶋四郎 落合源一郎 科野養齋

坂田三四郎 大原廉之助 菅沼八郎

大木 匡 金井清八郎 峰尾小一郎

森田谷平 齋藤源二郎 齋藤武雄

戸田恭太郎 深山柳輔 鈴木隼人

川田新助 岡田養玄 澤 東

栗宮定吉 福岡幸衛 阿部長松

植村専七郎 岡田信造 水野三吉郎

市川亀五郎 野村金次郎 川村藤太郎

宮林 龜藏

以上通計二十八名

直亮外二名紀州九木湊ヨリ上陸、上京經過地名、

十二月晦日、紀州尾鷲組九木浦 同野池村 同相賀組

便山 同古本村 同船津村 同熊野 中黒村 同上黒

村、

正月元日、同馬瀬村 同長晴組三浦村 勢州長嶋浦

同間弓村 同阿曾村、

同二日、同天ヶ瀬村 同川俣七日市村 同川俣波瀬駅

和州鷺屋駅 同宇陀駅 同櫻井駅 同三輪駅 同丹波

市駅、

同三日、同南都山城木津駅 同玉水駅 同長池駅 宇

治村 京都東山ニ到着、

同四日京都鹿兒嶋邸ニ至リ、西郷氏ニ面謁、次ニ五條

家ニ至ル、

寺師君 (宗徳) 一寸伺ヒマスガ、当時鹿兒嶋邸ニ集ラレタ其時

トイフモノハ銘々各々来テ、ドウゾ私モ此仲間入ヲ致

シタイト云ツタモノデゴザリマスガ、又紹介人ガアツ

テ這入ツタモノデアリマスガ、

落合君 固ヨリ知己ノ者ハ申スニ及バズデゴザリマス

ガ、始メテノ者デモ紹介人ノアツタ者モアリ、自身ニ

參ツテ申入レタ者モアリマス、

寺師君 其申入レタ時ノ主意ハ如何ノモノデアリマシタ

カ、

落合君 主意ハ一々モ申サヌデゴザリマスガ、先ヅ尊王

攘夷ノ実行ヲ挙ルト云フノガ大体デアリマシタ、何レ

モ夫レマデ苦心致シマシタガ、事が成リマス見込ガゴ

ザリマセヌデ、空シク奔走シテ居リマシタ者が、先ヅ志

ヲ達スベキ時ヲ得タリト云フ心持デ皆ナ集リマシテ、

其時人名ニ旧里カラ親ノ名前・年令等ヲ記シマス元帳

ガアリマシタ、其始メニ其集リマス主意ヲ書イテアリ

マシタノデゴザリマスケレドモ、其帳簿ハ大ナル帳デ

ゴザリマシテ、困ミヲ受ケマシタ時ニ持出ス暇ガナク

テ、夫レハ焼ケテ仕舞フタノデゴザリマセウガ、其主

意ハ何分夷人ノ跋扈ヲ憎ミマス事カラ、旧幕府ニ於テ

有志ノ者ヲ無慘ニ斬リマスト云フ様ナ事ヲ憤リマスル

所カラ立テマシタ主意デアリマシテ、ドコマデモ国家

ノ為メニ身ヲ尽クスト云フヨリ他ハゴザリマセヌ様デ

アリマシタ、

寺師君 然ラバ申込ンデ来レバアナタ方が応接シテ、愈

々仲間入ノ覚悟ト云ヘバ、然ラバ此ニ記名セヨト云ツ

テ、自分デ記名シタモノデアリマスガ、

落合君 サウデアリマス、

寺師君 血判デモシテ、誓約シタモノデアリマスガ、

落合君 ソレハ覚ヘテ居リマセヌ、

寺師君 アナタ方ノ面前デ記名スル其手續キハゴザリマ

セヌカ、

落合君 立派ナ手續キハゴザリマセヌガ、五人八人ト一
緒ニ申合セテ来タ者ガアリマシテ、其時ハ其仲間ノ中
デ重モ立ツタ者ガ出テ、其一同ノ名前ヲ記シマスト云
フ訳デ、先ツ重立チタル者ガ四五人宛ハ列席シテ、其
前デ同意ヲ表シマシテ誓ヲ致シマス事デアリマシタ、
寺師君 然ラバ記名スレバ其俣屋敷ニ滞留シ、オ前ハ何
某ノ組ニ附キ、オ前ハ何某ノ手下ニ附ケルト云フ極ハ
ゴザリマセヌカ、

落合君 夫レハ始メハ無イノデゴザリマシタガ、追々取
締ヲ立テマシテ組ヲ拵ヘマシテゴザリマスガ、夫レハ
例ノ五人組ト云フ様ナモノヲ立テマシタコトモゴザリ
マシタガ、夫レハ極マリマシタガ、ドウモ出入リガ極
マラヌ故ニ、組ガ充分立タヌ様ナ訳デ、其辺ハ充分整
理シテ居ラヌデゴザリマシタ、

寺師君 然ラバ這入ツタリ、又出タリスル様ナ事ハ、始
終アツタモノデゴザリマスカ、

落合君 サウデアリマス、
寺師君 然ラバ日々ノ武芸トカ、学問ヲスルトカ云フ極
ツタ事ハゴザリマシタカ、

落合君 夫レモ随意ニ擊劍ヲシマシタリ、或ハ馬ニ乗ツ

タリ、或ハ自分デ書物ヲ見タリシテ、課業ト云ツテ別
ニ極ツテゴザリマセヌノデ、随意ニサセテアツタノデ
ゴザリマス、夫レ故ニ出這入り等モ先ツ勝手次第ト云
フ様ナコトデ、甚ダ不極リナモノデゴザリマシタ、

岡谷君 ^(繁表) 集ツタ総人数ハトレ程デアリマス、

落合君 集ツタ人数ハシツカリハ分リマセヌガ、名前ノ
知レタノヲ集メマシタガ、二百二十四名分ツテ居リマ
ス、分ラヌノハ元帳ヲ失ヒマシタ為メニ分ラヌノガ多
イノデゴザリマス、始メヨリ仕舞マデ居タ者ハ至ツテ
少フゴザリマスガ、総体集ツタ人ハ五百人タラズト覺
ヘテ居リマス、

岡谷君 船ニ乗ツタハ二十八人デ、其他ハ三田ノ屋敷デ
四方ニ散ラサレタノデアリマスカ、

落合君 其前ニ野州ヘ一手出デ、下総ヘ一手出デ、又甲
州ヘ一手出デ、乱暴ニ出テ居ル其出残りデアリマス、
其残りハ百人足ラズデアリマシタ、

寺師君 夜ナドハ切取り強盗ナドニ出タ者モアルノデア
リマセウネー、
落合君 アリマス、

岡谷君 出流へモ出タ者が有ル筈デアリマスカ、

落合君 出流へモ人数ヲ遣リマシタ、八州取締ガ八方カ

ヲ尽クシテ、農兵ヲ出シタリ、獵人ヲ集メタリシテ、

天明川原デ討合ヒマシテ、夫レデアチラデ集ツテ人数

ハ多ク散乱シテ、コチラカラ下ツタ人数ハ多ク捕縛ニ

ナツタカ、討死シタノデゴザリマス、婦リマシタ者ハ

僅カ四五人丈デアリマス、行キマシタハ三十人余リデ

アリマシタ、

寺師君 仮令へテ見レバ、三田ニ強盜ノ住居所ヲ造ツタ

様ナモノデ、幕府カ酒井ノ兵デ、伐ツノハ晚イノデゴ

ザリマスネー、

岡谷君 何時頃カラデアリマス、

落合君 伊牟田・益満ノ兩人ノ始メテ出タハ、早イ様子

デアリマスガ、一体ノ始メハ十月ノ始メデアリマス、

夫レカラ十月十日頃カラ集リマシタノデアリマス、

寺師君 益満ノ浪士ヲ集ムル事ヲアナタ方ニ通知シタ手

続ハ、ドウイフモノデアリマス、

落合君 夫レハ能ク存シマセヌガ、私ナドへノ通知ハ小

島四郎ノ手カラ出タノデ、直接ニ受ケマセヌノデゴザ

リマス、何レ何デモ他ニモアリマシタノデゴザリマセ

ウガ、小島四郎ハ早クカラ其計画ヲシテ、世間ノ有志
ノ者ニモ通シマシタ様子デゴザリマス、

寺師君 益満ナドノ話ヲ聞タ一番ノ人ハ小島四郎デ、小

島ハ始メカラ益満ナドハ存ジテ居タモノデゴザリマセ

ウカ、

落合君 其所ハ能ク知りマセヌガ、何レ京都へ上リマシ

テ、御藩邸ノ方へモ出遣入りシタ様子デゴザリマスカ

ラ、知ツテ居タデアリマセウ、

寺師君 夫レハドウイフ人物デゴザリマシタカ、浪士頭

トシテ宜イ力量ノアツタ人デゴザリマスカ、

落合君 此レハ至ツテ精神家デ、胆力モアリ、先ヅ凡人

デハナカツタノデゴザリマス、夫故ニ先ツ頭ニシテ不

服ヲ申シタ者モゴザリマセヌデ仕舞ヒマシタ、

寺師君 野州ナリ上総へ兵ヲ出ス方略ヲ才極メニナツタ

ハ、誰レアタリデゴザリマスカ、

落合君 多クハ益満・伊牟田ノ兩人ト小島アタリデ議シ

マシタノデ、夫レニ科野養齋ト云フ者がアリマシタ、

是レハ以前ヨリ伊牟田アタリノ懇意デアツタ様子デ、

此者並ニ夫レニ列リマシタハ、私共モ議シマシタ仲間

デゴザリマスガ、一々残ラズ方略ニ加ハツテ議シタト

云フ訳デハゴザリマセヌノデ、先ヅ益満・伊牟田ノ兩人ト小島アタリガ、始終其策ヲ出シマシタ様デアリマシタ、

寺師君 野州マデ乱暴ヲヤツタオ見込ハ、アチラヲ騒カシテ、幕府ヲ困ラス為メデアリマスカ、金穀ヲ奪ヒ取リテ、府下デ仕事ヲ仕ヤウト云フノデゴザリマシタカ、落合君 夫レハ両方ヲ兼ねテ居ルノデゴザリマス、江戸

ニハ歩兵ガ多ク集ツテ居リマス故ニ、近国デ騒ガシテハ歩兵ヲ繰出シニナルデアラウ、サウスレバコチラガ隙ガ出来ルニ依ツテ、虚ニ乗ジテ放火デモ仕ヤウト云フノデゴザリマス、夫レニ今ノ金穀ヲ旨ク手ニ入レバ、入費ニ仕ヤウト云フノト兼帯シテ居ルノデアリマス、寺師君 日々ノ賄ハ梅干ニ香物クライデゴザリマスカ、又余程御馳走ヲ致シタモノデゴザリマスカ、

落合君 其辺ハシツカリト覚ヘテ居リマセヌガ、サウヒドイ手当デハナイ様デゴザリマシタ、併シ御馳走ト云フモノモゴザリマセヌノデ、先ヅ通例ノ書生ノ安下宿ノ賄ヒクライナモノデゴザリマシタ、

寺師君 食事ノ時ハ一所デゴザリマスカ、仲間々々デ分割シテ随意ニ食シテ、サウシテ会議デモスル時ハ、糺

合所ニ寄ツタモノデゴザリマスカ、

落合君 糺合所ニ常ニ居リマスノデ、二階モアリ、間敷モアツテ、其間々ニ分レテ居テ、其分レテ居タ居間デ

食事ヲシタ様デゴザリマシタ、賄ヲシマス小使ノ様ナ者ガアリテ、夫レガ受持ツテ配ツタ様デゴザリマシタ、岡谷君 寒イ時デゴザリマスカラ、夜具ナドヲ纏メテ入レル者ガゴザリマシタカ、

落合君 シツカリ覚エテ居リマセヌガ、何レアツタデアリマセウ、

市來君 益満ハ長沼ノ撃剣家デ、能ク使フ男デアリマス、夫レカラ山岡鐵舟先生ト、其時カラ極ク懇意デアツタ様子、撃剣家ノ仲間ガ同志ニナツテ、八町堀ニモ長沼ノ門人が余程居ツタサウデス、十月十三日討幕ノ詔カ下ツタデアリマス……

岡谷君 最初ニ益満ノ乱暴ヲヤツタ時分デアリマスカ、市來君 討幕ノ詔ガ下ツタケレドモ、討ツベキ名ガ無イカラ、コチラニ行ツテ雑ゼ返ヘセト云フコトデ、西郷ガ益満ヲ使ウタト申スコトデス、益満ノ子分ガ一人コチラニ居マスカラ——私ノ親類デアリマスカラ、乱暴ノ事ヲ一ツ話サセマセウ、聞テ見マスト余程乱暴ヲヤ

ツテ居リマス、

寺師君 随分集ツタ浪士ノ中ニハ、或ハ博徒デアレ、若クハ牢破り、サウイフ者モアリマセウネー、

落合君 有ツタ様デアリマス、

岡谷君 幕府ノ改正ガ始マツテ、旗本ガ抱ヘテ居ツタ者ヲ暇ヲ出シタリシテ、夫等ガ四方ニ行ツテ——私ガ上京ノ時、池上ノ本門寺ニ五百人モ居ツタ、夫レ等モ乱暴ヲスルノデアリマス、

市來君 八官町ニ大輪田ト云フ鰻屋ガアリマシタ、其所ハ乱暴仲間ノ面々ノ散財所デ、其所ニ婆ガ明治二三年頃マデ居リマシタ、私ハ行タ事ガアル、其婆ガ丁寧ニ話シタコトガアリマス、アナタ方ハ本丸ノ焼ケタ火ノ出所ハオ聞キゴザリマセヌカト、咄シタコトガアリマス、

落合君 夫レハ能ク聞キマセヌガ、私共ノ方ニ集タ人数ノ手デハゴザリマセヌケレドモ、何レ伊牟田・益満ノ兩人ノ内カラ手ガ廻ハツタモノデアルト云フ事ヲ聞テ居リマス、

寺師君 伊牟田杯ノ話デアリマスガ、玄関ニ這入ツテ団炭ドソヲ草ニ包ミテ行ツテ、挿入レテ付ケタトカ申シマス

ガ、

岡谷君 アレハ將軍御上落ノ後デアリマシタカ、

市來君 十二月二十二日デゴザリマセウ、

寺師君 其時伊牟田ナドカ団炭ヲ風呂敷ニ包ミテ堀ヲ越ヘテ這入ツテ、本丸ノ玄関ノ覺ヲ駁ハシテ、其下ニ団炭ヲ入レテ点ケタト云フコトニ聞キマスガ、

市來君 マツチノ流行リガケデ、長崎カラ覺ヲコスリ火ノ出ル物ヲ持ツテ来テ居ルト云フコトデアツタトヤラ申シマス、

岡谷君 ドコカラ這入ツタモノデゴザリマセウカ、

市來君 名ハ余程堅固ナモノデアレドモ、這入ツテ見レバ番人ハ居テモ逃ゲテ仕舞テ、無人ノ地同様デアツタト、後ニ伊牟田ガ言ツタサウデス、其顛末ハ近イ中ニ伊集院兼寛ニ話サセマセウ、是レハ始メヨリ西郷ノ子分デ、能ク知ツテ居リマス、

岡谷君 森時之助モ、アレモ乱暴シテ東京中駈廻ツテ歩イタ様子、

市來君 アレハ鹿兒嶋士族ニナツテ居リマス、前カラ手引ヲ為シタ者デ、彼此レ功勞ガアルモノデアルカラトテ、士族ニシマシタ、

鈴村君^(註) 其時ハ随分金銀ハ集ツタデアリマセウ、

市來君 御一新ニナリマシタカラ助カツタノデ、是レガ

銚子^(註)ガ違フト大賊デアアルノデアリマス、

寺師君 治世ナレバ逃スベカラザル賊デ、乱世ノ際デア

ルカラ切取り強盜モ免シタノデアリマセウ、

市來君 夫レデ一向取ツタ金モ懐ロニセズ皆分配シ、或

ハ貧困ノモノニ与ヘタサウデス、

寺師君 時々浪士ニ御馳走ノ有ツタコトハゴザリマセヌ

カ、

落合君 先達テオ話申シマシタ柳橋ヘ一日招カレテ行ツ

タ事ガアル、コチラノ屋敷デハ一度一統ヘ蕎麦ノ馳走

ニナツタ事ガアル、其他ハ余リ有リマセヌ、

岡谷君 手当金デモアリマシタモノデアリマスカ、

落合君 サウイフ事ハアリマセヌデゴザリマシタ、小島

ノ手許ニハ折々五十円カ六十円ヲ貰フタコトガゴザリ

マス、

寺師君 サウスレハ別ニ手当モナク、オ賄ヒバカリデゴ

ザリマスネー、

落合君 サウデアリマシタ、

寺師君 夫レナレドモ地方ニ稼ギニ出ル時ハ、手当ノ無

イコトデモ出来ヌカラ、幾ラカ渡シタモノデアリマス
カ、

落合君 何レ向フヲ的二行ツタモノデ、併シ道中ノ賄ヒ

クライハ用意シテ行ツタ様デアリマシタ、

寺師君 其時ハ鉄砲ナリ槍ヲ担キテ行クノデゴザリマス

カ、

落合君 サウイフ物ハ持チマセヌ、帯刀シタ丈ケデゴザ

リマシタ、

寺師君 其集テ居ル時ニ、幕府ノ方カラ捕手ヲ遣ル様ナ

事ハゴザリマセナンダカ、

落合君 夫レハ無カツタデゴザリマス、併シ甲州ヘ向ツ

タ人数ハ、伊豆ノ韭山ノ県令ノ江川太郎^(英龜)左衛門カラ討

手ヲ向ケラレタ、此等ハ徳川家ノ奉行ノ方カラ、一体

ヘ乱暴狼藉スルニ依リテ、サウイフ者ガアツタナラバ

差押ヘハ勿論、打殺シ斬殺シテモ苦シクナイト云フ達

シガアツテ、サウイフ報告ガアリマシタケレドモ、別

段屋敷カラ出マス人数ニ向ツテ捕手ヲ出ス様ナ事ハ無

カツタ様デアリマス、

寺師君 然ラバ出入スルニ薩州人ト云フコトモナク、言

ハズ語ラズ集マツテ、白中横行シテモ少シモ眼ニ着ケ

又風デアリマシタカ、

落合君 眼ハ着ケタモノデアリマセウガ、手ヲ着ケヌデアリマシタ、

市來君 筑波浪人モ多クハ薩州人ノ偽名ダサウデス、薩州人モ二三名ハ居ツタト云フコトデ、多クハ仮名デア
ル、

岡谷君 大概召取ツタ者ノ口供ヲ見ルモ、土地ノ者ガ多
イデアリマス、

寺師君 鹿兒嶋ノ浪士ハ、一体其時ハ少ナカツタモノデ、
先ツ藩邸ナラ逐ハレタ者位テ、純然タル浪士ハ無イデ
アル、田上某ト申ス者一派ノ浪人共モ藩邸ヨリ追ハレ、
米國ニ行キ、後鉄砲ヲ以テ來テ謝罪シテ許サレタモノ
デ、其婦ツタハ戊辰ノ戦争最中デ、鉄砲ノ要ル時デア
リマシタカラ、前過ヲ宥サレマシタ、

市來君 夫レカラ脱走シテ亜米利加ニ行ツテ、帰ツテ戊
辰ノ戦ノ時分デゴザリマスカラ、寛大ノ処置復籍サセ
タノデゴザリマス、其時分ハ余程刑律ハ嚴格デゴザリ
マシテ、少シ乱暴ラシイ事ヲスレバ、屠腹サセル様ニ
ナツテ居リマシタ、足軽ナドガ二十人バカリデ、京都
ノ本願寺ニ這入ツテ強盜シタ事ガアリマス、夫レ等ハ

後子鹿兒嶋デ皆ナ屠腹サセマシタ、

寺師君 サウ致シマス、アナタ方ノ日々ノ為サル、所
ト云フモノハ、勤王攘夷ノ計画ノ議論ナドハ毎々デア
ツタデゴザリマセウガ、愈見込通りニ行ツタナラバ、
江戸ノ城デモ乗取ルオ考ヘデゴザリマシタカ、

落合君 始メハサウイフ考ヘデゴザリマシタガ、人数モ
ナク金穀モナク、仕方ガナカツタデアリマシタ、

寺師君 二十五日ノ酒井ノ兵ガ寄セテ來ル事ハ、前カラ
御存シデゴザリマシタカ、

落合君 其朝マデ知ラヌノデ、前日ニ其事ヲ告ゲタ者モ
アリマシタケレドモ、夫レヲ信用セズニ居テ、全ク朝
ニナツテ始メテ知ツタクライデアリマシタ、

寺師君 ドウイフ形勢デ攻メテ來タモノデゴザリマス、
尤モ夜明ケデゴザリマセウ、

落合君 始メテ寄セタ人数ハ闇イ中ニ來始メタト云フ事
デゴザリマシタガ、併シ外ニ出ヌモノデアリマシタカ
ラ、外ハ一向知ラヌノデゴザリマシタ、中デ聞キマシ
タ丈ケデ、更ニ其時ノ有様ハ分リマセヌ、

寺師君 益滿ハアナタ方ニ其事ヲオ知ラセ申シタハ、朝
デアリマシタカ、

落合君 朝早くノ事デシタ、ソコデ談判シタラ兵ハ引カ

セルト云フコトデ、ドノミチニモ追テ達シノアルマデ
ハ慎着シテ、暴動ガマシイ事ガアツテハナラヌト云フ
コトデゴザリマシタ、サウシテ居リマス間ニ、大砲ノ
音が聞ヘマスト、勝手ニ進退スル様ニト云フコトデ、
ソコデ打テ出マシタノデアリマシタ、

岡谷君 幕府ノ方デ、悪イ事ヲシタ者ヲ縛ツテ出セト云
フコトデモアツタモノデアリマスカ、

寺師君 大砲ノ音ヲ聞テ、浪士ノ面々モ驚キマシタノデ
ゴザリマスカ、

落合君 サウデゴザリマスネー、

寺師君 面々各々逃ゲル者ハ逃ケルト云フ訳デアリマシ
タカ、

落合君 サウイフ者ハ見ヘマセヌデアリマシタ、

寺師君 其際ノアナタ方ノ御意氣ハ余程盛ンナモノデ、
幕府モ一呑ニスルト云フ心持デアリマシタラウガ、然
ルニ幕府ノ方デ取締リヲセヌノハドウイフモノデアリ
マシヤウカ、

岡谷君 夫レハ余程嚴重ニ諸大名ニ言付ケテアツタモノ
デ、ソレトモガタ／＼騒ク人ガアルモノデアルカラ、

仕方ガナイノデアリマス、

岡谷君 其時デアリマセウ、歩兵ガ吉原デ乱暴シテ――
其時歩兵ヲ十三人打殺シテ、ソコデ歩兵ガ腹ヲ立テ、
吉原ヲ襲撃シタノデ、夫レハ平生乱暴ヲスルニ就テ、
中ノゴロツキガ歩兵ノ酔ツ払ツテ帰ル所ヲ十三人殺シ
タ、然ルニ其殺シタ者ガ一人モ知レヌ、其返報ニ吉原
ヲ襲撃シタノデアリマシタ、

寺師君 焼払フタノデアリマスカ、

岡谷君 焼払ハヌガ、空銃砲デ花魁ノ逃ケルノヲ空銃砲
デ撃ツ位デ、大騒ギテアツタト云ヒマス、

寺師君 余程死人デモアリマシタカ、

岡谷君 死人ハナイガ擲ルクライデアツタト云ヒマス、
寺師君 浪士ヲ集ムルハ結局スル所、幕府ヲ騒ガスノデ、
アナタ方ハ幾分カ西郷ノ幕府困マラセ策ノ犠牲ニオ立
チニナツタノデアリマスネー、

市來君 乱暴スレバ必ズ薩摩ニ兵ヲ向ケル、ソコヲ戦ノ
糸口ニスルノデアリマシタカラ……

寺師君 夫レデ策ノ当タノデアリマスネー、戊辰ノ年大
坂ヲ推出ス時ノ模様ハ、アレモ方略ヲ極メテ推出シタ
モノニアラズ、慶喜公ハ恭順ヲ表セラレ、會津・桑名

ハクヤシクテナラヌノデ、會津が脅迫シテアスコニ至ラシメタルモノト見へ、夫レデ慶喜公ガ立去ル際ハ、故永井尚志氏ナドモ知ラヌノデ、オ立ニナツタ後トド知ツタ位デアルト聞キマシタ、アレモ真ニ慶喜公ノオ腹ガ極ツテ、京都ニ押出スナラバ、ア—イフ無策ナ討出シハセヌ筈デ、京都ヲ包ムナラバ八方カラ包メル、鳥羽口ガ破レテモ丹波口モアルト云フ訳デアルカラ、畢竟其時ノ出来合デアリマシヤウネー、

岡谷君 正月三日ニ討薩ノ表ヲ京師ニ達シタガ、軍サデ達スルコトガ出来ヌ、(忠氏、小浜藩主)酒井若狹守家来ガ討薩ノ表ヲ持ツテ来タ、始メテ見マシタガ表ハ四角ナ紙デ、「上」ノ字ガアツテ下ニ「慶喜」トアル、夫レヲ官軍ニ取ラレテハナラヌモノデアルカラ、之ヲ是非京都へ出テ、(忠氏、高徳藩主)戸田大和守ヲ以テ出シテ呉レト云フコトデ、之ヲ誰レガ持つテ行クト云フ時ニ、酒井ノ家来三人ガ、私共三人ガ死ヲ決シテ持つテ行キマセウト云フコトデ、夫レガ戸田ニ来テ、私ガ逢ヒマシタガ、重大ノ儀デアルカラオ直キニ逢ヒタイト云フコトデ、何ノ御用デアラウト言ツテ問ヒマシタガ、実ハ慶喜公ノ嘆願書ヲ此レニ入レテ居ルト云ツテ襟ニ入レテ居リマシタ士ガ、急ニ

仲間ノ真似ヲシテ頭ヲ剃リテ居ル、戸田ガ逢ヒマシテ

受取り、サウシテ春嶽サンニ持參シタ、春嶽サンモオ

困リノ様デ、夫レカラ尾張サンへ行ツテ御相談ニナツ

テ、夫レカラ岩倉サンニ行ツタ様子、文言ハ見マセヌ、

(敬斐)長森君 夫レハ事ガ始マツテカラデアリマスカ、

岡谷君 始マツテカラデアアル、夫レデ田ノ中ヲ這フテ来

タト云フコトデアリマシタ、

(左一郎)磯野君 一ツハ大垣カラ来テ居リマスネー、

岡谷君 名ヲ忘レタガ、留守居ノ名ガ何ノ束トカ云フ名

ノ人ノ様デアリマシタ、

寺師君 其人ノ姓名ハ調べタイモノデアリマスカ、其時

ノ事ヲ酒井家ニ質問シテハ如何デアリマセウ、

岡谷君 夫レヲ上ゲテ置イテ打払フ積リデアツタカ、何

ニセヨ兵ガソコマデ来テ居ルモノデアルカラ、仕方ガ

ナクテ其俣ニナリマシタ(一同立礼)

(史談会速記録第十五輯所載)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
〔紙数五〇枚〕の記載あり〕

六五四 玉里邸御所蔵書類集(文久三年ノ部)

六五四ノ一

〔徳川茂徳〕
尾張大納言

来九日巳刻

〔廣順、熊本藩主〕
細川越中守

同日巳半刻

右参内被 仰出候、此段申上候也、

〔広禮〕
忠禮

二月朔日

〔朝彦親王〕
青蓮院宮

坊官中

右、二月朔日野宮殿ヨリ被差上、今日在京之武家方

〔定惣〕
へ、左之通御達、

近頃無名之投書ハ、元來從国忠正義心底相與候義ニ候

得共、却テ人心可到騒擾候、殊去月廿四日夜、
〔九條尚忠〕
関白殿・

青蓮院宮・前関白殿其外而役家々投書有之候、昨年十一

月薩・長・土之三藩、申立之義モ有之候次第ニ付、諸

藩士ニハ右様之義致候者、尤モ有之間敷候、何人之所

作ニ候哉、取調有之度関白殿被 命候事、

但被塞言路候ニハ無之候、以來致告訴度義モ有之候

ハ、書姓名其筋へ可申出候、其上御採用有無ハ

朝廷之御所置ニ可有之候事、

右

附武士ヨリ言上之義略之、將軍上洛道路万端心得候事、

六五四ノ二
二月二日、長谷殿ヨリ参ル

別紙写入御覽候、宜御披露類入候也、

二月二日
〔長谷〕
信篤

青蓮院宮

祇候中

六五四ノ三
口上

愈御堅勝被成御座珍重奉存候、私儀今般初テ在所へ之御暇被下、一昨日致上着候、近来時情不穩ニ付テハ、深被惱

叙慮候段、追々伝承仕奉恐入候、依之乍恐奉伺
天氣度参上仕候、

〔元和、島原藩主〕
松平主殿頭

右二月三日前殿下ヨリ参ル、

六五四ノ四
亀井鞍具見込違之事

三姦入道并ニ二姦妃帰京ノ話、六門内諸武家下乗之上ハ、総下乗可有之旨、諸向へ可被触、武家行列長候間、

急用差支候ニ付、人数ヲ減哉、列ヲ切所可被尋哉、諸臣建白総不擁蔽御明断有之度候、

貪賄賂之聞有之輩、被糺明可被退候、

旧臘從関東献上之御重唐戸杯拝領申出度候、

諸藩参 内可被減 献物候、

諸藩滞在肝要候、

過日及言上候国事掛名分離相立、且苦心建白之義擁蔽之災有之処、

禁中御模様モ被為替ニ付、早々可出動深畏入存候、左候ハ、過日及言上候通、尚亦感慨之趣意蒙 御明断度存候、

一 密奉窺

叙慮度一言有之候間、御両公ハ 玉側ニ被候モ不苦、役人衆ヲ被退 御对面相願度候、

蒙 免許候者、子細可及言上候、

一 御用掛蒙 仰後、実不安寝食苦心仕候義ハ、於役人衆

モ粗承知之旨承候、然連日番代等ニテ参 朝打続候テ

ハ、周旋進退不自由、徒送時日事条及延滞、歎ケ敷存候間、右等之辺何トカ蒙 御憐愍度願存候、

右三ヶ条各御許容相成候ハ、速出勤可竭微忠候、此段宜御沙汰願入存候事、

〔裏辻〕
公愛上

右三通トモ公愛ヨリ差出候旨ニテ、前関白殿ヨリ参ル、

六五四ノ五
二月四日、中川修理大夫ヨリ指出ス口上書

私義、

八幡山崎辺御台場御用周旋被 仰付、難有仕合奉存候、
右ニ付伺書差上置、其後モ奉伺候処、未為何 御沙汰

モ不奉蒙、日夜 御下知奉待候義ニ御座候、然ルニ当
分御決議被為 在兼候御儀ニモ御座候ハ、何卒別段
相応之御用度被 仰付被下置候様奉祈願候、乍恐

朝廷万機之御中不勘弁ニ度々奉歎訴候段、御移合之程
深奉恐入候得共、御用度モ不相動、数十日空敷滯京仕
候テハ、何分赤心不安、且国力モ疲弊可仕ト心痛至極
仕候ニ付、不得止事重テ歎訴候儀ニ御座候間、何分ニ
モ下情御推恕被成下、格別之 御仁恤ヲ以テ、宜敷御
下知被成下候様奉願候、以上、

二月三日 中川修理大夫(久留、岡藩志)

六五四ノ六 二月四日、三條實美・阿野公誠両卿ヨリ以書申来

九日巳之半刻佐竹右京大夫(義典、久保田藩志)参 内之義、武伝ヨリ被申

入旨ニテ御相談、依テ可然旨御返答之事、

六五四ノ七 同二月四日、議奏加勢廣橋胤保ヨリ申来

大樹公官位一等辞退之義被申上候処、今度厚キ

歎慮之御旨被 仰出深畏被存候、御請ノ義ハ近々松平

(慶永) 春嶽上京之上委細可申上候、此段程能 御両卿へ御達
可申置旨、年寄共ヨリ申越候事、

二月

右二月五日、三條中納言殿ヨリ申来、中川修理大夫
之義(以下欠)

六五四ノ八 二月四日、廣橋殿ヨリ申来

佐竹右京大夫
来九日巳半刻、参 内被 仰出候依申上候、此段宜御
披露頼入候也、

二月四日 胤保

六五四ノ九 二月四日、廣橋殿ヨリ申来

別紙写入御覽候、宜御披露頼入候也、
二月五日 忠禮

六五四ノ一〇 正月五日武伝被附

当月廿六日、為上洛關東發途之旨、先達テ被申出候処、
日限引上同廿一日發途可被致旨被申出候間、此段御兩
卿へ御達可申旨、年寄共ヨリ申越候事、

二月四日

六五四ノ二
正月五日武伝被附

松平春嶽義、今四日致上京候付、参 内等之義宜被成

御沙汰候、以上、

二月四日

牧野備前守
(宗義、長岡藩主)

坊城大納言殿
(俊克)

野宮宰相中将殿
(定功)

右二月八日、飛鳥井殿ヨリ以封中申来、

六五四ノ二
二月七日武伝被達

先達テ八幡山崎辺台場新築之義被 仰付置候処、造作

之場所得失衆議難決候間、今度台場之儀ハ被止候、万

一非常之節ハ、御警衛人数速差登候様、兼テ手配可致

置更御沙汰候事、

二月

六五四ノ三
二月七日武伝被達

攘夷御一決御内定之上ハ、持場近辺へ夷船致渡来候得

ハ、時宜ニ寄御差図無之内ニテモ、早々人数差出可申、

若夷人作法之義有之候得ハ、成丈手真似ヲ以テ申論

シ候得共、承引不仕候節ハ取計モ可仕候間、大坂表御

役人中へ御差図可被成下候、此段御届申上候、以上、

(池田慶徳、因州藩主)
松平相摸守

二月

御附札

書面之趣ハ承置候、尤モ其筋へ相達候、

六五四ノ四
二月八日夜、列参ニテ被指出候書付

微臣之輩不願万死建言仕候趣意、旧冬幕府へ垂 命之

後、於幕府モ攘夷之策略可相廻、当春上京、除旧弊布

新政、尊攘之方略有之候由承及候ニ付テハ、近々幕府

上京ト存候、万々一幕府因循之説ヲ言上仕候節、臨其

期 廷議是ニ御雷同有之候テハ、方今諸藩輻輳勤王之

志一定致シ候者共、彼是狐疑異論等紛興致シ、自然暴

激之事共自輦轂之下相起候哉モ難計、深憂仕候間、何

卒唯今之内、於

朝廷攘夷緩急之御基本ハ勿論、庶政確乎ト明瞭之御処

置被相定、下情不擁塞達

叡聞万事隱微之義無之、着実明白ニ有之候様仕度存候、

乍恐唯今之姿ニテハ因循之御弊風、悉被相除候ト申義

ニモ不被為在哉ト、疑惑仕候輩モ有之候間、自然人心
瓦解致シ候テハ、実ニ御一大事之義ト存候間、從來之
御弊風ヲ御一洗不被為遊候ハテハ、

皇国犬羊蹂躪之街ト可相成、悲歎之至極ニ御座候、所
意有之候ハ、可言上兼テ被仰出候義ニ付、不願恐言上
仕候、何卒早々

朝議御評決之義、相何度存候事、

二月八日

(正親町) 實徳
(三条西) 季知
(橋本) 實麗
(豊岡) 隨資
(滋野井) 實在
(東國) 基敬
(正親町) 公董
(姉小路) 公知
(壬生寺) 基修
(四條) 隆詞
(錦小路) 頼徳
(大) 宣嘉

推参

六五四ノ一五

来十六日巳之刻参 内被 仰出候、此段宜御申上頼入
存候也、

二月九日

胤保

青蓮院宮

諸大夫中

右同九日議奏中ヨリ申来、

二月八日、於學習院兩役受取

以

勅使被 仰下候義、猶其方ニモ厚周旋可有之旨、被
仰合候趣委細奉畏候、素攘夷拒絕之義ハ、兼テ御請申
上候ニ付テハ、聊因循遲滞可致咎無之候、尤モ策略ハ
武臣之職掌ニ付、何レ諸藩衆議之上、早々及拒絕之談
判候様可致旨、賞聞可有之候、
右、同日阿野殿参上ニテ、三條殿ヨリ被差上候旨、

六五四ノ一七 (松平慶倫、津山藩主)
今般三河守義、不存寄奉蒙

(中山忠光) 忠充

(孝明天皇紀第四にて校訂)

(山内豊信) 土佐前侍従

勅諭、冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、小身微力追

手困窮罷在候付、如何様尽力仕候テモ、為國家ニ相成

候程之仕方ハ速モ行届候義ニ無御座候、誠以テ表寸志

候迄ニテ奉恐入候得共、洛中非常為手当加茂川筋ニテ

出地相撰、土蔵取建蓄穀仕置度、且又淀川船之義ハ、

公武相始メ諸邦人民之往返、諸物運送專要之モノニ御

座候処、船數ニ定數有之候ニ付、近来別テ国家用便差

支候間、三河守手組新造、右用便之補助ニ相成候様仕

度、此段上京之上奉内願度所存ニ御座候間、前以私ヨ

リ御内慮相窺、御許容ニ可相成趣之御沙汰ニモ御座候

得ハ、蓄數千石積之土蔵、并ニ淀川船三十艘出来方之

義、急速手配致置、当兩条トモ追々増方之義、尽力仕

候様申聞候間、右之段内々奉窺候、以上、

二月 黒田彦四郎

右二月十日、議奏加勢日野殿ヨリ言上、

六五四ノ一八

越前前中将

明後十二日已刻參 内被 仰出候、此段申上候、宜御

披露頼入候也、

二月十日

資宗

青蓮院宮

諸大夫中

六五四ノ一九

攘夷拒絶之義ハ、大樹公上洛相濟江戸表へ帰着後、速

ニ可及応接事、

先頃申上置候有志之者共御所置之義、早々被 仰出候

様、此度猶又相願候事、

二月九日、

慶喜 慶永

六五四ノ二〇

右鷹司殿へ一橋黃門・越前春嶽・松平肥後守・松平相

摸守・松平容堂等參上ニテ、演舌書右殿下ヨリ御廻シ

ニ相成候事、

六五四ノ二一

二月十一日夜、関白殿御成ニテ隨身一橋被遣候名前、

三條中納言

野宮宰相中将

阿野宰相中将

橋本宰相中将

豊岡大藏卿

六五四ノ三

滋野井中將
正親町少將
姉小路少將

越前前中將

明日參 内延引、来十六日辰半刻參 内被 仰出候、

此旨御申入頼入候也、

二月十一日

(六卷)
有容

青蓮院宮

諸大夫中

追テ明日參 内延引之子細ハ、明日阿野宰相中將參

上可申上候、是又宜頼入候也、

六五四ノ三

入道前関白・入道前内大臣・千種入道・岩倉入道・富

小路入道等、自今猶又嚴重可謹慎被 仰出候ニ付、

九條大納言

富小路二位

岩倉三位

三位中將

千種侍從

岩倉大夫

右進退被伺候、此段申上候、宜御披露頼入候也、

二月十三日

胤保

青蓮院宮

諸大夫中

六五四ノ四
二月十四日、議奏廣幡殿ヨリ被申上

尾張前大納言

一橋中納言

右、来十六日辰半刻參 内被 仰出候、此段可被申上

頼存候也、

二月十四日

忠禮

青蓮院宮

諸大夫中

六五四ノ五
二月十四日、廣幡殿ヨリ被申上

大樹公上洛滞在日數十ケ日ト御治定相成候間、二月廿

一日出帆ヨリ、海上往反風波之障等無御座候得ハ、四

月中旬之内、攘夷之期限ト相成申候、尤モ帰着日ヨリ

廿日御猶予被下度儀ハ、先夜モ奉申上候通之儀ニテ、

右之日積ニ相成候事、

二月十四日

松平容堂

松平肥後守

松平春嶽

一橋中納言

三條中納言殿

橋本宰相中將殿

野宮宰相中將殿

阿野宰相中將殿

豊岡大藏卿殿

滋野井中將殿

正親町少將殿

姉小路少將殿

六五四ノ云

朶雲披見仕候、愈御勇健珍重奉存候、陳ハ大樹公滯京

日數十日之御治定之義、一昨夜被 仰出候処、即時御答

ニ不及候ニ付、今午刻迄ニ言上可致旨、且今日御入來

申入候得共、不能其儀之段致承知候、右御答差上方春

嶽ヘモ申談、各方御連座ニテ被達候義、使ヲ以テ差出

候ハ失敬ニ相当候間、今日御入來申入候事ニ候得トモ、

御急之旨無拋次第二付、直様書面差出申候、御落手可

被下候、然ル上ハ御面談可申義無之候間、別段御入來

ハ不及候、此段御触取可給候、以上、

即時

一橋中納言

坊城大納言殿

野宮宰相中將殿

別紙今朝武伝ヨリ申遣候、一橋返書入御覽候、此段

宜可有披露也、

二月十四日

忠禮

青蓮院宮

諸大夫中

六五四ノ云

二月十五日、從寄人議奏迄被差出旨、三條殿持參

皇國之御為以前ヨリ一身投シ、脱藩イタシ居候有志之

輩夫々御賞之上、各藩主人々々へ即返候様トノ事、尤

之義ニハ候得共、攘夷之義ニ付テハ、一身自在ニ可致、

周旋存込候輩ニ可有之、却テ気合ニ相拘リ、厚キ御趣

意ニ振レ候様之義出来候テハ不宜候間、難被及 御沙

汰候哉ト被 仰出、可然存候事、

六五四ノ二八
撰家中上言

神宮御警衛之義嚴重ニ被遊候ニ付テハ、親王大臣之内
參向滯留守衛事、謹敬承候得共、何分軍事策略等之義、
且武門心接連モ難及力、併親王之義ハ御受之人モ可有
之哉、忠香始之処ニテハ如何様蒙 仰候共、不及身事
候間差掛候処ハ、大・中納言之中ニテモ被撰、御当用
可然哉存候事、

親兵之義ハ既守護職被置有之候得共、重大之御時節ニ
候間、尾州前大納言・島津三郎兩人へモ被 仰付候ハ
、禁闕格別ニ御安心ト乍恐存上候事、猶衆議之上可有
聖断候事、

但租税之義ハ御尤ニ存候事、

(一巻) 忠香
(二巻) 齊敬
(徳大寺) 公純
(近衛) 忠房
(一巻) 實良

六五四ノ九
兩役上言

神宮御警衛之事、

親王大臣參向急速難被行候ハ、大・中納言之内可然
存候事、

尾張・桑名へモ御沙汰可然存候事、

御親兵之義相願候六府或瀧口等被准古制、 禁中御守
衛ト被遊候条可然存候事、

一 外衛之義以大藩可被 仰付候事、

一 租税之義尤可被 召候事、
思力

割付之事一橋へ御相談可然候事、

六五四ノ三〇
參政上言

一 神宮御警衛親王丞相下向之義、熟考仕候処、御尊崇至
当之儀ニハ被為在候得共、官方御遙任ニテ御下向無之、
上卿祭主等時勢不容易候間、下向被仰付可然哉、親王
方御遙任方後難有之間敷ト存候、

實麗
隨資
通禱
公知

六五四ノ三一
一親兵租税之事

天下之税百分二、二十万ヲ朝廷ニ被充、三十万ヲ六衛府瀧口内舍人ニ被充可然、攘夷ニ付テハ、国力養培專一候得共、ワスカ六十余州、百部ノ二ヲ被召候テモ、痛ニ相成申間敷ト存候、

實麗

六五四ノ三
一親兵租税之事、先天下ノ税ヲ三千万石ト立、其百部一、三十万石ヲ被召、其内十万石ハ從來御手薄ノ角ニ被充、十万ハ六衛瀧口内舍人忠勇ノ者被充、十万石ハ義倉ニ被充可然哉、

隨資

通禱

公知

六五四ノ三
一親兵之名目暫不被仰出、租税計ヲ被召候ハ、御実用相立可申哉、

公知

六五四ノ三四
国事掛上言

被尋下候攘夷御一決ニ付、神宮へ被告申旁御警衛之

總管トシテ、親王・大臣之内ヲ以テ可被差進之事、方今国家重大事之御評議等モ可被為在御時節、大臣ヲ以テ被差進候義、如何可有之哉ト存候間、中務卿親王父子之内被 仰出、尚又 神宮・上卿・祭主等ヲモ同様被差進、暫滞在被 仰出、至当之御義ニ可有之、且又御警衛人体是迄藤堂(高敷、津藩主)和泉守承居候得共、今一廉御手厚ク尾張大納言へ被 仰出、可然義ト存上、御親兵之事、御親兵ト被 仰出候テモ、事々差響候義モ可有之ニ付、禁内為御警衛、六府内舍人瀧口等増員被 仰出、方今尊攘至誠之有志、或ハ勤王之故ヲ以テ脱藩、京師ニ滞留之徒数多有之由及承候間、右有志之者共御精操有之、六府等員数ニ被加増、糧米俸祿等之義ハ御沙汰之如ク諸国之租税早々被 仰出、被充行可然、且又諸藩御警衛之義ハ、一年或ハ半年之限ヲ以テ更替被相定、大小藩通計五六藩、又ハ七八藩必滞京被 仰出可然哉、右様相成候得ハ、會津守護職之如キ趣意モ相立、親兵ト不申、御親兵ニ相当リ 宮城之御守衛嚴重ニ被行、京師内外御警衛之筋、屹度相立可申義ト存上候事、

二月廿二日

季知
(三條西)
(鹿田) 重胤

〔六条〕 有容

〔柳原〕 光愛

〔河野〕 公述

〔橋本〕 實梁

六五四ノ三五

神宮御警衛之事、三條西中納言以下被申上候通、愚存

無之候事、

御親兵之事、親ノ字ヲ禁之字ニ御改正ニテハ、如何被

為在候哉、右仕法ハ高祿精忠之諸藩へ被 仰附、人数

為差登每藩父子之中、上京指揮仕候テハ如何被為在候

哉諸藩半年或ハ一年交替之事、俸祿ハ從国々租稅猷納ニテ被充下之事、

復古制当然之義、何共恐入申上兼候得共、無腹藏言上

仕候、上京武士ハ天祿拝領、妻子ハ藩主之祿ニテ養候

テハ一樣ニ不相成、矢張御雇之容ニ可成候間、衣食調

度從藩主可相渡方、御都合欵ト奉存上候事、

租稅之事、御親兵計ニ貢猷ニテハ如何ニモ被為在候哉、

且又以養御親兵為名目、租稅貢猷被 仰出候様ニ相聞

候テハ、即今富国強兵之御時勢ニ違、御一大事ニ候、

不願恐怖申上候事、

〔勤弊由小啓〕
資生上

六五四ノ三六

御親兵之事、別封愚白申上候、併人々申上候通復古制、

近衛門府兵衛内舍人瀧口等忠勇之士被補候義、誠以テ

名分改正正議ニ候間、此儀御登用被為在候ハ、愚考

申上候如ク、只今學習院雜掌稻波・国学者谷・森ナト

文芸之輩被補、内舍人之義自今御改正、於武官ハ上下

共武才之者被任候様ニ不相成候ハテハ、指揮号令モ難

被行候、是迄之通ニテ文武芸打交候テハ、名分被正

候トハ難申候間、自今堂上地下一同、望武芸之輩可講

武只今被任候、大將以下武官人々ハ必武芸可練磨、早

々被 仰出度候、

但不望武芸之輩可被任他官候事、

唯近衛以下義勇之士被召補候義ニテハ、名不正言不行

ト奉存上候事、

右俸祿ハ

總計 何人

一人分 何石

總計 何石

從関東為差出、從禁中御藏本人へ被下候方可然哉ト奉

存上候事、武官ハ武才之者可被任義、当然ニ候、併浮

浪之士為

皇國攘夷軍功相望候輩ト存候間、各御親兵ニ被補候得ハ、

輦下之警衛ニテ攘夷先鋒難致、失本意候人モ可有之哉、御深察奉願候事、

資生上

六五四ノ三七
寄人上言

御親兵布置言上仕候

一御親兵ハ是非不被置候テハ不相成義ハ、方今之御時勢

申迄モ無之義ニ有之候、自然幕府ヨリ彼是申出候共、

渠ニモ旗本之士有之候間、

朝廷御親兵之義承伏不仕候ハ、渠之旗本モ以來廢絶

致シ可然存候、

一御親兵貢士之事、

右ハ普天之下、率土之濱、王臣・王土ニ非ルハ無キ訳

故、外様・譜代ノ弁別ナク、各々

皇國之土地ヲ預リ居候者共故、譬ヘハ大藩ハ五人、小

藩ハ一人ト申様之割ニテ、其他是ニ准シ、武勇卓絶忠

誠ノ士ヲ貢獻致サセ、所謂什伍ノ法ヲ以テ隊長ヲ置キ、

是ヲ十隊或ハ二十隊トシ、各左右兵衛門ノ尉ナト相授ケ、真実

朝廷ノ御旗本ト致シ、是ヲ統括スルハ人オ才ヲ御撰擢有

之度、尤モ統括ノ任ハ摺紳ノ輩ニ可有之候得共、何分

數百年來武事ヲ度外ニ置候者共、俄ニ強悍ノ徒ヲ御シ

候事甚タ以テ難キ事ニ候得共、先号令ヲ嚴明ニ致シ、

約束不隨輩ハ、急度嚴科ニ被行候權ヲ赦シ置カレ、弓

馬・槍刀之技ヨリ進退駈馳之節ニ至ル迄、總テ教師ヲ被

立置、毎月三度計帷ノ辻ト中様ノ場所ニテ駈馳為致、

進退周旋鳥合ノ風習無之様練熟致サセ、隔月位ニハ演

武場ニテ晴ノ試合為致、乍恐時々

叡覽モ有之候様仕度、譬ハ御花鳥ノ如キ空地ニ長屋ヲ

拵ヘ、是ニ貢士ヲ平常住居為致置、非常之節ハ比屋相

通シ、速ニ

皇居馳參リ候様致置、其節ハ各隊長之目印有之候旗ノ

類ヲ持來、隊長ノ下知ニ随ヒ周旋可有之、隊長ヘノ命

令ハ、總括ヨリ致下知候ト申様ニ致シ置候得ハ、多々

益々弁スル訳ニテ有之候、平時小訓練ハ右長屋ノ傍ノ

空地ニテ、鳥銃并ニ弓馬等日々練熟致シ、堂上其外所

望ノ輩ハ、出席稽古等随意有之候様致置度存候、若貢

士ノ内闕ニ相成候ハ、本藩ヨリ又々可貢、其外草莽之士ト雖、実ニ御用ニ相立候者ハ被召出可然哉、尤モ御親兵之職掌ハ、鳳闕ヲ守衛仕候事専務ニテ、他御警衛向ハ是迄之通藩臣ヘ被仰付可然存候、

一右親兵被差置候テハ、兵食欠乏ニテハ難相成候間、是モ前条ニ相准シ、凡千石ニ一石ツ、万石以上之藩士ヘ不残被仰付、高割ヲ以テ現米相納候様為致候ハ、食料ハ不乏ト存候、随テ器械之類總テ是ニ准シ、皇国ノ地ヲ預リ居候大小藩ノ者共ヘ不残、何ノ器械ト申弁別ナク兵器献納為致候ハ、左ノミ諸藩ノ迷惑ニ相成候事モ無之、且
朝廷ニテ右物件無用之器具ニ被遊候ト申義ニテモ無之候間、彼是申出候者ハ無之義ト存候、
御親兵統括布置ノ迂説、荒々見込申上候事、

實徳
公董
基修
忠光
隆訶
頼徳

六五五 〔親王席次第〕

宣嘉
〔孝明天皇紀第四にて校訂〕

自今親王宣下相濟候方ハ、座次可為三公之上候事、

但尚追可被改儀モ有之候得共、方今先如之、

一親王大臣任職之輩、八景絵間可為參入事、

一親王大臣麝香間可為參入事、

一是迄非大臣シテ麝香間參入之人ニ、自今以後内々番所

小番勤仕可有之事、

一牛車 宣下相濟候輩ハ、於宜秋門壇上下乗、宣下無

之人ハ、於檜垣外下乗勿論之事、

一雖親王相丞自今陪膳可為非藏人事、

一礼節之事、

諸家一同同様可固其人之官位事、

〔悉〕
〔文久二年戊〕

六五六 〔大樹上洛シ国家ノ治平ヲ計ルベキコト

等〕

第一

大樹早く諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ、

朝廷ニオイト相共ニ国家ノ治平ヲ計議シ、万人ノ疑ヲ散セシメ、

皇国一和ノ正氣トナシ、速ニ蛮夷ノ患難ヲ攘ヒ、上ハ祖宗ノ神慮ヲ慰メ、下ハ義臣ノ帰嚮ニ從ヒ、万民ヲ化育シ、天下ヲ泰山ノ安ニ比セラレ度事、

第二

豊臣ノ故事ニヨリ、沿海五ヶ国ノ大藩ヲ以テ五大老トシ、国政ヲ咨決シ、夷戎ヲ防禦スルノ所置ヲ為シメハ、環海ノ武備堅固確然トシテ、必夷戎ヲ掃攘スルノ功アラント思召候事、

第三

一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前前中將ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ、戎虜ノ慢ヲ受スシテ、衆人ノ望ニ協フヘクト

思召候事、

〔本〕
〔文久二壬戌〕

六五七 文久年間張紙

此度正義士馳集リ、尊皇攘夷之大曲ヲ正シ、此上為一新之、万民撫育ノ欲行仁政ノ時当リ、今以奸徒日多、第一

宮門路^{〔跡カ〕}撰家堂上方ノ名ヲ語、或ハ役所金杯ト唱へ、貧窮之輩ヘ貸附ヲ致シ、非道ノ利足ヲ奪ヒ、亦ハ国産会所或ハ仲間杯ト申シ、諸国売締之手段、依之諸色沸騰シテ、下々ノ者必死難洪之至、右等之始末一新妨ト相成、国家興敗ニモ相係リ、実以大切之時節也、右ニ引替辛酉二月難有

叡慮、御手元之黄金五拾枚、窮民之輩ヘ不洩様下賜リ、此儀下々江可申聞ト之

御勅条ニ候得共、奸吏掩之、下々江不徹故ニ知事ナシ、当霜月從薩侯献上米不残朝臣江賜リ、為見聞者垂感涙無不為仰嘆者、期難有時節ニ当リ、耽私欲下々之難洪ヲ不厭惡儀相働候者猶有之ハ、身分高下ニ不拘可令誅戮者也、

〔本〕
極月日〔文久二壬戌〕

并ニ市中家^{〔マカ〕}諸杯ト申者、畢竟無益之者ニシテ、下々之為ニハ害ニ成候者也、以後者^{〔初カ〕}ハ停止タル者也、押テ不用者加誅者也、

此札廿四日申刻迄尙取置、

昨廿四日、寺町錦小路上ル天神北隣高塀江張有之、

鹿兒島県史料編さん関係者

顧問

聖心女子大学 講師 大久保 利謙

早稲田大学 教授 竹内 理三

学習院大学 学長 兒玉 幸多

東洋大学 教授 沼田 次郎

前東京大学 教授 小西 四郎

東京大学 教授 山口 啓二

委員

鹿兒島女子短期大学 教授 北川 鐵三

鹿兒島大学 教授 桃園 惠眞

全 教授 原口 虎雄

全 教授 四本 健光

全 教授 五味 克夫

全 教授 桑波田 興

鹿兒島県立青少年
研修センター 所長 村野 守次

宮之城町 教育長 山下 千本

所長

芳 即正

総務課

岡本 政徳

安田 繁

鎌倉 繁

西迫 清成

本田 親宣

今別府 修一

蔵敷 清子

編集課

田島 秀隆

田實 勇

下堂園 純治

木山 常一

堂満 幸子

伊東 洋子

久留 涼子

鹿兒島県史料

忠義公史料 第二卷

昭和四十九年十一月八日印刷
昭和五十年一月十日発行

非売品

編集 鹿兒島県維新史料編さん所

発行 鹿 児 島 県

印刷 凸版印刷株式会社